WYVERN WAR

ムスタング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＷＹＶＥＲＮ　ＷＡＲ

【Ｎコード】
Ｎ３８５２Ｆ

【作者名】
ムスタング

【あらすじ】
山奥にひっそりと佇むミヅヒ村。そこに住む青年、シグのハンター生活が始まる。初めこそ順調な狩りを進めるシグとその親友。しかし彼らの周囲では確実に変化が起こっていた……。

プロローグ（前書き）

この小説は以前に投稿していた同タイトルを修正したものです。作者の私情により一時期削除していたのですが、この度新たに投稿させていただきたいと思います。以前の作品を読まれた方は、人物設定が大きく変わっていることもあり混乱されるかと思いますが、全く別の小説を読む気持ちで読んでいただけると幸いです。

プロローグ

明かりの点いていない、小さな部屋の中に二人の男が立っていた。

「村長、そろそろ……」

二人の内、後ろに控えた男が静かに呼び掛ける。

「……うむ」

村長と呼ばれた男は抱き抱えていたものを小さな台の上に置いた。

「……」

村長は目を閉じて頭を垂れる。
後ろの男もそれに倣う。

しばらくした後、村長がゆっくりと口を開く。

「……――目じゃ？」

「５０……です」

二人の声には悲痛の色が浮かんでいた。

「村長、そろそろ根本的な解決を目指すべきでは……？」

「やはり、やらねばならぬか…」

「やらねば……村が潰れます」

村長は深く黙考する。

やがて

「何の因果か……」と呟くと、一礼して部屋を出ていった。

後ろに立っていた男は、その部屋の中心に置かれている台を見つめる。

明かりの乏しい暗がりの中、綺麗に整えられたベッドの上に小さな――魂の入っていない――肉体が横たわっていた。

男は深く頭を下げると、村長の後を追った。

その翌日、この村の住人達は姿を消した。

第1話　新人ハンター

カーテンを開け窓の外を見るとまだ薄暗い。
早く起きすぎた。
とは思っても二度寝はできそうにない。
そもそもこんな時間に起きてしまったのは今日という日が楽しみで仕方が無かったからだ。
そう、今日は俺がハンターになる日だ。

（もう寝れそうにないし…散歩でもしてくるか。）

ベッドから起きだし、そのままの恰好でドアを開ける。
外の冷たい空気に思わず身震いした。

今は繁殖期。とはいえまだ寒冷期から変わったばかりなのでまだまだ寒い。
外を見渡してみると村全体に霧が降りている。
この村は山と山との間にある盆地なので、朝方冷え込むと今朝のように霧がでるのだ。

俺が住んでいるこの村の名前はミヅヒ村。
街から少し離れた所にある村なので物の流通が良いとはいえず、たまに生活用品が不足したりする。生活するには少し不便な場所だ。
そのせいもあってか、人口は３００人程度の比較的小さい村だ。

しかし、四方を山に囲まれているだけあって村のすぐ近くでも山の幸がたくさん採れる。
さらに、理由は知らないがこの村の周辺には飛竜と呼ばれる獰猛なモンスターがほとんど現れない。最近街へのモンスターの襲撃事件が増えているが、ここはそんな話とは全くの無縁だ。

若者が少ないので『活気溢れる』とはいかないが、静かで、平和で、そして人が温かい良い村だ。

村をグルッとまわって家に帰ると、やっと太陽が顔を出す時間になっていた。

（そろそろ準備するか。）

朝食として頑固パンを食べ、インナーに着替える。
そして、昨日村長に貰った大剣の【ボーンブレイド】を持つ。

大剣とは人間の背丈ほどもある大きな武器だ。
その超重量を活かした破壊力で敵を一刀のもとに切り伏せることを目的とした物なのだが……、何しろ自分と同じ大きさなのだ。
扱うにはかなりの筋力が要求される。
俺もこの日のために体を鍛えてきたが、ちゃんと使えるかどうかは少し不安だ。

武器も持ったので家を出て村長の元へと向かう。
ちなみに武器はあるが、防具は着てない。
本当は村の防具屋で買いたかったのだが、一人暮らしの俺には金が無かった。

しばらく歩くと、まだ朝早い時間にも関わらず家の前に男が立っていた。

若干白色が混ざった黒髪と深く刻まれた顔からその男の年期を感じられる。
しかし、それとは裏腹に隆々とした筋肉を全身に纏い、抜き身の刀のような存在感を合わせ持っている。
もうすぐ６０歳になるはずだが、１０代の俺が勝負を持ち掛けたとしてもまず勝てないだろう。
というか村の男衆全員でかかっても勝てないのではないかと思う。

「村長、おはようございます」

そう、この人がミヅヒ村の村長。
普通、村の長やギルドマスターは長生きで知識が豊富な竜人族がや

るものだが、この村の村長はなぜか人間。
何か特別な理由でもあるのだろうかと常々疑問に思っている。

「おお、シグか。おはよう。」

紹介が遅れたが今日ハンターになるこの青年、名はシグ＝ザウエルという。
歳は１７。１７０センチ、５５キロと、どちらかといえば痩せぎみの体型。
瞳は吸い込まれそうになるほどの漆黒で、同じ色の髪を短く逆立たせている。
顔もなかなかに整っており、全体的な容姿で判断すると上の下といったところだが、少し内向的な性格が欠点ともいえる。

村長は挨拶を手短に済ますと、本題にはいるべく一枚の紙を差し出した。

「これが今日行ってもらう依頼だ。」

「こんがり肉の納品ですか。」

「そうだ。これなら初めてのお前でもできると思ってな。」

この依頼はただ肉を焼いて帰ってくるだけ、確かに初心者のシグに

もできそうだ。

「わかりました。それでは早速行ってきます。」

「気をつけていけよ」

シグは軽く会釈した後、狩場に向かって歩きだした。

ミヅヒ村は山の中にあるだけあって今回の狩場【森丘】にかなり近い。

シグは２０分もたたないうちにベースキャンプに到着した。

「えっと…確か青い箱が支給品ボックスだよな。」

二つの箱のうち青い方を覗き込むといくつかの支給品が入っていた。

「肉焼くだけだし…これだけでいいか。」

シグは地図と携帯肉焼きセットを取り出してキャンプから出た。

「ここが狩場か…」

細部こそ違えど、見慣れた山に見慣れた森、見慣れた川に見慣れた草原。
どこを見ても村周辺の光景と大差ない。

しかし今までいた場所とは違う。
ここは狩場なのだ。
ここでは昼夜問わず弱肉強食の戦いが繰り広げられている、危険な場所。
遠足気分では命がいくつあっても足りないというものだ。

「……よしっ」

シグは気合いを入れ直して獲物を探し始めた。

獲物はすぐ近くにいた。

草食モンスター【アプトノス】
温厚な性格で反撃をすることはあっても、他の生き物を自分から襲うことはまずない、大人しい生き物だ。
しかし、力のないものは食われるのがこの世の摂理。
生態系の下方を担っている彼らを、人間や他のモンスターから見れば食料でしかない。

シグはゆっくりと“獲物”へと近付く。
アプトノスはシグが近付いても、逃げるどころかまだ草を食べ続け

ている。

（こいつを殺さないといけないのか…）

人畜無害の生き物を殺すのは気が引けたが、これもクエストのため。
思い切って大剣で斬り付けた。

辺りにアプトノスの悲痛な声が響き渡る。

体にめり込んだ武器から、肉を斬る感触がシグの手に如実に伝わる。
そして、噴水の如く吹き出す大量の返り血を全身に浴びた。
初めて見る大量の血とその臭いに一瞬気が遠くなる。

（くそっ、こんな事で……）

なんとか気絶するのは堪えたが、力が抜けて体が動かない。

その時、風切り音が耳に届いた。
ハッと顔を上げた瞬間、胸に衝撃が走り2メートルほど吹っ飛ばされる。
そのまま受け身を取ることもできず、背中から地面に打ち付けられた。

「クッ…」

初めて味わう痛み。

倒れたまま自分の前に立っているアプトノスを見て、何が起こった

のかやっとわかった。
どうやら奴の尾による攻撃を受けたようだ。

脇腹に大きな裂傷ができたアプトノスは、尻尾を高く振り上げて精一杯の威勢を込めて敵を威嚇する。
その間にも、シグから受けた傷から赤黒い血がとめどなく流れ、腹部を伝い、そして青々とした緑の絨毯を汚していく。
それでも生への執着を捨てる事なく、己の最大で唯一の武器である尻尾を振りかざしながら敵に立ち向かう。

「……」

そんな草食獣の姿を、シグは呆然と見ていた。

……そうだった。
さっき自分でいった通り、ここでのルールは強い者が生き残り、弱い者が殺されるという単純明快なものだ。
だからといって、結果的に負けた者が簡単に命を手放したわけじゃない。
みんな精一杯抵抗して、命懸けで戦って、死を目前にしても絶対に諦めず、それでも駄目だった時、初めて強かった者と弱かった者が決まるのだ。

ゆっくりと立ち上がったシグの顔つきは、先ほどとはまるで違っていた。

このアプトノスは獲物じゃない。敵だ。
本気で殺りにいかねば……

「……殺される」

初めて敵と向かい合ったシグは、強者となるために大剣を振り上げた。

数分後、シグはすでに息絶えたアプトノスの前に立っていた。
この“敵”は最後まで生きることに執着し、立派に戦い、そして猛々しく散った。
その後、アプトノスから生肉を剥ぎ取ったシグだが、その前に初めて自分が摘み取った命に対して冥福を祈った。

第2話　豚とトカゲ

ミヅヒ村にある小さな学校、その裏手に回って少し行ったところに、立派な桜が何本も立っている場所がある。
三人の大人が目一杯腕を伸ばしてやっと一周回れるほど太い幹に、六メートルはあろうかという高さ、そして繁殖期ともなれば枝いっぱいにピンク色の花を咲かせ、人の目を楽しませてくれる。

そこにシグはいた。
まだ夜が明け切らないこの時間に夜桜を肴に一杯と洒落込んでいる……、わけではなく、単に眠れないからここに来ただけである。

ここは、シグが村の中で一番好きな場所だ。
何かとここに来ては桜を見上げてることが多い。
桜吹雪が綺麗なこの時期だけではない。
深緑の葉が生い茂る季節も、その葉が落ちて木が丸裸になる季節もシグはよくここに来ていた。

何故そんなにこの場所が気に入ってるのか。
以前、友人にそう聞かれた時は答えられなかったし、今も思いつかない。

ただ、この桜を見ているといつも不思議な気持ちになるのだった。
嬉しいような、悲しいような。
楽しいような、恐ろしいような。
心の底からワクワクしてくる事もあれば、涙が零れるほど切なくなる事もある。
声を出して笑うほど愉快な気持ちになる事もあれば、何かから逃げなくてはという焦燥感に襲われることもある。

ただ、最後には決まって幸せな気持ちになれる。
だからここが好きなのかもしれない。

「っと、もうこんな時間か」

東の空が大分明るくなっている。自分が思っていた以上に時間が経っていたようだ。
今日の狩りの準備をするため、シグは自宅へと向かった。

「ん…シグか、おはよう。今日はどのクエストに行くんだ？」

村長と軽く挨拶した後、依頼書の束を受け取る。

このクエストを依頼しているのはミヅヒ村の住民達だ。
危険が少ないこの村では、依頼書の束といってもその厚さはたかが知れてる。
だが、今日行くクエストはたいていどんな時でも依頼にある。

「これにします。」

すぐにその依頼書を見つけ村長に渡した。
村長はそれを受け取ると、書かれている文字の連なりを目で追う。

「ランポス三体の討伐か、肉食モンスターは危険だから気をつけろ

よ。」

「大丈夫です。今回はちゃんと防具もつけていますから。」

そう、シグは初めてのクエストで防具を付けずに行き、痛い目をみたので、この一週間クエストに行って蓄えた金で【ハンターシリーズ】を買ったのだ。

ハンターシリーズは駆け出しのハンターがよく使っている防具だ。あまり防御力に期待はできないが、大型モンスターと戦うことのない新米ハンターには安価なこの装備は重宝される。

「ふむ。……おお、そうだ。もし見かけたら特産キノコを採ってきてくれんか？」

「はぁ、いいですけど……」

「すまんな、ストーナーの奴が急に言うから困っとったんじゃ。」

ちなみにストーナー家とはシグのお隣りさんだ。

そこの一人息子とシグは親友だったりする。

「それではそろそろ行きます」

「おお、食われんようにな」

村長の物騒な一言を聞きながら村を出た。

「ランポスってどこにいるんだ？」

森丘を徘徊して早一時間。
ランポスが見つからない。

めぼしい所は行ってみた。
アプトノスがよく集まる草原。
重要な水場となる泉。
見晴らしの良い高台。
しかし、どこにもそれらしいモンスターはいなかった。

「ここに入ってみるか…」

目の前でパックリと口を開けている洞窟を眺めた。

洞窟に入って早一時間。

まだランポスが見つからない。

「何で見つからない…」

洞窟の隅々まで行ってみた。
ケルビの群れがいた広場。
水が轟々と流れる滝。
骨が散乱していた飛竜の巣。
しかし、どこにもランポスの影はない。

「ここに行ってみるか…」

洞窟を出て、鬱蒼と木々の生い茂る森を見上げた。

森に入って早一時間。
やっぱりランポスが見つからない。

「なんか挫けそ……」

こんなに見つからないものだとは知らなかった。
自然とうなだれる頭を上げると、シグのちょっと自慢である視力が

ある物を捉えた。
２０メートル程先の木の根本、そこに親指くらいのキノコが生えている。
特産キノコだ。
「そういえば頼まれてたっけ…」
村長に採ってくるようにと頼まれていた事を思い出し、そちらに足を進めた。
その時だ、後ろから
「フゴ」という音が聞こえてきたのは。
不振に思って足を止めたシグを豚、もとい【モス】が追い越す。
それはもうトコトコ、トコトコとかわいらしく、目をキラキラと輝かせて――
「あ」
しまった！
そう言えばモスって――
パクッ
幸せそうな顔をしたモスが、特産キノコにかぶりついた。
そう、モスは特産キノコが大好物なのだ。
「はぁ～～」

シグは深いため息をつく。
踏んだり蹴ったりだ。
ランポスが見つからないどころか、特産キノコまでモスに横取りされるとは。
何か今日はツイてない。

幸せそうなモスを見るのはこの上なくムカつくので、シグは違う方向へと歩き出す。
しかし、ものの十歩と歩かぬ内にモスの断末魔が森に響き渡った。

「！？」

驚いたシグは、すぐに身を伏せて振り返る。

視目に映ったのは、喉から真っ赤な噴水を出して倒れている先ほどのモスの姿だった。
その体の上には青いトカゲのようなモンスターが乗っていた。

二足でモスの体を押さえ付け、鋭い歯は喉を食い破った後もまだ食らい付いている。
モスの血で赤く染まらなかった場所は青い鱗に被われ、前肢の黒光りしている爪は異様なまでに長い。
縦に細長い瞳孔は絶えずギョロギョロと動き回り、獲物が本当に死んだか確かめているようだった。

やっと見つけた。
あいつがランポスだ。

さて、念願の相手に出会えたので、次に考えることはいかにして倒すかだ。
やはり一番良いのは奇襲をかけることだ。
今ランポスは獲物を仕留めた、となれば次に起こす行動はここで食べるか、巣に持ち帰るかのどちらかだろう。
できれば前者の方が嬉しいが、どちらにせよ奇襲するにはもってこいのシチュエーションだ。

シグは中腰のままランポスの背後へと移動する。

目を血走らせながら辺りを警戒していたランポスだが、しばらくして安心できたのか、モスの死骸にがっつき始めた。
柔らかいモスの腹を食い破り、内臓を引きずり出す。
黄色いクチバシが赤く染まることにも気にせず一心不乱に肉を食い漁る姿は、生きるための自然な行為とはいえグロテスクだ。
目を背けたくなるような食事風景だが、今が最大のチャンス。
活かさぬ手はない。

大剣を抜きながら、静かにランポスに近付く。
足音も、鎧が擦れる音も、どんな小さな音もたててはいけない。
細心の注意を払いながらランポスの背後2メートルぐらいまで近付いたところで、ゆっくりと大剣を持ち上げる。

ここでランポスがこちらに気付いた。
軽く跳びはねながらこちらに向き直ろうとする。

が、遅い。
一気に踏み込むことで残りの距離を縮めたシグは、重力に従って大剣をたたき付けた。

刃はランポスの右肩から斜め入り、鎖骨、背骨を砕いた後、骨盤にぶちあたって止まった。
ランポスは半身を引き裂かれ、反撃する暇なく絶命した。

「ふぅ」

何だかやけに簡単に倒せたものだ。
初めて戦う相手だからもっとてこずるかと思っていたが……嬉しい誤算だ。

シグは剥ぎ取りをしようと、背中のナイフへと手を伸ばす。
そこで、ふと思った。

特産キノコはモスに食われた。
そのモスはランポスに殺された。
そのランポスは俺に殺された。
それじゃあ次に殺されるのは？

「俺だ！」

そう叫ぶと同時に、背後の草むらから何かが飛び掛かってきた。
音だけでそれを察知したシグは、前方へと体を投げ出すことでその攻撃を避ける。

「いたた」

急な行動だったため受け身がとれなかった。
だが、とりあえず痛がるのは後回しだ。

急いで立ち上がり、武器を下段に構える。
それを見て飛び掛かってきた二匹のランポスも喉を鳴らして威嚇する。
近距離で睨み合う一人と二匹。

先に仕掛けたのはシグだった。
右足を大きく踏み込み一気に薙ぎ払う。
向かって右側にいたランポスは後ろへと飛びのいてかわしたが、左側にいたランポスはそれに反応出来ず、右前肢を切り落とされる。
勢いのついた大剣はそのままランポスの体を二つに切断するかと思われた。
しかしこの大剣、既製品なだけに切れ味が悪い。
最初に殺したランポスの血糊がべっとりと着いた刃は、それ以上敵の体に侵攻することなく運動エネルギーをもって敵を吹っ飛ばす。
一匹は片付いた。

さて、もう一匹は仲間を殺されたことで警戒を深めたのか、攻撃してくる様子がない。
だがこちらも睨めっこに付き合ってやる義理はない。

中段に構えた大剣を押し出すようにして突きを放つ。
喉を狙ったその切っ先は、目標を掠めることなく空を切った。
突きを躱したランポスはシグの懐へと潜り込み、鋭く尖った爪で襲い掛かる。

「おらぁ！」

だが、シグの攻撃はまだ終わっていない。
踏み出した右足を基点にし、体を一気に捻ることで突きから直ぐさま横薙ぎへとつなげる。

これがランポスの後ろ脚をへし折った。

シグは倒れ込んだランポスの前に立つ。
ランポスは何とか立ち上がろうとするが、足が折れていては立てるわけもない。

シグは大剣を上段に構えた。
もはや切れ味はないに等しいこの武器だが、大剣としての重量は健在だ。
シグは変に間を開けることなく、それをランポスの首へとたたき付けた。

第3話　決闘

ミヅヒ村の一角。そこでは今、平和な村には似つかない殺伐としたな雰囲気に包まれていた。
そこにいる一人、シグ＝ザウエルは2メートルはあろうかという角材を中段に構えている。

「なぁ、本当にやるのか？」

「もちろん」

「下手したら死ぬぞ」

「大丈夫、僕には掠り傷一つつかないから」

「……」

目の前にはシグの持っている角材よりも、少し細い木の棒を持った男が同じく構えている。

「ほら、かかって来ていいよ」

「はぁ……、じゃあ行くぞ！」

シグは大きく右足を踏み出すと、男に向かって何の手加減もなく角材を突き出した。

「よっ」

男はステップを踏むかのような軽やかさでシグの攻撃を避ける。
だがシグの攻撃はまだ続いている。
腰を回転させ、突きから薙ぎ払いに派生させる。

「おっと」

が、男は一歩後退するだけで避ける。
この前のクエストでランポスを仕留めたちょっと自信のある技だったのに、ここまで簡単に躱されるとは……

「今度はこっちから行くよ！」

男はそう叫ぶと右下から斬りあげ、次いで唐竹割りへと繋げる。
シグは上半身を反らして斬りあげを避けたが、男はそれを読んでいたようだ、唐竹割りへの連携が速い。

避けきれないことを悟って角材で受け止める。
男はそのまま体重をかけてシグを押し切ろうとするが、現役ハンターをナメてもらっちゃ困る。
重たい大剣を振り回して培った筋力で男を弾き返す。

男にとっては予想外の事だったのだろう。
男の体が完全に流れ、胴体ががら空きとなった隙をシグは見逃さない。
すぐに薙ぎ払う。

が、これもバックステップで避けられてしまった。
最初から知ってはいたが、かなり身軽な奴だ。
男は間を開けずに大きく踏み込むと木の棒を縦に振り下ろす。

シグがバックステップで避けると追撃するかのように突きを放つ。
しかしこれもシグは避ける。
が、男はここから右足を軸に一気に腰を捻って横薙ぎへと繋げる。
つまりこの男。シグの技を一目で見切り、真似たのである。
しかしシグもこの男のことはよく知っている。
自分が突きを横に躱したら間違いなく薙ぎ払いをすると思っていた。
シグはしゃがみこんで棒を躱すと、そのまま男に体当たりを食らわす。
シグよりも体の線が細いこの男は簡単に吹き飛んだ。

「……いつつ」

地面に転がった男は少し痛がる動作をしたが、すぐにハッと顔を上げる。
追い撃ちをかけようとするシグがすぐそこまで来ている。
シグは何の躊躇も手加減もなく渾身の一撃を打ち込んだ。

「今のは危なかったね」

シグの攻撃を躱しながらもすぐに立ち上がった男はそう言った。
シグの一撃は角材の端が地面にぶつかって砕け散るだけに終わったのだ。

ちなみにこの男、口ではそんな台詞を言っているが顔は相変わらずにこやかだ。
その余裕がカンに障る。

「はっ！」

今度は男から仕掛けてきた。
男は唐竹割りから斬りあげ、袈裟斬り、左薙ぎ、そのまま一回転してもう一度左薙ぎと怒涛の連続攻撃を繰り出す。
だが、男の太刀筋が見えてきたシグには攻撃が当たらない。
唐竹割りと斬りあげは後ろに下がり、袈裟斬りで体を入れ替え、薙ぎ払いはしゃがみ、次いで距離をとる。

「くっ」

この男は馬鹿じゃない。
シグが攻撃を見切っていることにもう気付いたようだ。
それでも攻撃の手を緩めることはしない。
袈裟斬り、突き、斬りあげ、もう一度袈裟斬り、、左薙ぎ、右斬りあげ、唐竹割り、そして突き。
いろいろな角度から猛攻を仕掛けるが、シグには掠りもしない。
男は悟った。
このままではシグに当てることはできない、と。
そしてもうすぐ自分はスタミナが切れしてしまう。
そうなる前にシグに勝たなくてはならない。
ならば全てを一撃に込めて――

シグは男の攻撃を受け止めることなく、ひたすら躱し続けている。
だが、ただ逃げてるわけではない。
この男に手数では勝てない。
となれば、隙を作りだして一気に勝負を決めるほかない。
そのためのタイミング掴むために避け続けてきた。
そして大体は掴めてきた。
この流れでだとそろそろ“あれ”がくるはずだ。
その時に――

「はあぁああ！！」

男は持てる限りの力を一撃に込める。

（来た！）

唐竹割り。これを待っていた。
シグは常に下段に構えていた角材を一気に斬りあげる。
シグの角材と男の棒がぶつかる瞬間、わずかだが赤い光が走った。

「う～ん、相打ちかぁ」

男は頭を掻きながらにこやかに言った。

そう、相打ち。

それがこの戦いの結果だ。

シグの角材は見事なまでに切断され、男の木の棒はへし折れた。

よってこの勝負引き分け。

「納得できない」

シグは角材を見つめながらムスッと言い放つ。

「何で木の棒で切断できるんだ？」

「さぁ……、村長何でです？」

「……ふむ」

男はこの戦いをずっと見ていた村長に話を振った。

「まぁ、十中八九鬼人斬りだろうな」

「鬼人斬り……、ユークがあれを使ったと？」

「うむ、決着の時ユークの棒が赤く光った。間違いないだろう」

鬼人斬り
主に太刀使いが使う技だ。
自らの体内で練った練気を刀に纏わせ、切れ味を通常の何倍にも上昇させる技。
ハンターの中では広く知られているが、実は扱える者はごく小数に限られている。

「そんな凄い技をユークがね…」

シグは“男”ことユークに視線を向ける。

本名ユーク＝ストーナー
シグと同じく１７歳。
身長１７５センチ。
体重５７キロ。
背はシグよりも高いものの、筋肉質というよりはすらりとしたスマートな体格だ。

そしてかなりの美少年だったりもする。
顔は全体的に整っており、どんな時でも微笑んでいる細長の目が優しげな雰囲気を醸し出している。
瞳はシグと同じく黒色だが、肩まで伸びた明るい緑色の髪が同年齢のシグとは異なった印象を見た者に与える。
ちなみにシグとは小さい頃からの親友で、家はシグと隣同士。
前のクエストで急遽特産キノコを採ってきてくれ、と言ったのも彼の家族だ。

「それで村長、審査はどうなりましたか？」

「ふむ……」

今ユークが言った審査とは、ハンターになっても大丈夫か見極めるためのものだ。

「高い志に将来性のある腕、更には才能まで持ち合わせとる者の未来を妨げることはできんな。よし、ユーク＝ストーナーをハンターとして認めよう！」

「ありがとうございます！」

ユークは深々と頭を下げる。
そんな彼を見て、シグは内心ため息をついた。

（高い志、ね……）

それではユークの思いがどれほど強いのか、彼がハンターを志すようになった場面を思い出してみよう。

時は現在より一時間前。
今日のハンター稼業は休みと決めていたシグは、ユークの家へと遊びに来ていた。
ひとしきり騒いで疲れた二人は、シグは椅子に座り、ユークは床に寝転がって本を読んでいた。
そしてユークはおもむろに口を開く。

「そうだ、ハンターになろう」

「は？」

以上、回想終わり！

この流れでユークがどんな“高い志”を持ったのかは知らないが、とりあえずシグには理解できない。

だが、村長に対しては

「ハンターとして生きたい」という題でやたらと熱く、長い話をしていたから彼なりに考えているのだろう。

……多分

「それじゃあシグ、これからもよろしくね」

シグはもう一つため息をつきながら、差し出された手を握った。

第４話　親友？

ざわつく木々
駆け抜ける風
宙を舞う花びら
風に巻き上げられたそれはどこまでも青い空のキャンパスを、地に降り立ったそれは深緑の生命溢れる大地をピンク色に染める。
咲き乱れる桜は風と共に踊り、太陽と共に輝き、緑と共に世界を彩っていた。

桜の木。その根と根との間に身を沈めたシグは、肩に乗った花びらを指で弾いた。
着込んだ鎧の上には桜の花びらがいたる所に舞い降り、飾り気のない金属の板に鮮やかな模様を描く。
側に無造作に置かれた大剣も、知らず知らずの内にピンク色の花びらに埋もれていた。

完全武装したシグは、今日もここに座っていた。
この美しい光景に目を奪われるわけでもなく、感嘆の声を上げるでもなく。
それ以前に、今は目を閉じて花すら見ていない。

それでも、暇になれば足が自然とここに向かうから不思議だ。

今日は何だが、体全体が高揚感に包まれている。
気を抜いたら体が勝手に動き出しそうなくらい心の底からワクワクしてくるような。
でもそれが出来ない理由があってじれったいような。
とも思えば、実はそのじれったさも楽しいような。
とにかく不思議で、心地良い感覚だ。

「――」

ふと、何かの音が耳に届いた。
……人の声？

「――！」

誰かが叫んでいるようだ。
何と言っているのかは聞き取れないが。

「――ゃん！」

声が少し鮮明に聞こえだした。

「――ちゃん！」

ちゃん？

「シグお兄ちゃん！」

「うわ！？」

耳元で大声を出され、シグは跳び起きた。

「シグお兄ちゃーーーん！！」

「ちょ、おま……」

「早く起きてーーー！！！！！」

「うるさ……！」

「学校遅れちゃうよーー！！！！！」

「だまーーー」

「起きてくれないとユークこまっちゃいますーーーーー！！！！！

！！」

「だ――」

「おにいいいーーいちゃぁぁぁぁーーーんんん！！！！！！！！」

「だ・ま・れーーー！！！！！」

怒りのコークスクリューがユークの顔面に炸裂した。

「はい、依頼書」

赤く腫れあがった頬を押さえながらユークが紙を差し出す。

「……」

耳鳴りがする耳を押さえながらシグが無言でそれを受け取る。

「はぁ？」

依頼書に軽く目を通しながら、低い声でそう返す。

「ドスランポス？」

「Ｙｅｓ，ＤＯＳＵＲＡＮＰＯＳＵ」

「……何で？」

「ＮＡＮＤＥ？　Ｉ　ｄｏｎ'ｔ　ｋｎｏｗ　ｗｈａｔ　ｙｏｕ　ｍｅａｎ．」

首を竦めた後ＨＡＨＡＨＡ！と笑うユーク。
どうやら彼のテンションは変な方向に驀進中らしい。
そんなユークに無言で拳を振り上げるシグ。

「あぁぁ！ウソ、ウソ！」

慌てて手を振ってシグの凶行を未然に防ぐ。

「……で、何で初めての狩りがドスランポスなんだ？」

拳を下げながら問う。

「ドウセタオスナラオオキイホウガイイジャナイヒリュウハムリデモコノクライナラボクデモタオセルトオモッテネソレニ――」

「普通に話せ」

「ドスッテナンカボスミタイデエラソウダシ――」

今度は止められる前に右拳を振り切った。

「……いたい」

両方の頬を撫でながらユークが涙目で呟いた。

「……で？」

相変わらずドスの聞いた声で問い掛ける。

「大きいのが倒したいんです…」

ユークはすっかりしょぼくれてしまった様子だ。

「初めてでドスランポスに勝てるわけないだろ。」

シグが厳しくも当然な現実を突き付ける。

「でもでも、シグさんもいますし、ちょっとくらいなら僕も自信ありますし、初陣くらい華々しく飾りたいですし……。」

ユークはもごもごとよまい言を並べ立てる。

「取り消してこい」

「え？」

「契約、取り消してこい」

ついには正座までしたユークを見下ろしながら、シグは冷たく言い放つ。

「で、でも…シグさん。僕――」

「取り消してこい」

「……はい」

ユークは依頼書をシグから受け取ると、来た道をとぼとぼと戻り始めた。

これ以上ないというほど肩を落とした姿は、さすがに同情する。

「プッ」

負のオーラを全力開放しているユークが、突然変な声をだす。

「くく」

シグも同様に声を漏らす。

「「あははははははははははははははははははははははははははは！！！」」

突然、二人が同時に大笑いしだした。

「ははははは、ははははははははははは！！！」

二人とも腹を抱えて馬鹿笑いを続ける。

「くくくく……。お～い！もういいだろ、ユーク！」

シグがそう呼び掛けると、ユークが満面に笑みを湛えて走り寄ってきた。

「いや～、面白い寸劇だったね」

ニッコリと微笑むユーク。

「ああ。なかなか迫真の演技だったろ？」

ニヤリと笑ってみせるシグ。

二人はしばらくの間、肩を震わして笑いあった。

「さてと、ドスランポスか……」

シグはひとしきり笑うと顔を引き締める。

（正直、ちょっとキツイな…）

それがシグの本音だ。
ドスランポスとは以前シグが倒したランポスの親分役。
当然、実力は子分のランポスとは比べものにならない。
シグもまだ挑んだことのない相手だ。それに

ユークのことをチラリと見る。

ユークは初めての狩りだ。
大量の血を見たこともなければ、命懸けで戦ったこともない。
そんな親友がどこまで戦えるのか――

「僕なら大丈夫」

ユークがにっこりと笑ったまま、そう唐突に言った。
急にそんなことを言われて、シグは目を白黒させる。

「今僕がちゃんと戦えるか考えてたでしょ」

「あ～、まぁその…」

考えを見透かされたことを知り、さらにシグは動揺する。

「はは、シグは何を考えているかわかりやすいからね」

ユークはさらに笑みを深める。

「でも大丈夫。僕はそんなにヤワじゃないよ」

「……」

そんなことを言われるとダメだとも言いにくい。

「……わかった」

シグは渋々同意した

「あ、それと」

「ん？」

「最初のパンチは本当に痛かったんだけど」

「手加減する気なんて微塵もなかったからな。当然だろ」

「あ、なるほどね！」

シグとその一番の親友は仲良く村の出口に向かっていった。

第5話　DOSURANPOSU

心地良いそよ風が木々の間をすり抜ける。
風に煽られた木の葉がざわざわと音をたて、それに合わせて葉の間から降り注ぐ陽光も揺れ動く。
辺りに動くものはなく、どこまでも静まり返っていた。

そんな静寂が広がる森の中、一人の少年が世話しなく動きまわり、もう一人の少年がやや遅れがちに後を追って歩いていた。

「あっ！シグ、あれあれ！」

活発に動きまわる少年、ユークが目を輝かせて何かを指差す。

「……どれだ？」

ユークの後をゆっくりと歩く少年、シグが目を細めた。

「これ！」

ユークは異様とも言える程赤々としたキノコをちぎり取って、頭上に掲げる。

「ああ、それはニトロダケだ」

「へ～」

ユークは奇怪な色をしたキノコをまじまじと見つめる。
しばらくキノコとにらめっこをした後、それをポーチに突っ込みな

がら、またキョロキョロと辺りを見渡す。
そして何かを見つけたのか、川辺へと走って行った。
シグもため息をつきながらその後に続く。

「うわ〜〜！」

ユークの興奮した声が森の中に響いた。
シグは何事かと慌てて駆け寄った。

「何あれ！？あの金色の魚！」

ユークの視線の先にはきらびやかとも、けばけばしいとも言える魚が悠々と泳いでいた。
その魚の希少価値を知っているシグは軽く目を見開く。

「あれは黄金魚だ。売ったら結構高いぞ。」

「ホント！？僕捕って来るよ！」

「あ、おい――」

シグが止める間もなく、ユークは小川へと入って行った。
浅い水辺で魚を追い回すユークを見ながら、シグはもう一度ため息をついた。

上の会話ように、狩場である森丘に着いてからユークは見る物見る物全てに目を輝かせ、その度にシグを質問攻めにする。
正直に言うと面倒くさい。

しかし、ユークの気持ちが分からなくもない。
ここには村にない物が沢山ある。
毒々しい色合いのキノコ
不思議な効能を持つ草花
いろいろな形の昆虫
そして人間よりも大きなモンスター

それらを見つける度に観察して、手に取って、どんな特性があるのか、どんな加工ができるのか想像を膨らませるのはとても楽しい事だ。
シグでさえ、最初の頃は多少なりともワクワクしたのだから。

だが、ここが弱肉強食の世界だということを忘れてはいけない。
そして、モンスターと呼ばれる生き物は人間より遥かに優秀な目と鼻、耳を持っているものだ。
それ故、今のユークのようにバシャバシャと大きな水音をたてていると、すぐに見つかる。

シグは背後に気配を感じた。
やっと来たか、と心の中だけで呟く。
これだけ派手に音をたてて動き回っていたんだ、もっと早くに見つけてくれると思っていたが……
「……ユーク、来たぞ」
背後の敵に悟られないよう、静かに呼びかける。

「うん」

ユークは間髪を入れずに返事を返すと、小川から出ようとこちらに振り返った。

その時、背後の気配が動いた。
急速に接近している。
シグは抜刀しながら振り返る。

視界に入ったのは二匹のランポス。
横に並んだ二匹は前傾姿勢でこちらへ駆けて来る。

シグはすぐに大剣を肩に担いだ。
一匹目のランポスが間合いに入る瞬間、体中の全筋肉を総動員して身の丈もある剣を叩きつける。

破壊力は抜群。
タイミングも申し分ない。
が、その武器の重量故に如何せん攻撃が直線的すぎた。
大剣は獣の肉ではなく地面を抉る。
しかし、シグは地面にめり込んだ大剣を中心に素早く半回転。
その勢いのまま薙ぎ払う。
対するランポスはバックステップをしたばかり。
不十分な体勢では避けきれなかった。

シグは倒れゆくランポスから目を離し、辺りを見回す。

もう一匹のランポスはユークの方へと向かっていた。

迎撃するユークは右足を前に出し、腰に下げた太刀に右手を添えて待ち構える。
居合い抜きの構えだ。
シグが助けに入ろうと足を踏み出すと同時に、ランポスもユークに向かって飛びかかった。
ランポスの大きく開かれた口から、歪で鋭い牙が姿を現す。
しかし、ユークは避けるどころか身動き一つしない。

人間よりも大きな肉体を持つ獣が覆い被さるその瞬間、ユークが抜いた。
シグでさえ一瞬見失うほどの速さで振られた鉄の刀は、ランポスの喉を容赦なく引き裂く。
致命傷を負った獣は、着地することもできずに地面に叩きつけられた。
そのランポスは血を撒き散らしながら足をバタつかせていたが、しばらくすると白眼を剥いて痙攣を始めた。

「凄いなユーク。初めてでここまでやれるなんてな。」

シグが大剣を背中に戻しながら、ユークに近づく。

「…まぁね」

ユークも太刀【鉄刀】を着いた血糊もそのままに、腰に提げた鞘に収める。

「気分はどうだ？」

「そりゃあ……、良くはないさ」

ユークが倒れたランポスに目を向けると、すでに痙攣も収まっていた。

油断していたとも言えるし、仕方がなかったとも言えると思う。
何しろ、彼は初めて命を奪うという行為を行った直後だったのだし、
これほど無惨な死骸を見るのも初めてだったのだ。
ほんの数秒の間、放心状態に陥ってしまっても仕方がないことだ。

だからと言って、敵は見逃してくれない。
隙があればそこをついてくるし、獲物が強かろうと弱かろうと――
いや、弱ければ弱いほど容赦なく襲い、躊躇なく殺す。
それは明日への糧を得るための、必須かつ至極当然な行為だ。
だから、ある意味この結果は必然だったのかもしれない。

ユークが突然消えた。

代わりに異様なまでに大きな体躯のランポスがシグの目の前に突如

として現れた。
頭の中が白く染まる。
急激な状況の変化に脳がついていかない。
自分の目を疑いもした。

だが、それも一瞬のこと。
パニックに陥りそうになるのをぐっとこらえ、シグは背中の大剣に手を伸ばす。
すると、そのランポスは俊敏な動きで後ろに飛び退いた。

速い
大剣を構えるどころか、まだ柄すら掴んでいないのに間合いから逃げられた。
あの運動能力の高さ、通常のランポスよりも二回りは大きな体。
特徴的なオレンジ色のトサカ。
間違いない。ドスランポスだ。

「ユーク、大丈夫か！？」

背後に向かって声を掛けると、
「何とか……」という弱々しい声が咳き込む音と共に返ってきた。
ユークはドスランポスに後ろから襲われたのだ。
押し潰されたのではなく、突き飛ばされたのは不幸中の幸いだった。
吹き飛んだことでぶつかった衝撃を逃がすことができたはずだ。
傷は深くないだろう。

「ポーチに入ってる緑色の液体を飲んどけ！」

それだけ言うと、シグはドスランポスへと向かって駆け出した。
動きが制限されるため、柄に手を添えただけで抜刀はしない。

待ち構えるドスランポスは、体勢を低くして喉を鳴らしている。

まずは様子見の一撃。

素早く大剣を抜き、腕の力だけで縦に振り下ろす。

威力よりも速さを優先させたはずなのだが、いとも簡単に避けられた。

間を開けずに大きく左足を踏み出すと、限界まで捻った腰を一気に回転させて下から斬り上げる。

ドスランポスは上体を後ろへと反らして避けようとする。

その兆候を察知したシグは、まだ振り切らない内に手の中で大剣を回転させ、お世話にも鋭いとは言えない刃をドスランポス目掛けて叩きつける。

ドスランポスの体勢は完全に崩れている。

にもかかわらず、スルッと大剣をかわすとシグに対して反撃を開始した。

大剣が地面にめり込み、完全に無防備なシグに向かって並みのナイフの何倍も鋭い爪を振るう。

シグは急いでしゃがみ、爪が通り過ぎたのを確認する余裕もなく大剣を引き抜く。

すぐさま、その大剣を相手に剣の腹が見えるような形で眼前にかざし、空いた左手でがっしりと固定する。

その直後に、ドスランポスのもう一方の爪がぶつかった。

凄い力で押される。

大きく開いた足が地面をえぐりながら後退する。

ガギャギャギャという硬い物を削る音と共に、骨で作られたシグの武器に七本の爪痕が刻まれる。

あまりに強い衝撃にそのまま吹き飛びそうになるが、歯を食いしばってそれだけは耐える。

全身を覆い込むような強い衝撃が消えた瞬間、シグは急いで後ろへと下がった。
一度間を開け、仕切り直しだ。
だが、それは敵が許さなかった。
シグがバックステップをした時、ドスランポスも同時に跳びかかっていたのだ。
「くっ！」
こんな不完全な体勢で迎撃などできるはずもない。
仮に出来たとしても、力負けするに決まっている。
シグは可能な限り、遠くへと横転した。
その甲斐あってか、ギリギリ避けることができた。
シグは転がった直後の、片足だけ膝立ちした姿勢のままドスランポスの足を薙ぎ払う。
こればかりは、さすがのドスランポスも避けれない。
シグの相棒、ボーンブレイドの刃がランポス特有の青い鱗を引き裂き、健を切断し、骨を砕いた。
ドスランポスが聞く者の耳を潰すような奇声を発しながら倒れる。
完全には切断出来なかったが、皮一枚のところでつながっているドスランポスの足からは、明らかに致死量を超える血が噴水の如く吹き出す。
だが、それをシグが見ることはなかった。

「ぐあっ！？」

何たる不運か。
ドスランポスの強靭な心臓から高い圧力で押し出された血が、シグの全身に、顔に、目に直撃した。

「ぐうぁあああぁ！！」

全く予想していなかった激痛に、シグは目を押さえてうずくまった。

痛い！
痛い痛い！！
痛い痛い痛い！！！
さっきは頭が真っ白になりかけたがたが、今度は真っ赤になりそうだ。
本当の本当にパニックになりかけたが、持ち前の自制心で何とか踏みとどまる。

だが痛い！！
ほんのちょっと目を開こうとしただけで激痛が走る。
ドスランポスの死と引き替えと思えば安い代償かもしれないが、痛いことには変わりない。
早く水で洗い流さないと……

ユークに助けを求めようと口を開けると、口の中も不愉快な鉄の味でいっぱいだった。

「お、い……ユー、ク」

しかし、ユークからの返事はなかった。
代わりに返ってきたのはキシャアアアという掠れたような、蛇の鳴き声のような声。

「な、に……？」

それは紛れもない。
ドスランポスが喉を鳴らす音だった。
一緒にズルズルという這いずる音も聞こえる。
しかも、聞く限りではゆっくりと近づいてきているではないか。

絶体絶命だ。
目が見えない以上、逃げることはできない。
しかし、このままでは確実に殺される。

「くそっ！」

シグが悪態をつくのと同時に、ドスランポスが雄叫びをあげた。

第6話　カビか否か

「く、うぅ～～」

ベッド上で上半身を起こしたシグは大きく伸びをした。
そのまま少しの間ぼーっとしていたが、しばらくしてはっと思い出したように目に手をやる。
手のひらを近づけてみたり遠ざけてみたり、シパシパと何度も瞬きをしてみる。

「……大丈夫そうだな」

そう呟くと、シグは再びベッドに倒れこんだ。
頭の下で両手を枕がわりに敷き、眠気で濁った目で天井を見上げながら未だ覚醒しきってない意識で昨日のことを思い出す。

結局、ドスランポスを倒したのはユークだった。
俺の目が潰れたすぐ後にとどめをさしたらしい。
助けてもらったわけだし、まぁそこまでは良い。

問題はそこからだ。
血をもろに浴びた目を洗うために俺が水を要求したら、奴は水ではなく回復薬を寄越しやがった。
目が見えない俺は気付くはずもなくそれを使った。

煙が出た。
眼球から。

おかげで再び悶絶することになった。

後でユークに問い詰めたら、完全に洗浄するには水よりも薬を使った方が効果的だから騙した。らしい。
その時のユークの惨状を思えば、この弁解も明らかに手遅れだったけどな。

「……よっ」

シグは体を起こすと、もう一つ伸びをしてベッドから出た。
そのままよたよたと食料を入れているボックスへと近づき、ボックスの縁に取りついて中を覗き込んだ。
中に入っていたのは……

【頑固パン・1斤。ドライマーガリン・8瓶。サシミウオの頭・1つ。黄金芋酒の空瓶・5つ。青色や緑色のフサフサした何かが付いたホワイトレバー・2切れ】

「……」

思うところは沢山あるが、とりあえず朝食用の頑固パンと食べた覚えのないサシミウオの頭、飲んだこともない高級酒の空瓶を取り出した。
頭と瓶をゴミ箱に放り投げつつ、テーブルへと向かう。
椅子を引いて座ろうとしたが、パンを食べるためだけに座るのも馬鹿らしいと思い直して、立ったままかぶり付いた。
シグは口の中の水分を根こそぎ吸い取るパンをもさもさと咀嚼しながら（あのレバー食えるかなぁ……）とか考えていた。

朝食を食べ終わったシグは砥石と大剣を掴み、手頃な椅子を小脇に抱えて家の表に出た。
相棒である大剣【ボーンブレイド】をたまには本格的に研ぎ直そうと思ったのである。

思っていた以上に日が高いことに驚きながら、持っていた物を地面に下ろして小川で水を汲んでくる。
澄んだ水をなみなみと注いだバケツを脇に置き、椅子に座って大剣と砥石に水をかける。
そして右手に持った砥石を刃にあてがい、砥石の方を動かして研磨し始める。
本来なら刃物を動かして研ぐのが常識だが、大剣は巨大過ぎるのでそれができない。
故に、この研ぎ方が大剣使いでは常識となっているらしい。

春らしい暖かな陽光と爽やかな風に包まれながら、シグはひたすら手を動かし続けた。

「ふぅ、こんなもんか」

シグが手を止めた頃にはとうの昔に太陽が頂点を通り過ぎていた。
数時間ぶりに立ち上がったシグは手を頭上に上げて思いっきり伸び

をしたり、肩をぐるぐる回したり、首を鳴らして凝り固まった体をほぐした。
その後、大剣を目線の高さまで持ち上げて最終チェックをする。
その結果に満足したシグは、使った道具を持って家の中に引き上げた。

さて、遅めの昼食にしよう。
と考えるに至って、やっと食べ物が無いことを思い出した。
それでも、一応何があるか確認しておこう。
もしかすると朝は思いつかなかっただけで、何かしら料理が作れるかもしれない。

え～と……色とりどりの何かが付いたレバーが2切れにマーガリンがいっぱい。

「……」

シグは腕を組んで深く黙考する。
この問題の一番のポイントは、このレバーに付いているのが何か、ということだ。
一見するとカビに見える。
だが、決めつけるにはちと早計だ。
もっと観察してから判断するのが妥当だろう。
まず、鼻を近付けて匂いをかいでみる。

うん。臭い。

次に指で軽く触れてみる。

見た目通りのフサフサ感が気持ち悪い。

「……」

以上の視覚、嗅覚、触覚から得られた情報を元に、この奇怪なフサフサの正体を判断するに……

「それカビだよ？」

そうカビだ。

いや、本当は最初から分かっていたさ。

ホワイトレバーなのに白い部分が全くない時点で。

もはやレバーというより、緑色のモコモコ＆ａｍｐ；モサモサな物体でしかない時点で。

だがしかし！

認めたくなかった。

これが。レバーに付いているこれが。最後の食料に付いているこれがカビだなんて。

もし！仮に！これがカビだと認めてしまったら、俺は……

「買い出しに行けば？」

買い出しに行かなくてはならなくなる！

面倒くさい面倒くさい買い出しに。

何が面倒かって、ここから村唯一の食料店まで五キロはあるってことだ。

……行きたくない。

ああ、行きたくない。

しかし、行かないと昼食どころか夕食、さらには明日の朝食まで抜

きになってしまう。
さすがにそれは辛い。

「諦めて行きなって」

しょうがない、行ってくるか。
往復十キロのちょっとした散歩だ。
何てことはない。

シグは引き出しから財布を取り出すと、終始無視し続けたユークを残して家を出た。

第7話　買い出し

古ぼけた木の扉をゆっくり引く。
それでもギギギという軋む音が鳴り響いて、その扉の年期を否応なしに感じさせる。
決して広くない店内を見渡しながら、シグは後ろ手に扉を閉めた。

店内は静まり返っており、人の気配がない。
そう、客はもちろんのこと、店番さえいないのだ。
無用心だとも思うが、人が全く来ない店に一日中居続けるのも大変なんだろう。
普通なら万引き犯の温床となりそうなものだが、ここミヅヒ村にはそのような不粋な輩はいない。
ユークあたりはどうか知らないが……。

シグは入り口に置いてあるカゴを持って、商品を物色し始めた。
探しているのはもちろん食料品だ。
その中でも出来るだけ安く、長持ちする食料が望ましい。
そうなると、どうしても買うものは決まってくる。

まずは主食となる頑固パンをカゴに入れる。
次いで氷樹リンゴ、ふたごキノコ、クック豆、マイルドハーブを放り込む。
他にもくず肉の肉団子、堅肉の燻製、七味ソーセージ、粉吹きチーズなどの加工品もカゴの中へ。
そのままの勢いで長寿ジャムを掴んだが、少し悩んだ後に元の場所に戻した。
忘れていたが、家にドライマーガリンが大量にあるんだった。
なぜあんなに買い込んでいたんだか我ながら不思議だが、あれを全

て消費するまでは他の物は買わない方が良いだろう。
下手するとホワイトレバーの二の舞になりそうだからな。
そんな事を考えていると、カゴがいっぱいになっていた。
シグは中身を確認しながら会計へと向かった。

「すみませ～ん」

シグが店の奥に声をかけると、は～い。という声と共にバタバタと慌ただしい足音が聞こえてきた。

「お待たせしました～」

そう言って現れたのは、長い髪の女の子。
その子はシグを見るなり、落胆にも似た声を上げた。

「なんだ、シグか」

「なんだ、フィリィか」

「なんだとは挨拶ね」

「お前も言っただろ」

「私はいいのよ、私は」

「……そうかい」

シグはその理不尽な物言いに呆れながら、明らかに過積載なカゴを差し出した。

「うわっ、何よこの量。」

「俺の勝手だろ」

「私が値段計算するの面倒じゃない。減らしてよ」

「……」

買う量が多いことで店側からダメ出しをされたのは初めてだ。
こいつには儲けようという気持ちはないのだろうか？

ちなみにこいつの名前はフィリィ＝レーベル。
この店を経営しているレーベル夫婦の一人娘。
シグやユークとは同い年であり、また村の中にはこの歳が上に挙げた三人しか居なかったため、学校のクラスもシグ達とずっと一緒だった。
割りと付き合いの長いシグがフィリィのことを一言で言い表すと、わがまま娘だ。

そのフィリィは口では文句を言いながらも、計算を始めた。

「そういえばおばさんは？いないのか？」

手持ちぶさたのシグは、とりあえず気になった事を聞いてみる。

「あ〜〜、確かお父さんと一緒にどこかに行ったわよ」

目線は手元に向けたまま、フィリィは続ける。

「そうそう、お母さんがシグのこと心配してたわよ。最近買いに来てないけど、ちゃんと食べるもの食べてるのかって。」

それを聞いて思わずシグは苦笑した。

「なによ？」

シグの様子に気付いたフィリィが、まるで自分が馬鹿にされたかのようにムスッと言い放つ。

フィリィの勝気な栗色の瞳がシグを睨みつけるが、シグもこの目線には慣れてしまった。

何しろ、フィリィがシグと一緒に居るときは常にこんな目をしているのだから。

「いや、おばさんもいい人だな。って思ってな」

娘の元クラスメートとはいえ、赤の他人をそこまで気遣ってくれていたとは驚きだ。

まるで本当の母親のような事を言ってくれる。

直接言われたわけでもないにその優しさが妙にくすぐったくて、シグはまた苦笑した。

「……変な奴」

「ほっとけ」

それからしばらくは二人の間に会話はなく、フィリィは黙々と手を

動かし、シグはそれを眺めたり店内を歩き回っていた。
そんな中、フィリィがポツリと呟いた。

「……ハンターになったの？」

「ああ」

「……そう」

また会話が途切れた。
そして二人が新しい話題を見つける前に、フィリィの会計が終わった。

「ずいぶん長かったな」

「あんたのせいでしょ。え～と……全部で５０２４０００ｚね。」

「ほら、５０２４ｚ」

「相変わらずつまらない男ね」

フィリィのそんな文句には耳を貸さず、シグはパンパンに膨らんだ紙袋を持ち上げた。
あまりの重量に少しよろけながら出口まで移動すると、両手の塞がったシグの代わりにフィリィが扉を開けてくれた。

「じ、じゃあまたな」

「次からはもっと小まめに来なさいよ、一度に大量に買われるとこっちだって大変なんだから。」

シグは善処する、と言うとフラフラと覚束ない足取りで歩き出した。

「大丈夫かしら……」

千鳥足のシグを見つめていたフィリィだったが、やがてシグの姿が見えなくなると長い黒髪を翻して店内へと戻っていった。

第8話　兄妹

「つ、着い…た」

シグはやっとのことで我が家にたどり着いた。
フィリィと別れてからすでに一時間以上が過ぎている。
行きと比べると倍以上の時間がかかってしまったわけだ。
それもこれも、全てこの荷物のせいにある。
無駄に重いわ、紙袋が破れそうわで体力だけでなく精神力まで消耗した。
もし、この紙袋が食料の重さに耐えきれずに帰路の途中で破けてしまっていたら……。なんて考えただけで寒気がする。

何はともあれ、今は無事に帰ってこれたことを喜ぼう。
フィリィに言われた通り、もっと小まめに買いに行こうか？
……いや、それも面倒だ。

などと考えながら家に入ると、そこにはユークがいた。

「……何してる」

「ずっとシグが帰って来るのを待ってたのさ」

ユークがいつも通りの爽やかな笑顔で返してくるが、疲れている時にこの表情をされると、正直に言うと鬱陶しい。

「何でだ」

「ちょっと聞きたいことがあってさ」

「何だ」

丁寧に対応するのも億劫なので言葉少なげに問いながら、シグは紙袋をテーブルに置いた。

「この娘って誰なのかなぁ？」

ユークが棚に置いていた写真立てを持ち上げて、そこに写っている幼い少女を指差す。

……何ニヤついてんだ。

「妹だ」

「シグの？」

「他に誰がいるんだよ」

シグは素っ気なく答えると、紙袋の中身をボックスの中に移し始める。

食料用のボックスもあまり大きくないので綺麗に収めないと入りきらない。

まずはフィリィの所で買った氷結晶を2～3個底に置いて――

「ふ～ん、シグの妹かぁ」

重量のある肉系を底に、比較的に軽い野菜系をその上に置く。

単純なことだが、もしこれを逆に入れてしまうと肉の重さで野菜等が潰れてしまう。

まだ慣れてなかった頃はこの悲劇が立て続けに起こり、何度も食材

をダメにしたことがあった。

「シグの妹……？」

そして野菜の上にも氷結晶を置く。
こうして氷結晶を至るところに設置することで、結晶から出た冷気がボックス内に充満して食料の腐敗を防いでくれる。
後は……

「シグの妹！？」

「何なんださっきから」

呟きだったユークの声が叫び声に変わったことで、さすがにシグも作業を一時中断して振り返る。

「あ、いや。大したことじゃないけど……」

ユークの前のテーブルには写真がずらりと並んでいた。
さっきの写真立てに入っていた物から始まり、引き出しの奥にしまっていた写真まで全てだ。
束にしたら厚さ１０センチくらいはあるだろうか？
その写真達の共通点は一人の少女が写っていること。

「いやぁ、家中を探したら妹さんの写真が出るわ出るわ」

「勝手に家の中を漁るな」

ユークは写真の束をトランプの札のように扇状に広げ、それを右手に持って口元を隠す。

もちろん写真の表がシグに見えるように。
「それにしてもシグがシスコンだったとはねぇ」
「……」
ユークは妙にねちっこい口調で喋る。
写真の上から覗く目が細まる。
「おまけにストーカーまで……」
「……」
確かに、兄妹とはいえ妹の写真をここまで持っている兄は異常と言える。
それもまだ幼い頃から始まり、十代半ばまでの姿が撮られている。
いや、撮盗(と)られている？
この写真の束を見るだけでこの少女の成長の様子に如実に分かるようになっている。
これではストーカーと思われても無理はない。
「いや～ショックだなぁ」
「……」
「後でフィリィにも報告しておこう」
「……っ」
相変わらずのネチネチとした言い方でユークが続ける。

日頃はシグに苛められているからここぞとばかりに復讐をしたいのだろう。
シグが唸るような声を捻り出しても、目を愉悦に歪ませるだけで怯まない。

「ん～～？フィリィに知られたら何かマズイのかなぁ？」

「……いや」

シグは苦々しげに言葉を返す。
そんなシグの様子にますますユークがつけあがる。

「どうせなら村中に広めちゃおうかなぁ～」

ユークはその時の情景を想像したのだろう、
「けけけけ」と普段は絶対にしない奇妙な笑い声をあげる。
……完全に悪役になっていた。

「？」

それに対して、シグは何か違和感を感じて怪訝な顔をしていた。
やがてその違和感の正体に気付き、
「あぁ……」と声を漏らした。

「そういえばユークは知らなかったんだな……」

「けけけけけ……け？」

「なんて嫌な奴なんだと思ったが、知らないのならしょうがないか。
……ちょっと写真を貸してくれ」

やけにしおらしいシグに驚いたユークは、気付いた時には大人しく写真を渡してしまっていた。
ユークから写真の束を受け取ったシグは次々に捲りながら続ける。

「まぁ、シスコンと言われても否定はしないさ。唯一の肉親なんだし……」

それはユークにも想像できた。

「それにもう十年も会ってないんだからな」

十年？と言いかけて、ユークはこの少女がミヅヒ村にいないことに今更ながら気付いた。

「妹はここじゃなくて街に住んでる。この写真は妹が送ってくれたものなんだ」

「街、て言うとイセナに？」

「あぁ」

イセナ
ミヅヒ村から西南西に行った所にある円形の街。
人口約１万人。
大陸の中でも五指に入る規模で、それ故にモンスターの襲撃を予想した堅固な作りをしている。
ミヅヒ村からは一番近くにある街だが、それでも徒歩で３日はかかるほど離れている。

なるほど、簡単には行き交いできるものではない。
しかし
「会いに行けない距離じゃないと思うけど？」
ユークがそう言うと、シグはゆっくりと首を横に振った。
「会うわけにはいかない」
「なぜ？」
シグは少し逡巡した後、口を開いた。
「妹を養子として引き取ってくれた夫妻は、あいつの兄である俺を嫌っている――いや、気味悪がっている。と言った方が正しいか……。だから俺と妹を会わせようとしない」
「っ！？」
気味悪がる？
シグを？
混乱するユークを他所に、シグは自虐的な笑い声をあげた。
「はは、それも仕方のない事だ。
人の評価の大部分は第一印象で決まると言われているが、それが本当ならあの夫妻やこの村の人達の俺の対する評価は最悪も最悪。かなり酷いだろうな。」

「そう、かなぁ……？」

「俺達が初めてミヅヒ村に来た時には、ユークはまだここに越してきてなかったからな。知らないのも無理はない。

……ん？そういえばフィリィも居なかったな」

「でもこの村にシグを怖がってる人なんていないよ」

「そりゃあ、誤解が解けたからだ」

シグは事も無げにそう言うと、

「あ、もちろん俺達兄妹はこの村の生まれじゃないぞ」と付け足した。

それから視線を手元に落とし、止まっていた手を動かし始める。

「……それに何より、俺といたらあの時の事を思い出してしまうだろうからな」

シグはパラパラと写真を捲りながら、そう呟いた。

ユークはすぐに『あの時の事』を聞こうとしたが、シグの苦々しい顔を見て思いとどまった。

ユークはシグの手の中にある写真達を見つめたまま、しばらく黙っていたが、やがてあることに気づいてゆっくりと口を開いた。

「全ては妹さんのため、か……でも、妹さんはシグに会いたいんじゃないのかな？
写真を送り続けてくれているんだし。それに……ほら、こんなに笑っているんだからさ」

ユークの言う通り、写っている少女はどの写真を見ても満面の笑顔をこちらに向けていた。

写真の中の少女は蒼色の綺麗な髪をポニーテールにまとめ、同じ色の澄んだ瞳をキラキラと輝かせている。
その二つの蒼によって彩られた笑顔は、まるでキキョウのような可憐さとひまわりのような愛らしさを周囲に振り撒いていた。

「そうだといいがな……。おっ、あったあった」

シグの探していた写真は束の一番下にあった。

「……この写真」

それはユークが最初に見つけた、写真立てに入れられて棚の上に置かれていたものだった。

「それは別れる直前に撮ったものだ」

つまり、シグが妹さんと最後に会った時のもの。
ユークはすぐにそう解釈した。

おそらくミヅヒ村の入り口で撮ったのだろう、背景はユークにも見覚えがあった。
写真の中心には7～8歳くらいのシグと、幼い妹さんが並んで立っ

ている。
小さな二人は精一杯の笑顔を作っているが、妹さんの目元は真っ赤に腫れあがっており、かなり痛々しかった。
「ああ、その時妹が大泣きしてな、あやすのに随分手こずった」
シグも写真を覗き込みながら、懐かしそうに目を細める。
それから、聞き取れないほど小さな声でぽつりと呟いた。
「兄妹なのに会えないなんて、改めて考えると変な事だな……」
「シグ、……ごめん」
ユークが急に謝りだす。
「？　何が？」
「その、辛い事を思い出させて……」
ユークの申し訳なさそうな言葉に、シグは
「あぁ……」と呟いた。
そう言えばユークが写真のことをからかったからこの話題になったんだったな。
いつも飄々としているユークに謝られると何だか気まずい。
だからシグは無理にでも明るい声で返した。
「ま、俺も妹ももう子供じゃないんだ。本当に会いたくなったらいくらでも方法はあるだろ。」

そう言うと、シグはその写真を写真立ての中にしまい、元あった場所に戻した。
それから、もうこの話は終わりだ。と言わんばかりに他の写真も引き出しの中にしまうと、ユークに背を向けて食料用のボックスへと歩き出した。

その背中に向かって、ユークはとうとう最後まで知り得なかったことを問いかける。

「シグ、妹さんの名前は？」

シグはぴたりと止まると、少し間を開けて振り返りもせずに答えた。

「メイだ。メイ＝……ベルロッド。」

それだけ言うと、シグは再びボックスの整理へと取りかかった。
ユークもそれ以上口を開く事なくシグの家から出た。

振り返らなかったから、シグは気づかなかった。
すぐに家から出たから、ユークは気づかれなかった。

『メイ』という名を聞いた瞬間から、ユークの涼しげな黒目がへどろの如く濁っていたことを――

第9話　半強制クエスト

一人暮らしの味方である頑固パンにドライマーガリンを塗り、豪快にかぶり付く。
一般的には固すぎるとも言われる食感を楽しみながら、鎧に手を伸ばした。
金属で作られた鎧を履き、着て、腕を通し、被る。
得物も持ってさあ出かけようと思った時に、ふと等身大の鏡に目がいった。

「う……」

己の姿を見て、思わずシグはうめき声をあげる。

鎧がボロボロだった。
全体的に薄汚れているのはまだ良いとして、至るところがへこんでいた。
特に酷いのがメイルの横腹と右アームの二の腕部分。
クレーターの如くぼこっと大きくへこんだその様は、もはや廃品と言っても過言ではない。
シグはモンスターの攻撃をまともに喰らったことがないので、おそらくは受け身を取ったときに出来たものだろう。

本来、身を守るための鎧がその程度のことで傷つくなどあってはならないことだが、シグが使っている【ハンターシリーズ】は初心者用の防具だ。
モンスターから取れる素材はほとんど使われておらず、希少価値も硬度も高くない鉄鉱石を製鉄し、鋼ではなく軟鋼を薄く張っているだけ。

当然大した耐久性はない。
――とは知っていたが、まさかここまでとは思わなかった。
シグは腕を組みながら少し唸った後、
「しょうがないか……」と呟いてから家を出た。

シグは自宅のすぐ右側の家、つまりユークの家の方へと足を向ける。
しかし距離にして１０メートルも歩かない内に、全身防具姿で腰に太刀を下げたユークとばったり出会った。

「おっはよう！シグ」

肩まである緑色の髪を風に靡かせ、無駄に爽やかな笑顔で朝の挨拶をしてくる親友。
だがシグの視線は彼の顔などではなく、自然と彼の防具へといってしまう。

【ハンターシリーズ】名称こそシグの着ているものと同じだが、ユークのそれは凹み一つないどころか汚れてすらいない。
それに引き替え――、改めて自分の全身を見回して見る。
表面の凹凸とこびりついた血や土によってとても同じ防具には見えない。
ユークよりもシグの方が少し長くハンターをやっているからとは言え、これではシグがあまりにもみすぼらしい。

「そんな熱い視線で見られると照れるなぁ」

「何気持ち悪いこと言ってんだ」

朝っぱらから世迷い言を宣うユークにピシャッとツッコミを入れ、シグは挨拶を返した。

「ところで、その恰好でこっちに歩いてたってことは――」

「今日も一緒に狩りに行こうと思ってね」

やはりそうか。

「もう行くクエストは決めたのか？」

「いや、どうせならシグに決めてもらおうと思ってさ。まだ決めてないし、受けてもない。」

手をひらひらと動かして答えるユークに、シグはふむ、と唸った。

「そうか。何か希望はあるか？」

「う～ん。僕はモンスターについてよく知らないからなぁ……」

ユークは顎に手を当て、しばらく悩んだ後に肩をすくめてみせた。

「……まぁ村長に会ってから決めるか」

「イエス・サー！」

ビシッと敬礼するユークを軽く小突いてから、シグは歩き出した。

「おはようございま～す！」

前を歩くユークが元気良く村長に挨拶する。

「おお！二人共ちょうどよい所に来たな」

「？」

村長は挨拶を返すことさえ忘れて、怪訝な顔のシグと相変わらずニコニコしているユークに紙を差し出した。

「悪いが、すぐにこのクエストに行ってくれんか？」

「はぁ……」

シグが受け取った依頼書には次のように書かれていた。

【森の中の異変】
報酬　２５００ｚ
契約金　２００ｚ

『村の近くにブルファンゴが大量に現れた。村に被害が出る前に至急討伐せよ。最低目標は２０頭。それ以降、一頭討伐するごとに５

０ｚずつ報酬を追加する。』

文字を目で追っていたシグは、その内容に眉をひそめる。

「……２０頭？」

「すごい数だけど、こんなに殺しちゃって大丈夫なのかなぁ？」

シグだけではなく、首を伸ばして横から覗き込んでいたユークも疑問の声を上げる。

「そこは心配ない。ブルファンゴの群れを目撃した者はこの倍はいたと言っておるからな。」

「倍って……４０！？」

「ははは、すごい大所帯だなぁ」

驚愕するシグを他所に、そんな場合でもないだろうにユークは笑う。

「こいつらがいつ村に来るか分からん。すぐに討伐に向かってくれ。」

やたらと急かす村長に、二人は半ば強引にクエストに出発させられた。

第１０話　争奪戦

危険な狩場でハンター達が唯一身心共に休める場所、ベースキャンプ。
森丘のそれは木々に囲まれた空間に存在する。
巨木の枝葉が幾重にも折り重なって出来上がった自然のドームは空を縦横無尽に翔る飛竜の目からキャンプを守り、小さな洞窟でできた出入口は大型モンスターが侵入することを阻害し、キャンプで疲れを癒すハンター達を守っている。

シグとユークの二人はそのキャンプに到着していた。

「う～ん。やっと着いた～」

そう言いながらユークはぐぐぅ～と大きく伸びをする。

「歩いたのはせいぜい2、３０分位だけどな」

シグはそんなユークをスタスタと追い越して、テントの側にある泉に向かった。
腰に着けたポーチに手を突っ込んみ、砥石を探り出す。

「ユーク、お前も武器を研いだ方がいいぞ」

そう、このクエストはブルファンゴ４０頭と戦い、少なくとも２０頭は倒さなくてはならないのだ。
今回の狩りは武器をかなり酷使することになる。

シグも昨日大剣を研いだばかりとはいえ、念には念を入れて研ぎ直しを始めた。

返答が無かったので、再度背後にいるユークに声を掛けながら、シグは砥石に泉の水をかけ、大剣を研ぎ始める。
刃の上を砥石が滑る音に混ざって、ユークのうぃ～という了解（？）の声が少しくぐもって聞こえた。

規則的に手を動かしながら、しかし、とシグは思う。
村長の頼みとはいえ、ブルファンゴ２０頭の討伐とは大変な依頼を受けてしまったものだ。
ブルファンゴといえば、大きさが人間程もある巨大な猪だ。
そんな奴らが４０頭もいる群れと正面から戦えば一分とかからず殺されるに決まってる。
そうならないためにも歩きながら策を練っていたのだが、なかなか良案が浮かばない。
落とし穴と爆弾でも使って一網打尽にするか、何かで誘き寄せて各個に撃破するか、はたまた何度も奇襲をかけては離脱を繰り返して消耗させるか。

「……どれもイマイチだな。」

シグは小さくため息をつきながら研ぎ終わった大剣を背中に背負い、振り返る。

「！？」

振り返った先の光景にシグの体が固まった。
少し先にある青い箱から人間の足が生えているのだ。

……いや、よく見るとユークが上半身を支給品ボックスに突っ込んでいるだけだった。
シグは少し興味がわいたのですぐには声を掛けず、その奇妙な光景を観察してみることにした。
しばらくするとボックスの中からユークの細い腕がすっと出てきて、すでにパンパンに膨らんでいる腰のポーチへと吸い込まれていった。

「……あぁ、なるほど」

状況を理解したシグはユークの元へと歩きながら

「おい、支給品を全部取るなよ」

と、努めて穏やかに注意をした。

しかし、当のユークはボックスから顔を上げると、『にやぁ』と粘っこくて実に嫌な笑みをシグに向けた。
そして猛スピードで支給品漁りを再開する。

「おま……、ちょっと待て！」

本当に全部取られてはかなわないと、シグも急いでボックスに取りつく。
ここに支給品争奪戦が始まった。

「ねぇ～しぐ～」

ユークがやけに間延びした、ダルそうな声を出す。
ちょうど眠気に襲われている時の朦朧とした意識で話しているような感じだ。

「なんだぁ？」

シグも似たような声で返す。

「からだ痛いねぇ～」

「そうだなぁ」

「僕達何やってんだろうねぇ～」

「さあなぁ」

「久しぶりの本気喧嘩だったねぇ」

「あぁ」

二人は大の字に倒れ込んでいた。ユークの防具には拳大の傷が無数

に刻まれている。
――シグの殴った跡だ。
シグの廃品同然の防具にはいくつもの帯状の凹みが追加されていた
――ユークの蹴った跡だ。

「何でこんなに激しくなったんだっけ？」

「お前が支給品専用の閃光玉を使うからだろ。」

そう、最初はお互いの顔を押し退けながらボックスの中で奪い合っていたのだが、ユークがその至近距離で閃光玉を使った。
その光をまともに見て怯んだシグを、ユークは手加減なしの上段蹴りで吹き飛ばした。

「あれは卑怯だろ。閃光玉だけならまだしも蹴り飛ばしたんだからな。」

「え～？そこじゃなくて、その後のシグの不意打ちのせいでしょ」

ユークによって地面に転がされたシグは、目が回復すると同時にキレた。
助走をつけて飛び上がり、ちょうど体を上げていたユークの後頭部にドロップキックを喰らわした。
それによってユークはボックスの蓋に顔面強打。派手に鼻血が出た。
それからはもう支給品など放り出して、乱闘が始まった。

「まぁどっちにせよ、無駄な体力を使ったことだけは確かだな。」

「そうだねぇ」

そこから二人は会話を止め、相変わらず仰向けに寝転がったまま空を見つめた。
空と言っても、キャンプの上は木の枝葉が折り重なっているので青い空は見えない。
それでも、太陽によって照らされた木の葉が透き通るような鮮やかな緑色をしていたり、その葉の隙間から時折漏れ出る陽光がまるで星の瞬きのように輝いて、穏やかだがどこか幻想的な光景だった。

そんな中、ユークが唐突に口を開いた。

「ねぇシグ」

「ん？」

「シグは妹さん……メイさんだけっけ？に会いに行かないの？」

「何だ？突然」

「いや、ちょっと気になってさ」

「前にも言っただろ。向こうの家族が嫌がるし、妹自身も俺とは会わない方が良いって。」

「でも、もう十年も会ってない唯一の肉親でしょ？せめて物影からこっそり見てみたいとか思わないの？」

「それじゃあ本物のストーカーだろ」

「でも――」

なかなか食い下がらないユークに、シグは仕方ないと言わんばかりに小さなため息をついてから口を開いた。

「確かに会いたくない訳じゃない、が……」

「……」

「なんとなく……単なる勘なんだが、今は会わない方がいいような気がしてな」

「……そう」

ユークはそれだけ呟くように言うと、黙ってしまった。
本当になんだったんだ？とシグはいぶかしんだが、ユークが変な事を言うのはいつも事なので深く考えるのは止めておいた。

しばらくまた会話がない二人だったが、またユークが唐突に口を開いた。

「ねぇシグ」

「今度は何だ？」

「……僕の空耳かもしれないし、多分そうなんだろうけどさ……」

ユークにしては珍しく歯切れが悪い。

「何だ？はっきり言え。」

「変な……いや、嫌な音が聞こえない？」

「……は？」

シグは思わず間抜けな声を出してしまった。

「いや、俺には――」

『何も聞こえない』と返事をしようとした時、シグの耳も微かにその音が聞こえた。

……なるほど、『変な』ではなく『嫌な』と言い直した意味はそういう事か。

「ユーク、立て！」

言うと同時にシグは跳ね起きた。

するとユークとシグの聞いた『嫌な音』が止み、激しく土を蹴る音に変わった。

第11話　奇襲

雄々しくも無骨な牙がシグの胸元を掠めて駆け抜ける。
牙の主はそのままの勢いで青い箱へとぶち当たり、それを粉砕した。

「……く」

咄嗟に体を捻って助かった。
もし足音に気付かなかったら、敵の姿を見ないまま死んでいたかもしれない。
シグはすぐさまバラバラになった支給品ボックスに向き直る。
ボックスを破壊した張本人は、ぶるぶるっと体を震わせて体に刺さった小さな木片を振り払うと、細く鋭い目でこちらを睨み付ける。
その敵意がありありと見てとれるブルファンゴの目を睨み返しながら、シグは大剣に手を伸ばす。
と、その時、ユークが何かを叫ぶ声と、重量のあるものが移動する重々しい音が背後から響いた。
首だけを捻って後ろを振り向いたシグの鼻先に、別のファンゴが迫っていた。

それを確認するや否や、シグは躊躇することなく右側に身を投げ出す。
ぐるりと回転する視界の中、シグの漆黒の眼にはこちらに背を向けて遠ざかるファンゴと、こちらに体を向けて今にも走りだしそうなファンゴが映る。
ファンゴの波状攻撃にシグが内心舌打ちをしながら片膝立ちで立つのと、ファンゴが駆け出すのは同時だった。
そして、風がシグを追い越したのも――

「ハッ！」

風は気合いのこもった掛け声と共に、銀色の刃を水平に突き出す。
それが駆けるファンゴの眉間に深々と突き刺さり、頭蓋骨を貫通して脳を一撃で破壊した。
体の最も重要な部位を失った獣は白眼を剥くと同時に倒れ込んだ。

ユークはファンゴの頭部に突き刺した刃を素早く抜き取る。
ぬちゃ、と生理的悪寒を催しそうな音をたてながら引き抜かれた太刀の切っ先、それとファンゴとの間に粘着性のある赤い糸が線を引いたが、ユークは気にした様子もなく敵に顔を向けている。
シグからはユークの背中しか見えないので彼がどんな表情をしているのかは分からないが、恐らくいつもの飄々とした笑顔ではなく、命のやり取りをするハンターの顔に変わっているだろう。

シグが親友の意外な頼もしさに苦笑しながら完全に立ち上がると、それを見計らったかのようにもう一頭のファンゴがユークに向かって突進した。
太刀を正眼に構えていたユークはそれを下げると、まるでファンゴに道を開けるかの如く突進の進路から素早く飛び退く。
軽々と避けられたファンゴだが、それを見て止まるどころか更に突進の勢いを増す。
ファンゴとユークとを結ぶ延長線上、そこにはシグがいた。

シグはファンゴが自分に真っ直ぐに向かって来るのを見て、背中の大剣に右手を添えた。
腰を落としてタイミングを計る。
そしてファンゴがある位置まで近づいた瞬間に左前方にサッと素早く移動、そのまま左回りに体を回転させながら抜刀して大剣を地を這うほどの低さで振り抜く。

丁寧に何度も研ぎ澄まされたシグの刃は、ファンゴの右前足を難なく切り落とした。

人の背丈程もある体を支えていた短くも太い四本の柱。
その内の一本を欠いた巨体はバランスを崩し、横倒しに倒れる。
全速力で駆けていたファンゴは地面を削りながら滑ることで、やっとその勢いを無くした。
そのまま起き上がることもできずに中程から無くなった足をばたつかせていたファンゴだったが、しばらくすると動かなくなった。
おそらく血を流しすぎて失神したのだろう。
こうなれば放っておいても勝手に死ぬ。
ファンゴを中心に広がる血の池が、その出血量を多さを物語っていた。

シグはその池の悪臭に軽く眉をひそめながら、キャンプの出入口に素早く移動する。
むき出しの岩肌に背を付け、出入口を挟んだ反対側に顔を向ける。
そこには、シグと同じように武器を手にしたユークがいた。
二人はお互い同じことを考えていることをアイコンタクトで確認すると、小さく頷き合って、同時にキャンプの外へと顔を向けた。

二対の黒眼が素早く辺りを見渡す。
洞窟の先にあるのは春の穏やかな陽光に照らされた小高い丘、深い森。
しかし二人が探しているのはそんなものではない。

シグとユークの背後に横たわっている二頭のブルファンゴはここから侵入してきた。
ということは、この先にファンゴの群れがいる可能性もあるのだ。
ここから見る限りキャンプのすぐ近くにファンゴがいる様子もない

し、ファンゴ達に身を隠して獲物を待ち伏せするほどの知能があるとも思えない。
が、希望的観測はできない。
現に安全であるはずのベースキャンプにモンスターが入り込んできたのだがら。

シグはもう一度無言でユークを見る。
それに気付いたユークもシグに視線を合わせた。
シグは親指で自分を指し、次いで洞窟の向こう側を指差す。
ユークがシグの意図を読み取り、頷くのを確認してから、シグは姿勢を低くしてゆっくりと暗い洞窟の中へと歩き出した。
鎧が揺れる度に出る僅かな金属音、それが静寂な洞窟の中でいやに大きく聞こえる。

やがて出口までたどり着くと、シグは顔だけ外に出して周囲を確認する。
モンスター、特にファンゴの姿は見つからず、居るのは草食モンスター【アプトノス】の親子のみだった。
ただ、近くに森があるために木や茂みが多く、あまり遠くまでは確認できない。
シグは注意深く辺りを見渡しながらポーチの中からある物を取り出すと、それを少し離れた所に立っている木へと投げつけた。
見事に木の幹に当たった空ビンは甲高く小気味よい音を響かせて砕け散る。
シグは再度視線を左右に走らせた。
が、木の影から何かが飛び出してくることも、茂みの中から何かが駆けて来ることもなかった。
相変わらずアプトノスの親子が仲良く草を食べているだけで、変化も異常も見受けられない。
シグは小さく息を吐きながら立ち上がると、背を向けてキャンプへ

と戻った。

「どうだった？」

斥候から戻ってきたシグに、未だその手に太刀を持つユークが声をかけた。

「大丈夫そうだ。近くに群れはいないだろう」

そうシグが言うと、ユークは太刀に付いた血糊を拭き取ってから腰の鞘に収めた。

「それにしても、まさかキャンプの中まで入ってくるとはな」

シグがファンゴの骸にナイフを入れながら、怪訝な顔をする。

「確かに、びっくりしたね」

シグのすぐ隣にいるユークは剥ぎ取り作業を一時中断して顔を上げた。

その手にはファンゴの硬い毛皮が握られている。

「ここも危なくなったねぇ」

「どこにキャンプを作ってもいつかはモンスターに見つかるんだし、こればかりはしょうがないな」

そう言いながら、シグは剥ぎ取ったファンゴの生肉を薄い紙に包んでからテントの中に置き、ユークへと振り向いた。
彼はナイフを忙しく動かして、せっせと作業していた。
まだ剥ぎ取りが終わってないようだ。
しばらくは終わりそうに無かったので、シグはテントの側にある泉へと向かった。
大剣と剥ぎ取り用のナイフにべっとりと付いた血糊と脂を取っておこうと思ったのだ。

シグは泉の縁にしゃがみこむと、冷たく澄んだ水でファンゴの赤い血を洗い流しはじめる。
刃に付いている血はまだ乾いておらず、泉に浸けただけで簡単に落ちた。
それから軽く刃を振って水気を飛ばす。
そうして元の場所に戻ると、さすがにユークの剥ぎ取り作業も終わっており、手持ちぶたさの彼は軽くストレッチをしていた。

「ユーク」

シグが声をかけるとユークは屈伸運動を止め、こちらに近づいてきた。

「さっきのこともあったから、今日はいつもより気を引き締めていくぞ」

「ん、わかった」

言葉少なげに了解したユークの腰元、鉄刀がカチャと小さく鳴いた。

第１２話　発見

いくら春とはいえ、頭の先から爪先まで金属でできた鎧に包まれていたら否応なしに汗も滲み出る。
普段ならその日射しの強さと鎧の中に充満する熱気に辟易している所だが、頭上を覆っているこの木々のおかげで幾らかはマシな状態でいられる。

生い茂る木の葉はキャンプよりも森の中の方が多い。
そのため、春から夏へと季節が変わり行く今、安息の地であるベースキャンプよりも狩場の森の中の方が遥かに快適だ。

――モンスターが居なかったら。の話だが

シグは歩いていた。
何時もより警戒しようと決めた以上、絶えず目を左右に動かしながらだ。
とは言っても、挙動不審よろしくキョロキョロしているというわけでもない。
左肩ごしに背後を軽く見るところから始まり、首をゆっくりと正面に戻しながら、それよりもさらにゆっくりと漆黒の瞳を左端から中央、右端へと動かす。
その瞳に映るのは広い間隔を開けて立ち尽くす大木、時には転々と、時には連なって生える名も知らぬ木立。

それらの影からモンスターが襲撃してこないかずっと気を張りつめて警戒しているのだが、森に入ってから今までの所モンスターがシグの視界の中に入ることは無かった。

そして何回目とも分からない程繰り返した、首を左から右へと動かすという動作を終了した今回も、敵の姿を見つけることは出来なかった。

そのことに落胆も安心もすることなく、再度辺りを見渡そうとしたシグの視界の端を自然の色とは違う明るい緑色が掠めた。

確認しなくても分かる。

ユークの髪だ。

ユークはシグの右隣を歩きながら、主に背後の警戒を担当している。つまりシグと同じような行動を繰り返しながら、後ろ向きに歩いているのである。

絶えず僅かな起伏があり、木の根が地表に出ている場所も珍しくない森の中でそれをしているのだから、かなり器用なことをしているのだと思う。

シグはそのユークから早々に眼をきり、今度は右から左へと見渡す。

――何もいない

その言葉が頭をよぎった瞬間、背中に軽い衝撃が走った。

それが何を意味するのか頭で判断するよりも先に、シグの体は膝を折る。

しゃがみこんだシグは、彼の背中を叩いたユークの方に振り向く。

同じく身を低くしているユークは、左手の人差し指と中指で自分の目を指し、次いである方向を指差す。

ユークがジェスチャーで『見て』と言った方向、左斜め前方に目を

凝らすと、四頭のブルファンゴがいた。
四頭は時折立ち止まっては地面を鼻で嗅ぐという行動を繰り返しながら、付かず離れず一定の距離を保って同一方向に向かって歩いている。
それはシグとユークがいる場所とは反対、つまり此方に背を向けて遠ざかっているのだ。

シグは中腰に立ち上がって素早く辺りを見渡す。
他にもファンゴがいるのではないかと思っての行動だったが、予想に反してあの四頭以外にこのファンゴの姿は無かった。
シグは再び身を低くすると、此方を見ているユークに頷いてみせた。
それに対して、ユークも小さく頷き返す。

――ユークと会ってまだ日の浅い人は、彼がその顔に浮かべているのは何時もの微笑に見えるだろう。
だが、小さい頃から彼と共に居るシグには彼の表情の些細な変化を感じ取れた。
別に緊張で強張っている訳でも、悪鬼迫る険しい顔をしている訳でもない。
が、なんと言うか……そう、何時もの笑顔よりも温度か低い。と言えばいいのだろうか。
顔は笑顔の形になっているが、覇気がない。
無理に笑っている風にも見えた。

……そして、それは良い事だと思う。
ヘラヘラ笑いながら他者の命を断つ者は異常者でしかない。
この笑顔の温度の差は、ユークが異常者なんかではないということの証明である。
ユークの小さく縮こまった背中を追いかけながら、シグはそう思っ

ていた。

ユークが先を、シグがその後に続いてファンゴ達のすぐ背後まで近づいた。
ファンゴはこちらに気付いた様子もなく歩き続けている。
茂みの中から再度周囲を確認してみたが、やはり他にモンスターの姿はない。

村長は４０頭規模のファンゴの群れが出たと言っていたが、目の前を行くファンゴ達はその群れに属していないのだろうか？
それとも単に群れからはぐれただけ？
まさか、罠ということは――

そこまで考えて、シグはかぶりを振った。
……考え過ぎ、だ。
敵を侮るつもりはないが、ファンゴ達にそこまでの知能があるとは思えない。

『戦場において、驕慢や過度の警戒心は最も厄介な敵となる。大切なのは戦況を見誤らない冷静な判断と、戦機を逃さない行動力だ』

昔、誰かにそう言い聞かされた事を思い出す。
誰からそんな事を教わったのかは忘れたが、その通りだと思った。

シグはざわついた気持ちを抑えるために、背中にある大剣の柄に触る。
と、その時、四頭のファンゴの内、先頭を歩いていた一頭が止まった。

それに合わせたかのように残りのファンゴ達も止まる。

――合図は無かった

それでも、二人のハンターは同時に駆け出していた。

第13話　驕慢

「はぁぁ！！」

シグは腹の底から咆哮すると共に骨塊を一頭の獣へと叩きつける。
途中背骨の抵抗を受けたが、それすらも砕いてファンゴを血祭りにあげる。
一瞬で物言わぬ骸となった獣から大剣を引き抜くと、すぐ近くで重たい物が倒れる音がした。
おそらくユークがファンゴを倒したのだろうと予測をつけながら、シグは次のファンゴへと襲いかかる。
ファンゴ達もこちらの存在にやっと気付いたようだが――遅い。
猛進するだけが能のファンゴの生命線、その太い足に大剣を突き刺す。
そのまま切断。とはいかなかったが、それでも致命的な打撃を与えられた事に変わりはない。
甲高い声で嘶きながら倒れるファンゴの頭に骨塊を食らわして止めをさす。
これで二頭――いや、ユークが倒したのを合わせると三頭か。
残るファンゴは一頭。
最後のファンゴから見て右からはユーク、左からはシグがその命を刈り取ろうと駆け出す。
全ての仲間を失ったファンゴは、二人のハンターによって仲間と同じ運命を辿った。

――はずだった

ピギィィィィィ！！！

「！？」

先程シグが殺したファンゴの断末魔よりも遥かに大きな声で生き残りのファンゴが鳴いた。
いや、これはもはや吼えたと言っていいほどの音量だ。

「な、何だ……？」

急ブレーキをかけて止まったシグの声に動揺の色が浮かぶ。
それもそのはず、そもそもファンゴというモンスターはほとんど鳴いたりしない。
前足で地面を掻き、敵に『突進するぞ』と見せつけることがファンゴの一般的な威嚇行動なので、これがこちらを警戒しての行動とも思えないし、今さら威嚇しても意味のないことくらいファンゴにも理解できるだろう。
ではこの行動の意味は――？

シグは頭の中でごちゃごちゃと考えを巡らせたが、結局答えは見つからず、目を見開いていることしか出来なかった。
呆気にとられるハンターと哮る獣。

暫らくの間続いた奇妙な膠着状態は、やがてユークが上げた声によって破られた。

「シグ、囲まれてる！」

「何っ！？」

ユークの声につられてシグが周囲を見渡すと、殺気のこもった無数の視線がシグを射抜いていた。
その視線の主達のある者は蹄で地面を掻きながら、またある者は頭をぶるぶると振りながら、しかしその鋭い目は一様に二人に向けられたままで――

先程までは確かに居なかったはずのファンゴの群れに、二人は完全に囲まれていた。

「くそっ！いつの間に！」

シグが犬歯を剥いて吼えるが、事態は何も変わらない。
突如として現れたファンゴの大群に二人が軽い恐慌状態に陥っていると、まるで生き残った一頭の咆哮に応えるかのように群れのファンゴ達が一斉に哮りだした。
たちまち場は怒号のような激しく鳴き声に包まれる。
概算３０頭を超過したファンゴ達が顎を限界まで押し開いて、汚ならしく涎を撒き散らしながら轟々と吼えるのだ。
その大音量は飛竜の咆哮もかくやという程の音の波となってハンター達の鼓膜を襲った。

「痛っ！」

ユークが小さな苦痛な声を上げながら両の耳を手で塞いだ。
シグもユークのその行動に倣う。
耳の痛みに顔を歪ませながら、シグは忽然と現れた群れを見やる。
……本当にどこから現れたのか分からない。
四頭のファンゴに襲いかかる前は確かに居なかった。
それは何度も確認したので自信を持って言える。
ではファンゴ達はどこから現れたのか――いや、どうして俺達は囲まれているのか？
たまたま運悪く群れが通りかかったのだと仮定して、同胞を殺している俺達に襲いかかってくるのは分かる。
当然の行動だ。
だが、猪突猛進と揶揄されるような知能しか持ち合わせていないファンゴが、俺達を包囲するように現れたのはどういうことだ？
――偶然そうなりました。
なんてご都合主義では納得できるはずもない。
しかし偶然でないとなると、考えられる理由はただ一つ。

――罠

最初の四頭が俺達を誘い出す囮で、俺達がまんまと掛かった所で隠れていた仲間の合図を出して獲物を完全に包囲する。
そんな罠を張っていた。
そう考えるのが自然だ。

「……驕慢、だな」

シグは耳を押さえたまま頭を軽く振った。
『驕慢は敵』その言葉を知っていたはずなのに、俺は驕慢によって死地に飛び込んでしまった。

ファンゴの知能を見くびっていた。
……だが、それも仕方ないのではないだろうか？
ファンゴがここまで賢いモンスターだったなんて話は今まで聞いたこともなかったし、俺が倒してきたファンゴ達も良い意味でも悪い意味でも猪突猛進だった。
そんなモンスターがいきなりこんな策を講じてくるとは誰も思わないだろう。
それともこんな考え方をすること自体、『驕慢』なのだろうか？

――とにかく、このことは大いに反省するし、これからはあの言葉の真意をしっかりと理解するよう努めようと思う。
が、それは生きてここから帰れたらの話しで、今頭を使わなくてはならないのはどうやってここを切り抜けるかだ。
という訳で、反省会は後回し。

シグは素早く目を走らせて周囲を確認する。
未だ哮り続けているファンゴ達、その包囲網に穴はない。
とても抜けられるものではないが、このままここに居たら間違いなく死ぬ。
そうならない為にも『戦機を逃さない行動力』を見せなければならない。

シグがそこでふと思考を止めると、ファンゴ達の怒号が止んでいることに気付いた。

「……逃した？」

シグの呟きを合図にしたかのように、ファンゴ達が一斉に駆け出した。

第１４話　飽和攻撃

生い茂る木々によって薄暗くなった森の中、地を踏み鳴らす重々しい音に包まれてシグはゆっくりと目を閉じた。
息を深く吐きながら筋肉を弛緩させる。
そして、勢いよく目を見開いた。

両手に持つ大剣の柄を強く握りなおし、前から駆けてくる一頭のファンゴに向かってこちらからも接近する。
全力で駆けながらちらりとファンゴから目を離すと、銀色の太刀を構えたユークもシグのすぐ隣を走っていた。
その姿に口元を少し緩め、しかし視線はすぐに戻す。
漆黒の眼光に鋭さが増す。

駆け抜けざまに人の丈よりも大きく無骨な剣が敵の足を薙ぎ、細身ながら鋭い切れ味を持つ芸術品のような剣が目を抉るように振りぬかれた。
一瞬にして世界の半分と走る術を奪われたファンゴが激しく嘶きながら転倒する。
横倒しに倒れたファンゴは走ってきた勢いのまま地面を転がり、シグ達を後ろから追っていた二頭のファンゴに襲い掛かる形となった。
横幅は人間の子供ほど、高さはその倍もある巨体同士がぶつかり合う――、かと思われた。
しかし二頭のファンゴは転がり来る同胞を左右に避けてかわし、背を向けたままのシグとユークに向かって鼻息荒く驀進する。
攻撃を行った直後のことだったので二人の反応は若干遅れたが、それでもいくらかの余裕を持って横に避ける。
が、体勢を立て直す暇もなく先ほどのファンゴと入れ替わるかのように正面から、左右から、さらには背後からも敵が迫る。

シグは小さく舌打ちしながら斜め前方――交錯するファンゴの間をすり抜けるように身を投げ出した。
片手で大剣を掴んだまま器用に受身を取るシグの耳には、ファンゴの興奮しきった息遣いと、土を踏みしめる足音しか聞こえない。
それはユークも上手く敵の攻撃を避けたということであり、ファンゴ達が密集しすぎての同士討ちという愚を犯さなかったことを意味している。
一頭ぐらい自滅しろよ。と言葉にする余裕はないので心の中だけで毒づいたシグは立ち上がると同時にその場から大きく飛び退く。
ほんの一秒前までシグが居たその場所を六頭のファンゴが猛烈な勢いで駆け抜けた。
回避がかなりぎりぎりだったことに肝を冷やしたが、そんなことはお構いなしと言わんばかりに次のファンゴ達が襲い掛かる。

――ワンサイドゲームが始まった

ファンゴ達の連携は実に巧妙で絶妙だった。
まるで全てのファンゴの思考が同じで、群れは一つの脳を共有しているかのような錯覚を覚える程だ。
バカの一つ覚えのように突進しかしてこないのは相変わらずだが、ファンゴは常に三頭で一つのグループを組んで攻撃し、一切の間を空けることなく激しくシグを攻め立てる。
おかげでファンゴ達の執拗な攻撃に反撃するどころか状況を把握することすらままならない。

それに、シグにはもはや目視だけでは敵の位置はつかめなかった。
なにしろ四方八方から絶えず攻撃を受けているのだ。
目だけに頼っていたのでは避けきれない、死角は必ず生まれてしまう。

そこは聴覚で何とかカバーする。
耳を澄ませて敵の方向、距離、数を出来るだけ読み取り――とは言っても、敵に囲まれたこの状況ではその正確性もたかが知れてるが――目で捉えた情報と合わせて自分の置かれている状況を把握、敵のわずかな隙間に体を滑り込ませるのだ。
シグは今までこの方法で何とか敵の攻撃をかわし続けていた。

しかし、人間慣れないことはそう続くものではない。
一度もした事のない事を命懸けの場で行おうというのだ。
知らず知らずの内に溜まった疲労はいつものそれとは次元が違う。
そして蓄積された疲れはやがて体力という名の基礎を、集中力という柱を傾かせる要因となり、シグという名の家はゆっくりと崩壊を始める。

左斜め前から猛進してくる三頭を右に駆けてかわし、右手だけで持っていた大剣に左手を添え――すぐに離した。
真後ろから別のファンゴ達が迫っている。
それを目で確認するより先に足を動かし、さらに右へと逃れる。

「ちっ」

心の中ではなく音に出して舌打ちをした。
さっきからずっとこうなのだ。
シグはぎりぎりではあるが、何とか攻撃を避け続けている。
しかしいざ攻撃に転じようとしても、すぐに別のファンゴ達が邪魔をする。
そのせいで群れに囲まれてから一頭も倒してないどころか傷一つつけられていない。
シグは苛立たしげに、今日何度目かわからない舌打ちをした。

――そして、それは訪れた。

自分がした舌打ちの微かな音を聞きながら、シグが右へ一歩踏み出した時、右肩に軽い衝撃が走った。
驚いてそちらを向くシグの目に映ったのは『木』
幹の太さが二メートルはあろうかという立派な木がシグの行く手を遮っていた。
「しまっ――！」
ごすっという鈍い音と共に背中に強い衝撃が走り、今度こそシグは

吹っ飛んだ。
あまりの衝撃に一瞬だけ浮遊感を感じた体は、地に足をつけてもその勢いが衰えない。
今にも倒れそうな前傾姿勢のシグが向かう先、そこにはもう一本の別の木が――

ゴッ！！

鈍い音を立てて、シグは頭から木に激突した。
そのままもたれかかるかのように、シグの体がゆっくりと崩れ落ちた。

いつもと違い、横向きになってしまった世界が徐々に赤く染まっていく。
その狭まった視界の中で、何頭ものファンゴがこちらに駆けてくるのが微かに見えた。

「……く、そ」

朦朧とする意識、けれど絶対に手放したりしない。
意識を失ったが最後、そこには『死』しか待っていないからだ。
緩慢にしか動いてくれない自身の手を必死に動かして、ユークから勝ち取ったアレをポーチから取り出す。
そして――投げた。
弱弱しく投擲されたそれはしばらく地面を転がった後、急激に発光した。
その光は太陽がもう一つ現れたという程度のものではなく、まるで雷のように刹那的で、しかし強烈な『閃光』

「ッ！」

瞼を閉じてその光をやり過ごしたシグは、ふらつく足腰に力を込めて立ち上がる。
体を動かすたびに頭の芯に響くものがあるが、今はただひたすらに我慢するしかない。
シグは木に背を預け、頭を押さえながら辺りを見回す。
先ほどの光をまともに見てしまったであろうファンゴ達は一様に走るのを止め、各々鳴き声をあげていた。
その声は先ほどシグたちに向けていたような怒号ではなく、まるで仲間同士でお互いの安否を確かめ合っているような、そんな印象を受ける。

――逃げなくては

立つ事にすら苦痛を感じるシグの脳裏に言葉が浮ぶ。
これ以上戦えない。
今は退くしかない、と。

その時、シグの背後から複数のファンゴの足音と、それよりも明らかに軽い足音が近づいているのが聞こえた。
その足音の主は誰なのか、その答えは意識がはっきりしないシグでもすぐに分かった。

「最後の閃光玉、使うよ！」

そんな声が聞こえるのと同時にシグは強く目を閉じた。

瞼の向こうで再びあの閃光が走る。
支給品専用閃光玉の作り出す光が止んだのを見計らって目を開くと、目の前にユークがいた。

「……。逃げよう！」

シグの様子を見るや否やユークはすぐに決断した。

シグはユークに肩を貸してもらい、出来るだけ急いでその場から離れた。
なかなか視力が回復しなかったのか、二人の後を追うファンゴはいなかった。

第15話　リタイア

「……だいぶマシになった」

比較的安全であるキャンプの中、地べたに座り込んだシグは額を押さえていた手を離した。
血は……止まったようだ。
もともと大したことない小さな切り傷だったためか、ごく一般的な圧迫止血を施しただけで簡単に出血が収まった。
脳震盪を起こしていた頭はまだ痛むが、それもその内収まるだろう。

「でもさぁ」

シグの横に立っているユークが鉄板を拾い上げながら口を開く。

「これはもう着れないだろうね」

あ～あ、と言いたげな彼の手には、シグの胴体部の鎧【ハンターメイル】の残骸があった。
ファンゴの背後からの攻撃によって、ハンターメイルの背中に当たる鉄板には大きな破孔ができていたのだ。
さらには鎧の前面までもが大きく凹んでしまい、鉄板が胴体を圧迫して苦しいため、シグはここに着いて何をするよりも先に鎧を脱いだ。
仮にもハンター用に作られたそれは、ファンゴの突進一つであっという間に使用不能に陥ってしまったというわけで、その強度の低さはやはり防具としてどうかとも思った。
しかし、言い換えればそれだけファンゴの攻撃が強烈だったということであり、壊れこそしたが使用者の身を守るという使命はしっか

りと果たしたのだ。
命を救ってくれたこの鎧には感謝しなくてはいけない。
という訳で、シグは鎧の残骸を指先でくるくると器用に回していたユークからそれを取り上げた。

そんなやり取りをしたのが１０分程前のこと、今は仕切り直しとばかりに真面目な話をしている。
「シグのメイルはもう使えないけど、どうする？」
「まぁ、確かに鎧なしで戦うのは厳しいな……」
「でしょ？このクエストは棄権した方がいいんじゃないかなぁ」
ユークなりにシグを気遣っての言葉だが――
「いや、クエストは続ける」
シグはそれを一蹴した。
「これ以上は危険だよ」
「それでも、続ける」

シグの素っ気ない言い方のせいだろうか、ユークの声に若干の怒気が混ざり始めた。

「何でそんな頑なに続けようとするのか、僕には分からないなぁ」

「村長が言っていただろ。奴等が村を襲うかもしれない、って」

「確かにそうなるかもしれない。でも、あくまで『かも』だよ」

「その『かも』が起こったらどうする。ハンターならまだしも、一般人にとってモンスターは危険だ」

「危険なら常日頃から身近にあるさ。何てったってモンスターの住処である山の中に村があるんだからさ」

「だからと言って、目に見える驚異を野ざらしにしておくことはイタズラに危険を増やすだけだろ！」

興奮してきたシグは勢いよく立ち上がった。

しかし、ユークも食い下がる。

いきり立つその顔にはいつもの飄々とした雰囲気はなく、二対の黒眼に強い意志を湛えていた。

「シグはこの依頼を変に特別視してる！目に見える驚異なんて言ったらランポス一匹だって人間にとって十分そうさ！

シグの言葉を鵜呑みにしたら全てのモンスターを根絶やしにしないといけない！！」

「そうは言ってないだろ！俺は、あのファンゴ達が村を襲う危険性があるから、そうなる前に対処しなくてはいけないと言ってるんだ

！！」

「それが特別扱いしてるっていうんだよ！！」

「あァ！？」

額に青筋まで立てて、シグは自分より長身のユークに掴みかかった。
鎧の襟首を締め上げられたユークは、それに対して怯んだ様子もなくシグを見下ろす。

「さっきも言ったように、人はいつでも危険に晒されている。飛竜がふらっと来ただけで村が壊滅してしまうようにね」

「それがどうした！！だからと言って間近に迫る危機から目を背けていい事にはならない！！」

「じゃあ聞くけど、なぜあのファンゴ達が村を襲うと思うの？」

「モンスターは人に害をなすからだ！あいつらはお前にも襲い掛かってきただろ！？」

「あのファンゴというモンスターは元は猪と同じで、違うのは体格だけらしいよ。
そして猪は警戒心が強くて、ひどく臆病なんだ。人間の匂いがするだけで、その場に近づかなくなるくらいにね」

「それが――」

「ファンゴ達は怯えていただけ、とは考えられないかな？」

「……、は？」

「確かにファンゴは攻撃してきたし、そのせいでシグも怪我をした。でも先に仕掛けたのは僕達だ。自分の身を守るために、危害を加えてくる敵を倒すのは当然のことだよ。――シグの言ったようにね」

ユークが言葉を紡ぎ、シグは彼からゆっくりと手を離した。

「シグはどこかの村がファンゴに襲われた、って話を聞いた事がある？ランポスや飛竜じゃなくて」

「……ない、な」

「でしょ。こちらから近づかなければ、彼らは無害なんだ。それでも討伐依頼が出され、僕がシグと一緒にそれを受けたのはその群れの大きさのせいだよ」

「……」

いつの間にか、二人の間には先程までの勢いが消えていた。

「確かにあのファンゴ達も危険要因だよ。万が一、村に侵入したら怪我人、いや、最悪死人がでるかもしれない。僕個人としてはそんなことにはならないと思っているけどね。それに――」

ユークはそこで口を止めた。

「不確定な村の危険を案ずるより、シグは自分の事を考えた方が良い」

「……」

「今のシグは戦うどころか、まともに走ることもできないはず。脳震盪を軽く見ちゃいけないよ。シグ、さっきからフラついてることや、キャンプに着くまでずっと気を失っていたことに気づいてる？」

シグは眉間に皺を寄せた。フラついてるつもりはないが、言われてみれば助け出してもらってからの記憶は曖昧だった。

「確かな事は言えないけど、シグの起こしたのは軽度のものじゃない。気絶するのは脳震盪の中でも中度から重度の時の症状だからね」

「……」

シグは……何も言えない。

「もし今、シグの頭が強い衝撃を受けたとする。例えそれが殴られた程度の衝撃だったとしても、脳に障害が出るか、最悪の場合――死ぬよ」

「それでも――」

「シグ」

何かを言いかけたシグをユークが静かに遮った。

「シグ、このクエストは確かに村を守ることに繋がると思う。僕達はハンターだ。ハンターは村や街をモンスターから守るために

いる。だから、シグがこのクエストを成功させたいと思う気持ちは、ハンターになったばかりの僕にも理解できる。
でも、村をために死んでしまったら意味はない。毎日命を懸けて生きているハンターだからこそ、自分の命は大事にしなくちゃいけないよ。そうでなくちゃ、本当に大事なものを守れなくなるから。
それに、村が明確な危機に頻しているわけじゃないんだ。今は命を賭けてまで、いや、命を捨ててまで戦う時じゃない」

「……」

ユークの言葉を黙って聞いていたシグは、彼の目を正面から見据えながら口を開いた。

「……それなら」

――自分の決意が揺れているのを感じながら。

「それなら、もし本当に村がファンゴに襲われた時はどうする。村には子供がいる、老人がいる。そんな人達とモンスターが入り乱れる中で、死傷者を出さないと言いきれるのか？」

「ミヅヒ村にも、ある程度の防衛システムがあることはシグも知ってるでしょ？」

１０年間も暮らした村のことだ、『システム』と言うのもおこがましい簡単な仕掛けの事ならシグも知っている。

入口を除く村の全周には、気をつけていないと気付けない程の細い糸が幾重にも張り巡らしてある。
その糸の所々には特別に大音量に作られた音爆弾が設置されており、何者かが糸に引っ掛かると自動的に音爆弾が炸裂して村中に侵入者を報せてくれる、一種の罠が仕掛けてあるのだ。
もちろん、空を自由に飛ぶことのできる飛竜に対しては無力だが、ミヅヒ村の近くには飛竜が不思議と寄って来ないので、今のところ平和が保たれているわけだ。

「あれが作動したら村長や自警団がモンスターの来襲に気づいて、迎撃なり避難なりの対処をしてくれる。もちろん、僕達ハンターも手伝ってね。それに村には狩りに役立つアイテムが沢山あるし、閃光玉や落とし穴、爆弾とか……、今の僕達よりも遥かに充実してるよ」

「……」

シグは俯いてユークの言葉を何度も反芻する。
考えて考えて、考え抜いた結果

――ユークの言っていることが正論で、俺は単に無謀なだけなのかもしれない。

理性はそう答えをだした。
しかし、シグのどこかがそれを否定する。
それは意地になっているだけなのかもしれない。
いや、そもそも何に対する意地だろうか？
動揺した頭では、もはやそれすらも分からない。

だが――

「僕はシグに死んでほしくない」

ユークは、最後にそう言った

シグは深くため息をついた

息と一緒に肩の力も抜けていった気がした

第１６話　新たな驚異

全身にまとわりつくような熱気を受けながら、シグは一式の鎧を見つめていた。
顔以外の肌の一切を露出させない仕様のそれは、元は青色の鱗であったことを忘れさせる金属のような光沢をしている。
その丈の長いフォールドは膝まで覆っており、胸部のメイルはそれまでシグが使っていた物よりも肉厚で頼もしさを感じる。
肉食獣の中でも小型のものとはいえ、モンスターの素材で作られたこの鎧は【ハンターシリーズ】とは強度も耐久性も段違いだ。
当然それに比例して重量も増してしまうのだが、そこは諦めるしかない。

――あれから、ブルファンゴの討伐クエストをリタイアしてから一ヶ月が経った。
結局ファンゴが村に攻めてくることはなかった。
俺は頼まれた依頼を失敗したのだから、村長から落胆なり失望なりされるのを覚悟していた。
しかし実際には『そんなこともある』と笑って済ませてくれた。
本当なら笑って許せるような事ではないのだろうから、これには救われた想いだ。
それと俺の頭の起こした脳震盪はユークのいった通りそれなりに重いものだったらしく、診療所の医者から一週間の安静を言い渡された。
専門家に言われたからには従う他ない。
その一週間は狩りに行くこともせず、ハンターになってから久しぶりに静かに過ごした。

回復してからは壊れてしまった鎧の代わりに、新しい防具を作ることを主として狩りを行なった。
ユークに協力してもらいながらランポスを狩りつつ、ユークの武器を強化させるための鉱石集めを手伝った。
そうして、今やっと新しい防具が完成したわけだ。

マネキンに着せられた鎧を丹念に眺めていると、右肩にずっしりと重たい物が乗ってきた。

「おう、気に入ったか？」

声がした方に振り向くと、肩に乗せられた手の大きさに見合うだけの屈強な男、鍛冶屋の親方がそこにいた。

「ええ、これでやっと安心して狩りに行けます」

そう言うと親方は満足げに頷いた。

「うむ、最近は武器や防具の注文も減ってきているからな。わしも久々に作れて楽しかったぞ！」

親方は実に愉快そうに笑う。
元々この村はハンターが少ないから、注文がくることもそうそうないのだろう。
それでも鍛冶屋を利用する僅かな人のために竈の火を落とさないでいてくれているのだ、この親方もつくづく人が良いと思う。
食っていくだけならあんなに大きくて燃費の悪い竈でなくてもよかったろうに。

その後、親方が

「鎧は後で家まで運んでやる」と言ったので、お言葉に甘えることにして鎧の代金を支払ってから鍛冶屋から出た。

外に出ると鍛冶屋がどれだけ熱かったか再認識させられた。
季節が繁殖期から温暖期へと移り変わりつつある今日この頃、日差も決して穏やかではないにも関わらず、外の方が涼しいと感じるのだからな。
そんな鍛冶屋に年がら年中居る親方の凄さを思い知らされずにはいられない。
さて、用事も済んだことだしそろそろ――

「あっ、シグ」

「……」

――家に帰ろうとしたのだが、アイツに会ってしまった。

「……なに露骨に嫌そうな顔してるのよ」

「別に」

顔に出さないように気をつけていたんだがな……。
なかなか鋭い、もとい目ざとい奴だ。

「アンタ、失礼な事を考えてるわね？」

なぜ分かる？
あ、目がつり上がった。

「……」

「……」

……気まずい。

何故に鍛冶屋の前でこいつとにらめっこをしなきゃいけないんだ？

「あ～、フィリィはどこかに行く途中なのか？」

一応幼なじみであり、同年代唯一の異性であるフィリィ＝レーベルは相も変わらずな視線を俺を向けながら言う。

「ちょっとね」

……曖昧な回答だな。そしてできれば睨むのを止めてくれ。

コイツは俺が嫌そうな顔をしていると言っていたが、会うたびに理由もなく睨まれていたら苦手意識が生まれて当然だ。

とにかく、俺はこんな重たい空気からは一刻も早く逃げ出したい。

「そ、それじゃあ。またな」

「あ、ちょっと待って！」

自宅へと体を向けるよりも早くフィリィに止められてしまった。

反射的にため息をつきそうになったが、それを寸での所で呑み込んで振り返る。

見るとフィリィは俺の肩を掴むわけでもなく、中途半端に手を伸ばして止まっていた。

「何だ？」

「あ、と、……あんた家に帰るんでしょ？」

「ああ、そうだが？」

それなら、と言いながらフィリィは結局何をしたかったのか分からない手を引っ込めた。

「私もそっちに用事があるから一緒に行くわ」

「……」

「そ、そんなに嫌そうな顔しなくてもいいじゃない……」

そう思うなら睨むな

やっぱり気まずい

あれからフィリィと並んで歩いているのだが、全く会話が続かない。俺は騒がしい所よりは静寂な場が好きなので沈黙もあまり苦ではな

い。
――はずなのだが、これは異様に気まずい。
なぜだろうか？と隣を歩くフィリィを盗み見てみた。

こうして見ると、やっぱりフィリィは綺麗だ。
腰まである髪は絹のように艶やかで、闇のような黒髪が真っ白な肌と対照的でよく映えている。
目鼻立ちも整っており、少しつり上がり気味の目もこうして端から見る分にはクールで魅力的だと思える。
背筋はスッと伸ばされて姿勢がよく、それは歩いている今も変わらない。
そのせいか、標準を軽く上回っている大きな胸がさらに強調される形となっており、足を動かす度に微妙に揺れているその様は青少年には目の毒以外の何者でもない。
さらには、小ぶりながらもみずみずしいピンク色の唇が妙に艶かしくて、少女という枠から飛び出して大人の女性へと変貌しつつあるみたいだ。
ようするに、フィリィはこんな田舎にいるのが不思議なくらいの美少女なわけで、こんな子が隣にいたら緊張もするだろう。
つくづく――

「なにジロジロ見てんのよ」

これがなければ、と思う。
確かに女性を無遠慮に見ていたのは悪いと思うが、そういつもいつも睨まなくてもいいだろうに。

「はぁ、……それでフィリィはどこに行くんだ？」

そう聞くと、フィリィは栗色の瞳を逸らして小さく呟いた。

「……ユーク、の家」

ふむ。ユークとフィリィが度々会っていたのは知っていたが、このフィリィが頬を染めるほどの関係とは驚きだ。
それもユークの容姿と人のなりを考えれば納得できるか。

「まさかお前とユークが――」

その時、近くの山の稜線から小さな点が現れた。

「……何だ、あれは？」

目を細めるシグの様子に気付いたのか、フィリィもシグの視線の先を見る。
そうしている間にも点はどんどん大きくなり、程なくしてシグにも完全にその姿を認めることができた。

それは巨大な翼を大空に翻し
その美しいまでの蒼鱗を輝かせ
その獰猛な朱眼で下々を見下ろし
それは己の存在を生けるもの全てに主張するかのように、口腔から音の暴風を撒き散らしながら村の上空をあっという間に飛び越えて、近くの山へと消えていった。

「……リオ、レウス」

フィリィが隣でそう呟くのが聞こえた。

第17話　役目

リオレウスの姿が目撃されたその夜、村長の家で緊急の集会が開かれていた。
蝋燭が数本灯されているだけの小さな部屋に集まった彼らの表情は硬く、その部屋のように暗い雰囲気が漂っている。
集会といってもそれは大規模のものではなく、出席しているのは村長、自警団のリーダー、そしてハンター達である。
十名にも満たない彼らは小さなテーブルを囲んで座り、椅子がない者はその後ろに立っていた。
その中にはシグとユークの姿もあった。

「さて、皆も知ってのとおり、この村の近隣にリオレウスが現れた」

前置きを一切省いた村長の言葉に、参加者の何人かが頷く。

「そこで数名のハンターに様子を見に行ってもらったところ、リオレウスが巣を作り始めていること、さらにはその番の存在が確認された」

途端に場がざわめきに包まれる。
シグも驚きに目を見開いて、その報せに愕然としていた。

『リオレウスとその番、つまりリオレイアが村の近くに住み着く』

それは村の壊滅と同義。

さすがに言い過ぎではないか、と思われる人もいるかもしれないが、これは誇張でも何でもない、純然たる事実。
実際、火竜に襲われて地上から姿を消した村は数知れないのだ。

『火竜』と呼ばれるリオレウス、リオレイアは飛竜の代表格であり、その名を知らぬ者はいないとまで言われている。

雄であるリオレウスは『空の王者』の異名の通り、高い飛翔能力を有しており、その巨大な翼で空を自在に飛びまわる。
そしてその驚異的な視力で空中から獲物を探しだすと、上空から一気に急降下、目標を強襲する攻撃を得意としている。
では、空からの攻撃が得意なのだから地上では弱いのか、と言われたらそうではない。
人間程度なら丸飲み出来るほどの大きな口から数千度の火球を放ち、丸太のように太い足で敵を踏み潰そうと驀進する。
まさしく強敵と言えるだろう。

対して、雌のリオレイアは『陸の女王』と呼ばれている。
リオレウスほど飛ぶことに長けているわけではないが、それを補って余りある地上での戦闘能力を秘めている。
例えば、火球一つをとってもそれがよくわかる。
火球そのものはリオレウスも得意とする攻撃手段だが、リオレイアのそれは次元が違うのだ。
前述した通りリオレウスの火球は超高温、直撃した生き物は消し炭となり、まず生きてはいられないだろう。
だが、リオレイアの火球はそれすらも超える。
リオレイアのそれを喰らったものは消し炭どころではなく、体が一瞬にして蒸発し、この世に塵一つ残さず消滅する運命となる。
さらには、その火球を連発できることもリオレウスとは大きく異なっている。

他にもスピード、尾の猛毒、死角となる腹部の堅さなど、挙げればきりがない。

しかし、そんなニ体に共通すること、それが強い縄張り意識と獰猛な性格だ。

特にリオレウスは縄張りの上空をいつも飛び回り、侵入してきた敵には何の躊躇もなく殺しにかかる。

故に、村の近くに巣ができたということは、火竜の縄張りに村ごと入ってしまうということであり、いつ攻撃されてもおかしくない。

ここに集まった者達の動揺は、それを知ってのことだった。

ざわめきが収まってきた頃を見計らって、村長がこの場の全員が考えていることを口にした。

「皆も理解していると思うが、この二頭を討伐するだけの戦力はこの村にはない」

そう、ミヅヒ村にはもうすぐ５０歳を超えるような老ハンターか、シグ、ユークのような新人ハンターしかいないのだ。

老いたハンターにはとてもではないが二頭の火竜相手に戦えるほどの体力はないし、シグ達は論外。

ならば手段は一つ。

その為にシグとユークはこの集会に招集されたのだ。

「この村だけで解決できない以上、街のハンターズギルドに依頼を出す他ない」

面々が渋い顔で頷く。
情けないが、村を守るにはそれしか方法がないのだ。
「そこでこの村で一番体力のあるシグ、ユーク両名にその役を命じる」
シグは中央に座っている村長の目を見ながら、しっかりと頷く。
自分達が指名されることは薄々気づいていた。
「通常、街に行くには三日は掛かる。しかしいつ火竜が攻めいるとも分からん。事は一刻を争う。
二人には一日、ないしニ日で街まで行ってもらう。勿論、その為の助力はするが……、寝る間も惜しむ強行軍になる、できるか？」
シグは力強く頷く。
もちろん、ユークも。
「よし。もう日は落ちてしまったが、すぐにでも出発してもらう。
街に向かう準備ができたら村の出口で待っておいてくれ。わしも残りの連絡が終わったら直ぐに行く」
そう言うと、村長は自警団へと今後の警戒方針を伝え始めた。
その声を背に受けながら、シグとユークは村長の家を出て、無言で自宅への帰路を急いだ。

第１８話　月夜の出立

日中の主役である太陽に代わり、黄金色の神秘的な輝きで夜の世界を照らすもの。

『月』

それは太陽の刺すような光線とは違い、全てを優しく多い尽くすような淡い光で夜の闇を払拭してくれる。
特に今夜のような満月の下ではそれが顕著に現れるもので、地面には月光によって生み出された幾つもの影が伸び、それらが折り重なって幾何学的な絵を描いていた。

そんな夜、ある山脈の一部に佇む寒村に二人の青年が立っていた。
その内の一人、大きな剣を背負った青年は腕を組んだまま忙しなく指を小刻みに動かしている。
その様子から彼が少し苛立っていることがわかる。
対して、腰に長い太刀を帯びたもう一人の青年は顎に手を当てて何かを考えているようだった。

「村長、遅いな」

珍しいことに、先に口を開いたのは大剣を背負った青年、シグ＝ザウエルだった。

「ん、そうだねぇ……」

気のない返事を返したのは、これまた珍しく難しい顔をしたユーク＝ストーナー。

二人は言われた通りに村の出口で村長を待っていた。
少しでも早く出発しなくてはと思い大急ぎで準備を済ませてきた二人だが、しかし肝心の村長がなかなか現れない。
少し肩透かしを喰らった気分のシグは、先程から落ち着きがなかった。
そして、それはシグのミヅヒ村に対する思い入れの強さからくることでもある。

『村のために少しでも早く――自分ではないもっと強いハンターが必要なら、一分一秒でも早くそれを連れてきたい。
例え自分が村のために直接的には役に立たないのだとしても、出来ることは全てやりたい』

そんな想いが沸々と沸き上がりシグ自身を掻き立てるのだが、『待て』をかけられた今はそんな感情が焦りとなって表面に現れていた。

ときに、人は強い緊張や焦りを感じるといつもとは違った行動を起こすものである。
それは寡黙になることであったり、挙動不審になることであったりとその種類や度合いは人それぞれだが、シグの場合は多少なりとも『饒舌』になることだった。

「ここに着いてからかれこれ３０分か……、本当に遅いな。自警団に伝える事と言ってもそんなに時間がかかるものなのか……？」

「第一、わざわざ皆が揃うために夜まで待たずとも、俺達二人だけでも先に用件を伝えていてくれれば日が落ちる前には出発できていただろうに」

「いや、そんなことよりもこれからの事を考えるべきか。いくら今夜が満月とはいえ夜に山の越えるのは相当大変だ。ここから街への道はほとんど整地されていないという話だし、俺達は一度もそこを通ったことがないからな。だからといって急がないわけにもいかない。遭難しては元も子もないが、少しくらいの危険は犯してでも素早く行動しなくては……。街に行き、ギルドでクエストを依頼して、それを受けたハンターを案内しながらまた村まで戻る、これを二日以内に終えるためには相当急がないと――」

と、こんな調子でいつまでも続けるのである。
もはやユークに話しかけているのか、それとも単なる独り言なのか本人にも分からなくなっているだろう。
シグは焦る気持ちにつられて口が動いているだけなのだから。

言うまでもなくシグは明らかにいつもの彼とは違うのだが、ユークの方も普段の雰囲気とはかけ離れていた。
シグの意味のない言葉の羅列をからかうわけでもなく、たまに気のない相づちを打つ以外はまるでシグの声が聞こえていないかのように無視を決め込んでいる。
かといってただぼ～としているわけでもなく、真剣に考え事をしているようで、時折何かを悔やむようなうめき声を漏らしている。
そんな二人の奇妙な図も、ふとシグが口にした言葉で簡単に消え去った。

「いつから付き合ってたんだ？」

「……へ？」

マヌケな声を出してしまったユークが、久しぶりに顔を上げた。

「な、なんのこと……？」

「何の事って、フィリィと付き合ってるんだろ？俺は全く気付かなかったがいつの間にそんな関係になっていたんだか。まぁ美男美女でなかなかお似合いだと――」

と、またシグが無意味な饒舌を発揮し始めた。

その間に、ユークは最初の動揺から立ち直る時間を得て、幾分か落ち着いて考えられるようになった。

そして、静かにシグの言葉を反芻していく内に思い当たる節も見つかり

「あぁ、そういえば……」と一人納得していたが、もちろんそんな呟きを口達者な彼は聞いていなかった。

それから間もなくして、二人の元に村長が到着した。

「シグ、村長が来たよ」

いつまでもブツブツ言っているシグをユークが揺する。
そんな事をされて、やっと気付いたシグが村長に向き直った。

「すまん、遅くなったな」

村長は開口一番に詫びを入れ、すぐさま二人に麻袋を差し出した。

「これは……？」

シグがそれを受けとると、微かに『カチャ』と音が鳴った。
中にはガラス製の何かが入っているようだ。

「熟練のハンターに頼んで急ぎそれを調合しておったのだが、意外と時間を喰ってしまってな」

シグが袋の口を開いてユークと二人で覗き込むと、そこには金色の液体が入った瓶が5～6個転がっていた。

「それは強走薬だ」

「強走薬、これがですか……」

シグは初めて目にする金色の液体をじっと見つめた。

【強走薬】

それはその名の通り、一口飲めば狂ったように何時までも走ることが可能になる、体力という概念すら忘れてしまうほど強力な一種の

スタミナ増強剤である。
使用時にはいくら激しい運動をしても息一つ切れないどころか、疲労を一切感じなくなる程だ。
しかし、その存在はかなり希少価値の高いものである。
というのも、この薬の主な原料となる【狂走エキス】は毒飛竜【ゲリョス】の体液だからだ。
ゲリョスの討伐自体はそう難しい事ではないのだが、ゲリョス一体からはごく僅かな量の狂走エキスしか取れない。
それゆえ、薬自体の価値も跳ね上がるという訳だ。
その狂走薬が5～6瓶、街で買おうとしたら一体いくらするだろうか？

「二人には急いでもらわなくてはならない」

村長は言う、通常では片道だけで3日はかかる行程を2日間で往復、それも街でハンターを募集するためのタイムロスを含めてだ。
そんな無茶を通すためには、のうのうと歩いて移動していたのではとてもではないが間に合わない。
そこで強走薬の登場だ。
見通しの悪い夜の山だろうが構わず走り続け、体力が尽きる寸前で服用する。
薬が効いている間は疲労を感じないし、むしろ効き目が切れた頃には元々のスタミナが回復しているというわけだ。
これだけを見ると割りと簡単なことのように思えるが、当然当事者にとってのリスクは大きい。

まず一つ、夜の山を走るという行為。これだけでも十分危険だ。
まともに整地されていない山道はもはや獣道に等しい。

地面がでこぼこなのは当たり前、木の根が地面の上に張り出していることも珍しくないし、好き勝手に伸びた植物が行く手を阻む。
昼間であれば容易に避けれたはずのそれらも、夜の闇によって周りが見えなくては掻い潜るのは困難だ。
さらに、二人が別段街への道に慣れている訳でもないので、下手をするとそのまま遭難ということにもなりかねない。
そんな条件の中、休まず走破しろと村長は言っているのだ、実際にそれを行う二人の負担は貴重な薬があるとはいえかなり大きい。

そして二つ目、それは強走薬の危険性だ。
強走薬に限らず大抵の薬には副作用はある、それが小さいか大きいかは薬の強さに比例するが。
しかし、幸いな事に強走薬の副作用はごく小さく、人体に影響が出ることはまずない。
問題は使用する人間の間違った認識と、肉体が耐えられる許容範囲の判断の難しさだ。
前述した通り、強走薬にはスタミナを増強させる作用がある。
しかしここで誤解してはならないのが、増強されるのはスタミナであり筋力ではないことだ。
使用中は全くの疲れ知らずになれる薬ではあるが、それをいいことに自分の筋肉を限界以上に酷使すればどうなるか。

答えは至極簡単。
耐えきれない物は壊れてしまう。
つまり筋繊維や健の断裂が起こる。
一般的に強走薬が使用されるのは戦いの最中であり、戦闘中は極度の興奮状態にあるため一時的にではあるが痛みを感じにくくなる。
そのため自分の体が悲鳴を上げていることにも気づかず、疲れを感じない本人は無理に動き続けてしまい、結果的にハンターとしての寿命をすり減らしてしまった事例も多々ある。

よってこの強走薬を服用する時は薬の正しい知識と、自分の限界を見極める目が重要になってくる。

しかしシグとユークの場合は、それらの事を理解した上で無理を押さなくてはならない。
なんといってもリオレウス、リオレイアが何時この村を襲うとも限らないのだから。

「お前達には本当に苦労をかけるが、よろしく頼む」

そう言うと、村長は姿勢を正して二人に頭を下げた。

「村長、俺達も村の一員で……、ハンターなんですから、このくらいの事は当然です」

「……む、すまぬな。くれぐれも無理をせぬように」

「……努力します」

シグはそう呟くと、素早く強走薬の瓶をポーチに詰め、ユークに向き直った。
先ほどから変わらず、まだ神妙な顔をしているユークが頷く。

「それでは、行ってきます」

それだけ言い残して、シグとユークは満月に照らされた道を走り出した。
二人が目指すは山脈を越えたその向こう、ハンターの街『イセナ』

二人の若いハンターを見送る村長は、鎧がガチャガチャと鳴る音が次第に遠ざかるのを何時までも聴いていた。

第１８話　月夜の出立（後書き）

強走薬の効果については勢いで書いてしまったので私にもよく整理できていません、ごめんなさい。でもたぶん『肺機能が上がるし乳酸も溜まらないけど、調子こいてると肉離れ起こすよ？』って感じだと思います。ごめんなさい。

第19話　少女

ミヅヒ村でシグとユークが出発した頃、それと時を同じくして、遠く離れた地でも一人の少女が走っていた。

白いワイシャツに赤いリボン、下は黒のスカートと学校指定の制服を着ている少女は、革靴が石畳を蹴る乾いた音を聞きながらひたすら走る。

（遅くなっちゃったなぁ……）

短いスカートが風で翻っていないかと気にする一方で、少女の小さな口からは微かな嘆息が漏れる。

変わらず歩を進めながらも、少女の心は憂鬱だった。

それというのも、日が完全に落ちてしまったこんな時間に『あそこ』に行くハメになったからだ。

そもそも、少女がこんな夜中に一人で外で走っているのは、学校に居残って生徒会の仕事をしていたせいだった。

本当なら断ってでも早い時間にあがりたかったのだが、生徒の長である生徒会長に頼まれてはそれもできない。

どうやら生徒会長に目を付けられてしまったらしい彼女は簡単には解放してもらえず、仕事がやっと終った時にはこんなに遅い時間になっていたというわけだ。

――仕事のことはしょうがないと少女も分かっている。

もうすぐ行われる学校行事の準備が忙しいのは全校生徒の周知の通りだし、少女も生徒会の一員なのだから手伝うのは当然のこと――とは思ってみても、少女としてはこんな時間にあそこに行くのは、できるだけ避けたいのが本音だった。

少女は
「はふぅ」とため息をつきながら、もしかしたらギリギリ間に合うかも、とほぼ無いであろう希望を胸に走る。
道の両側に立ち並ぶ民家から、蝋燭の優しい光と晩御飯の美味しそうな匂いが漂ってきて、なんとなく哀しくなった。

しばらく走ると、少女は開けた場所に出た。
淡い月光の下に照らし出されているその広場の真ん中には、大きな噴水の輪郭をうっすらと見ることができる。

少女が住むこの街は、広場を中心に四方に向けて大きな通りが伸びており――少女が走っていたのもその通りの一つだ――日中なら露店なども立ち並んで、街で一番活気のある場所となっている。
本来なら街の中心部に位置しているこの広場から各通りが見渡せるし、通りの遥か彼方にある巨大な鉄製の門が見えるはずだが、今は薄い闇に遮られて見ることはできなかった。

その薄暗い広場の一角に、明々と燃え盛るかがり火を掲げた二つの店があった。
日が落ちると同時に街のほとんどの店が閉まることを考えれば、まだ営業しているこの二軒の店はかなり珍しいことになる。
それでなくても、この店は周囲にある建物よりも二回りは大きく、夜だというのにひどく騒がしいため目立つのだ。
そのうるささは、時折怒号まで聞こえてくるほど。

その宴会でも行われているかのような喧騒さを聞いて、少女は走るのを止めて項垂れた。

その様子を見ると、どうやら少女は間に合わなかったらしい。
しかし、落ち込んだところで事態が好転するわけでもなし。
少女は気持ちを切り替えるために両の頬をパン！と張り、気合いを入れて歩き出した。
向かう先はまだ営業している二軒の内の、建物の大きさも漏れてくる声も大きな方。

（……それにしても、相変わらずひどい匂い）

一歩進む度に喧騒や刺激臭が増しているような気がして、少女の整った眉がピクリと動いた。
本当は今すぐにでも回れ右して家に帰りたいのだが、そこはぐっと堪えて少女は店を見上げた。

『ＨＵＮＴＥＲ' Ｓ　ＧＵＩＬＤ　ＩＳＥＮＡ　ＢＲＡＮＣＨＣＬＩＣＥ』

ハンターズギルド、イセナ支部。
かがり火の炎に照らされた看板には、そう書かれていた。
少女はそれを確認し、酒臭い空気の中で小さく深呼吸してから観音開きの扉を勢いよく開け放った――

と同時に体を押された。

いや、誤りがあるので訂正しよう。

確かに少女はそう感じたし、事実たじろいでしまったが、外部から物理的に影響を受けた訳ではない。
強いて言うのなら店、もといハンターズギルドの中の爆発的な騒がしいさというか、異様な熱気というか、すえた男臭さというか、そんなものに心理的に押された――というか、軽くひいた訳だ。

不覚にも硬直してしまった少女の目と鼻の先で、今開けたばかりの扉が自然に閉まる。

バタン

その音に正気を取り戻し、再び――今度はこっそりと――扉を開けた少女の頬は少し赤かった。
扉を開けたのに入れなかった所を誰かに見られたと思って、ちょっと恥ずかしいようだ。

が、それは無用な心配だった。
ばか騒ぎが繰り広げられているギルドの中で、少女のことを気にかけている者はいなかったからだ。
その事に秘かに胸を撫で下ろし、少女は店内を見回す。

そこには溢れかえるほどの人がいた。
いたるところにある丸テーブルに、4～5人で座って料理と酒を貪っている人がいれば、奥にある細長いカウンターに着いて静かに飲んでいる人、果てはほとんど中身の入っていないジョッキを振り回しながら、下手な歌を声高に歌っている人までいた。
彼ら――ほとんどが男性客だった――は、酔いに任せて人目もはばからず騒ぎ立てている者が多く、また、一目で一般人ではないと分かる物騒な出で立ちをしている。
仲間と肩を抱き合って笑っている青年は、誤って落としただけで人

の足を粉砕骨折してしまいそうな鉄槌を背負っているし、店の片隅で静かにグラスを傾けている褐色の肌の老人は、中折れ式の大きな猟銃を壁に立て掛けている。
ハンターという職種についている彼らは、たとえ食事中でも武器と鎧をその身に纏っている。
もちろん、四六時中そうというわけではないのだが。

ここ、ハンターズギルドは酒場兼ハンターのためのクエスト斡旋所といった場所だ。
クエストの斡旋と言えば、村の村長がしている仕事と同じのように感じるが、こちらはなかなか複雑である。
いろいろな所から舞い込んでくる依頼を受け付けるか否かの選別、危険度を測りそれに応じたレベル付け、大勢いるハンターにクエストの斡旋・管理等々。
依頼人と交渉することもあれば、山積みの書類と一日中にらめっこすることも少なくない。
もちろん一番の仕事はクエストをハンターに紹介することだが、ハンターからしたらそれと同じくらい酒場としての存在が重宝されていた。

『場違い』

この一言に尽きるだろう、少女の存在は。
シンプルながらも可愛らしい制服を着た小柄の少女が、荒くれ者が集まる夜の酒場に入ってきたのだ。

その様子は、あたかも飛竜の巣窟に迷い込んだ子犬くらい場違いだった。
それゆえ、酒場にいた人間が少女という異質の存在に気付くのに時間はかからなかった。

――最初に気付いたのは、入口近くのテーブルに座って麦酒を煽っていた中年男性だった。
その男の髪は長いこと洗っていないせいで脂でべとべと、頬は酒の飲み過ぎで真っ赤に染まっており、だらしなく緩みきった口元からはヤニと歯垢で黄ばんだ歯が見え隠れしている。
清潔な格好をしている。とはお世辞にも言えない男だが、その図体だけはかなりでかい。
このまま少女の細い腕を掴んで路地裏にでも引きずり込み、乱暴したところで何の不思議もない風情だった。

頬を染めて立ち尽くす少女を見つけた中年ハンターは、気味の悪い笑みを浮かべたまま目を細め、少女の全身を見回す。
男は少女の小さな胸には興味ないらしく、そのなめ回すような視線は、もっぱら少女の肉付きの良い腰回りと短いスカートから伸びる白い太ももを行き来する。
その間にも、男の下卑た表情はますます『醜悪』という言葉が似合う顔に変わってゆく。
そして男の視線が少女の顔に向かった時、男がとった行動は少女に近づくことでも、ましてや路地裏に引きずり込むことでもなく、ただ目を見張ることだった。
そして暫く呆けた後、急いだ様子で隣の男に耳打ちする。
それを聞き、少女を見つけた男も同様に驚いた表情になる。
それからは連鎖的に、まるで水面にさざ波がたつかの如く、少女の存在はあっという間に酒場中に知れ渡ることとなった。

（うわぁ……）

し～んとなってしまった酒場の中で、少女は苦笑の表情を作りながら心の中でうめき声をあげた。
先程までの騒がしさが嘘のように静まり返った酒場中の視線が、今や彼女一人に向けられている。
そのほとんどの人が珍しいものを見るかのような顔で――中にはジョッキを中途半端に持ち上げたまま固まって――少女を凝視しているか、近くの人とヒソヒソと話している。
たまに
「……そ…うの鬼ひ…だ」
「あ…がか？とても……ない」
という会話まで聞こえてくる。

実は、こうなる事が嫌だから少女はあんなにも急いでいたのだ。
まだ早い時間ならハンターは狩りに出ているため、ギルドに居る人は少ない。
だが、一度集まってしまえば日付が変わるまで、いや朝日が登るまで宴会が続いてしまう。
今のような異様な状況に陥りたくなかったら、ハンターが酒場に集まってくる前にさっさと来て、用事を済ましてしまうしかない。
そしていつもならそうしてきたのだが、今日は生徒会長の妨害が――本当は生徒会の仕事が――入ってしまったために、このような少女にとって居づらい空気が出来てしまったわけだ。

居たたまれなくなった少女は、その無数の目から逃げるようにそそ

くさとその場から移動した。
最初こそ少女を目で追う人間も多くいたが、次第にその数も減り、少女がテーブルの間をすり抜けてカウンターの横まできた時には、完全に元の喧騒さが戻っていた。

安堵のため息をつきながら、少女はカウンターの側の壁に掲げられているボードを見上げた。
そこにはびっしりとクエストの依頼書が張られていた。
中には古い依頼書の上に、別の依頼書が張られているものすらある混雑ぶりだ。
少女は後ろで手を結び、少し見上げるような形でボードを見つめる。
数多の紙の上を滑るように、少女の蒼い目が――

「わっ！！」

「きゃあ！？」

背後から不意にかかった大声に、少女の小さな体が跳ね上がる。

「く、クリスさん……」

嬉しくない理由で高鳴る胸を押さえながら振り返ると、そこにはこのギルドの制服であるメイド服を着た女性がいた。

「お、驚かさないでください！」

「んふふ～」

メイド服の女性、クリスは少女の反応にしてやったりと満足げに笑う。

「いいじゃない。ちょっとしたスキンシップよ、スキンシップ！」
「だったら、もっと普通に声をかけてくださいよ……」
少女が少しはぶてた様子で呟くと、クリスは
「ごめんごめん」と笑顔のまま謝った。
「もぅ、……いいですよ。いつものことですし」
「ふふふ」

クリスの笑顔をジト目で見ながら、やっぱり男の子みたいな人だと少女は思った。
ショートカットの鮮やかな金髪に薄い化粧を施した愛嬌のある顔。
少女よりも4～5歳は年上だったはずだが、ボーイッシュな雰囲気と相まって、不思議と少女と同い年に見えてしまう。
この人は活発そうな外見に違わず、体を動かすとその行動の端々に茶目っ気がある。
今だって、にこにこと無邪気な笑みを浮かべている様子はイタズラを成功させて喜んでいる子供にそっくりだ。

「ぅ～、それで何か用ですか？」
「ん？特にないわよ。ただこんな遅い時間に珍しいな～と思って声かけただけだから」
クリスはそれだけ言うと、じゃあね～と手を振りながら雑踏の中に消えてしまった。
一応、このギルドの店員なので仕事に戻ったのだろう。

「……」

一人取り残された少女は腰に手を当てて、クリスの去った辺りを呆れた様子で見つめていたが、やがてクエストボードに向き直ってそこに集中し始めた。

結局、少女の探していた物はこの日も見つからず、その後暫くして酒場を出た。
それまでに、少女はもう二回ほどクリスにからかわれた。

第２０話　黒目の青年

鐘の音が高らかに鳴り響く。

その澄んだ音は誰の耳にも確かに届き、それがもたらす意味が今この部屋の中にも緩やかに浸透していく。

少女の動きは迅速だった。

本日の授業終了を知らせる鐘が鳴るや否や、机に広げられたノートや教科書をやや適当に、しかし素早く鞄に詰め込み、目にも止まらぬ速さで教室を飛び出す。

仮にも生徒会の一員であるはずの少女は人目もはばからず廊下を走り、階段を一段飛ばしでかけ降り、そのままの勢いで校門を駆け抜けた。

それは３００人近くいる生徒の誰よりも早く、少女はまるで逃げるように学校から離れる。

ちらりと肩越しに後ろを振り返ってみたが、昇降口に人の姿は無い。

それを確認して、少女は微かな笑みが浮かべながら大通りの雑踏の中に消えた。

まだ十分に高い太陽の下、イセナの大通りは多くの人で賑わっていた。

道の両脇に立ち並ぶ露店ではありとあらゆる物が並び、雑踏に負けない大声を張り上げる売り子の元気な声が、人々の頭上を飛び交っている。

――取りたて新鮮な兜ガニはいらないかい！今なら一杯、たったの

４００ｚだ！パニーズ酒と合わせると最高だよ！おっ、そこの奥さんちょっと見てきなよ！――

足を止めた客を露店の女主人が目ざとく見つけ、さらに商品を推していく。
その隣の露店からは香ばしい匂いと共に肉の焼ける美味しそうな音が漂い、街行く人の食欲を刺激する。
その店先には『ガビアルカルビの串焼き一本７０ｚ』と書かれた板が下げられていた。
そこの露店には、しばしば屈強な男が立ち寄っている様子だった。

露店には野菜や魚介類等の食料を扱う店があれば、立ち食いタイプの簡単な料理を売る店も、ともすれば、かなり高価ではあるがモンスターの素材を並べている店もある。
初めて来た者は、何か祭りでもあるのか？と思ってしまうほどの規模と盛り上がりぶりだが、イセナに住む者にとってはこれが日常であった。
ちなみに、イセナの街は頭に『バカ』が付くほどでかい。
竜車が通れるように、と余裕をもって３０メートル幅に作られた大通りは、一本だけで延々２キロ続いている。
一本の通りを過ぎたら中央の広場を境にまた別の通りが敷かれているため、結局イセナは直径４キロの円形の街ということになる。
もちろん露店が立ち並ぶのは街の中心部だけだが、それでも全ての露店を見て回ろうと思ったら二日や三日では足りないだろう。

その中を、少女は軽快な調子の鼻歌を歌いながら歩いていた。
正面から向かって来る人の波を、右に左にスイスイ避けながら軽い足取りで進む。

その少女の口の中にはさきほど露店で買ったリンゴ味のアメが転がっており、まるで満開のひまわりを思わせる笑顔でアメをほおばっている。
そんなご機嫌な様子の少女は、しばらくして昨夜の中央広場に到着した。
そこには露店こそ並んでいないが、大きな噴水の周りでは子供が楽しげな声をあげて走り回っているし、各通りに向かう人達で絶えず溢れていた。
その広場を横切って、少女は一軒の大きな店へと入る。
その店の入口の上には【ハンターズギルド】の文字が入った看板。
しかし昨夜のギルドとは違い、今日少女が入ったギルドは小綺麗な雰囲気がある。
流暢な字体で綴られた看板はどこか高級感があるし、観音開きの扉もツヤのある美しい木目が走っている。
昨日のギルドでは雨ざらしの看板が薄汚れているし、夜の間かがり火に晒されている扉は黒く煤けていた。
それが無いだけでも、こちらのギルドの方が清潔な印象を受ける。

その観音開きの扉を静かに開けて、少女はギルドの中に入った。
思った通り、この時間帯にギルドに居るハンターは少ない。
皆狩りに出ているか自室で休んでいるのだろう。
ここに居るのはくたびれた様子の――恐らくは今狩りから帰って来たのであろうハンター達が１０人ほどと、カウンターで何やら話し込んでいる青年が一人いるだけだ。
ここことは別の、もう一つのギルドで昨夜繰り広げられていた１００人規模の宴会に比べたら、誰も居ないのと同じである。
少女は軽い足取りでカウンター側のボードへと移動する。

（今日はどうかな……？）

もう何年も続けてきた行為を今一度繰り返す。
ボードに張られた依頼書の上を少女の目が縦横無尽に行き来する。
昨夜のギルドに張られていた紙には『納品』や『運搬』等の文字が多かったが、こちらのギルドの依頼書にはやたらと『狩猟』の二文字が目立つ。
しかし、それでもお目当ての物は見つからなかったらしく、少女の口から嘆息がもれた。

小さな肩を落としながら、することが無くなった少女は家に帰ろうと体を出口に向ける。

（……あれ？）

違和感と言っていいのだろうか。
出口に向かう途中で、何か気になる物が視界を掠めた感じがして、少女は振り返った。
そこには先程からカウンターで女性店員と揉めている一人のハンター。
少女が違和感を感じたのはその青年の――目。

「くろ……？」

青年の目が、黒い。
イセナが属するこの大陸では、目が黒色という事はとても珍しい。
そもそもこの大陸に住む者に『黒』は目の色として認識されていないのだ。

それだけが理由ではないが、ともかく少女はその青年に興味がわいた。

気付かれないようにゆっくりと青年に近づいてみると、青年はやはり店員と口論しているらしく、徐々に二人の話が聞こえてきた。

「――ですから、こちらもあまり時間がないんです」

「そうは申されましても、ギルドとしては自然の生態系を崩さない為にも依頼の選別は必要不可欠ですので……、ご理解下さい」

「でも、今すぐにでも村は――」

どうやらクエストの依頼をしに来て、揉めているようだ。
こういう事は度々起こる。
依頼する側は切羽詰まった状況でモンスターの討伐を頼みにくる事が多いが、ギルドは依頼人達がその討伐目標から被害を受けた場合を除いて、すぐさまハンターを派遣することはできない。
なぜなら飛竜などの大型モンスターは、それ一匹が居るかどうかで近隣の生態系を狂わす要因となるからだ。
何の考えもなしに飛竜を殺しすぎれば、必ず歪みが生じる。
例えば、ある地域で肉食の飛竜が大量に狩られたとする。
そうすると、天敵がいなくなったアプトノス等の草食獣が爆発的に増殖してしまう。
すると今度は、増えすぎた草食獣を狙ったランポス辺りの中型の肉食獣が増えすぎてしまい、いずれはそれらによる人間の被害が増加してしまう。
そうでなければ、肉食獣によって数が減らなかった草食獣が餌となる草木を食べ尽くしてしまい、その地域一帯の自然環境が一変してしまう事も起こりうる。
人間の自分勝手な行いでそんな事態を招かない為にも、ハンターを管理するギルドはモンスターの生息状況の把握が必要なのだ。
もちろん、人間が襲われるなどの緊急時にはそんな悠長な事は言っ

てられないのだが、どうやらこの青年の依頼内容はそこまで切迫していないようだ。

「でも、襲われてから依頼しに来たのでは間に合わないんです」

青年は自分達の村の命が懸かっているため、必死に頼みにこんでいる。

が、ギルドも組織だ。

「誠に申し訳ありませんが、討伐依頼としては受け付けることはできません。しかし駐在型のクエストとしてなら可能になります。その場合ですと報酬金が割高になってしまいますが……、いかがされますか？」

「駐在型、ですか……？」

青年の声に疑問の色が浮かぶ。

どうやら駐在型のクエストを知らないらしい。

駐在型のクエスト。

それは受注したハンターが依頼の地に住み込み、その指定された区域がモンスターによって襲撃された場合にのみ迎撃するという、ハンターの数が多い街特有のクエストである。

この青年の村のように、モンスターの生息状況をギルドが調べている間、村を守るためにも使われるタイプのクエストである。

狩猟するクエストの目的が『攻』なら、滞在するタイプのクエストの目的は『守』である。

だが滞在型の場合はその目的の関係上、クエストの期間が長くなりがちなのでハンターに支払う報酬金の額が跳ね上がる。

そのため依頼側が断念することが多く、ほとんど依頼としてクエス

トボードに並ぶことはない。

この青年も断るだろうな、と思いながら少女は盗み聞きを続ける。

――が、青年の放った次の言葉で、少女は目を見開かせた。

第２１話　蒼の瞳

青年の放った言葉で、少女は目を見開かせた。

「ミヅヒ村にお金があるか分かりませんが……」

――ミヅヒ村

青年は確かにそう言った。

少女がこの数年ギルドに通い詰め、クエストボードの上に探し続けたたった四文字の言葉が今、目の前の青年の口から放たれたのだ。

少女の心臓が飛び跳ね、鼓動が一気に高まった。

「でも……はい。その滞在型クエストとかいうのにします」

「では、この用紙に必要事項をご記入下さい。記入箇所は――」

店員がカウンターの下から依頼書を取り出して説明を始める。

その一方、少女はやっと巡り会えたチャンスを逃さぬため、逸る気持ちを懸命に抑えて虎視眈々と目を光らせていた。

「はい、確かに受け付けました。後は受注するハンターが集まり次第、ご連絡いたしますので――」

しばらく経ち、ギルドの店員が依頼書を受け取りながらそう言った瞬間、少女は素早く手を挙げた。

「そのクエスト、私が受けます！」

その大声に青年とギルドの女性店員が振り返る。

「私が受注します。契約金はいくらですか？」

「え？……えぇと、１０００ｚです」

戸惑いがちにそう告げる店員を他所に、少女は所持金を確かめる。

「うぅ、……た、足りない」

どうやら財布の中には１０００ｚもなかったようだ。
途中でアメを買い食いしたことが悔やまれる。

「ちょっと待っててください！すぐに持って来ますから。他の人に渡さないで下さいね！」

そう言って少女は踵を返し、店の外へと飛び出そうとしたが――

「待ってください！」

青年に引き留められた。

「あなたがこの依頼を受けてくれるのですか？」

「はい！よろしくお願いしま――っ！？」

元気よく振り返った瞬間、少女は両の膝がカクンと折れ曲がったのを感じて慌てて近くのテーブルに手をついた。

（あ、あれ？足が……？）

何とか転ぶのだけは免れたが、少女の膝は震え続ける。

小刻みに、ガクガクと。

それはまるで――

ガタタッ！

少女が首を傾げている背後で、慌ただしく椅子が倒れる音が響いた。

そちらの方を振り向くと、さっきまで静かに食事をしていたハンター達が全員立ち上がっていた。

いつの間にか喧嘩でも始まっていたのかな？と訝しんでみたが、そんな様子でもない。

なぜなら、皆が皆張り積めた表情で武器に手を掛けているからだ。

酒場を兼ねているハンターズギルドで喧嘩が起こるのは珍しいことではない。

ただでさえ荒々しく気性の激しい者が多いハンター達の間では喧嘩は日常茶飯事、毎日起こる些細な出来事でしかない。

しかし、当然のことながらハンターが狩猟用の武器で喧嘩をすることはない。

その理由は言うに及ばず、生身の人間に使うにはそれはあまりに強力すぎるからだ。
勿論、素面のハンターならば喧嘩とは武器などといった不粋なものは使わず、己の身一つで行うものと心得ている。
が、常識の通用しない酔っ払いにそんなモラルを求めても仕方がないので、『人に対しての狩猟用武器の使用は厳禁』はハンター達の間で遵守しなくてはならない数少ない法の一つである。
ちなみに、これを破れば良くてハンターとしての権利剥奪、悪ければ闇に消される。

つまり、殺される。

それほどこの法は重く、大切なものなのだ。
――それが今、ちょっとした弾みで破られそうになっているのだ、尋常な事ではない。

しばらくギルドの中に奇妙な沈黙が流れたが、一人のハンターが咳払いをしながら椅子を直したことで止まっていた時間が進み出した。
それと同時にギルドの中に充満していた異様な空気も四散する。
結局何が起きたのか分からないまま――心当たりはあるが――とりあえず普通に立てるようになった少女は青年に向き直った。

「あの～」

「……」

「あの～、聞こえてますか？」

「……あ、はい！何でしょうか？」

青年の呼びかけに少し呆けていた店員が慌てて答える。

「えっと、こちらの方で大丈夫なんでしょうか……？」

青年が少女を見ながら心配そうに店員に聞く。
彼が心配になるのも分からない話ではない。
たたでさえ小柄な上、今の少女の格好は薄手のワイシャツに短く加工されたスカートという明らかにハンターらしくない姿なのだから。

「ご安心下さい。彼女の実力は当ギルドが保証致します」

「でも、火竜二匹を相手にするかもしれないんですが……？」

「彼女はまだ若いですが上位ハンターでもありますし、既にリオレウス、リオレイア両頭の討伐経験もあります。ご心配には及びません」

「はあ、しかし……」

そう言われてもまだ渋る青年。
すっかり蚊帳の外の少女も何か言おうと口を開きかけたが、扉を荒々しく開けて入ってきた闖入者によって遮られた。

「ユーク！」

その闖入者はよく響く声で青年の名を呼ぶと、脇目もふらず真っ直ぐにこちらに近づいてくる。

その姿に、少女の端正な顔が驚愕の色に染まる。

しかし闖入者はそんな少女の様子に気付くことなく、青年――ユークの横に立つ。

「粘ってみたがやっぱり向こうのギルドは駄目だ。火竜二頭の討伐はレベルが高すぎて受け付けられないらしい。こちらのギルドに申し込むように言われた」

全身を鎧で包んだ闖入者が早口にまくし立てた。

それに対して、落ち着いた様子のユークが答える。

「う～ん、まぁ最初からそういう話だったからしょうがないよねぇ。あっ、こっちは滞在型のクエストなら大丈夫みたいだよ、シグ」

「滞在型？……あぁ、あれか。それで？もう登録したのか？」

「うん、ついさっき済ませておいたよ。それで――」

どんッ！

「――っと」

鈍い音と共に軽い衝撃を受けたシグは小さくよろめいた。

あまりに急な事に眉を潜めたが、彼もこの程度で倒れるようなヤワ

な鍛え方はしていないつもりである。
足を一歩踏み出すだけで堪えたシグは、それと同時に胸の辺りに何かが巻き付いているのを感じてそこを見下ろす。
――そこには二本の小さな手。
首を傾げながらシグが頭だけを後ろに反らすと、そこには蒼い髪をポニーテールに纏めた小さな頭があった。
「……あ、あの？」
名前どころか顔さえ知らぬ少女に急に背後から羽交い締めにされたシグは、動くこともできずに困惑した。
しかしそんな彼に構うことなく、少女はシグの背中に顔を押しつけたまま離れようとしない。
困り果てたシグがユークに視線を送るが、ユークも苦笑いしながら頬を掻くのみ。
背中にへばりついている少女がたちの悪い酔っ払いといった類いではないことは分かるが、話し掛けても返答はないし、離れる様子もない。
仕方なしにシグは巻き付いている手をやんわりとほどこうとしたが、まるで抵抗するかのように締めつける力をさらに強くされた。
その少女の手が力を込めすぎるあまり白くなっているのを見て、シグは振りほどくのを諦めた。
「え～、よく分かりませんが離してもらえませんか？俺達は急いでいるので――」
何とか説得しようとしたシグだったが、彼はすぐに口を閉ざすこと

になった。
少女がゆっくりと顔を上げ――その潤んだ瞳とシグの漆黒の眼が合ったから。

蒼穹の如く何処までも澄んだ蒼。
深海の如く何処までも深い蒼。
対極で、矛盾しあう二つの美を併せ持つ瞳。
忘れられるはずがない瞳。

「……もしかして、メイ…か？」

少女が、コクンと小さく頷いた。

第２２話　メイ＝ベルロット

酒場という所は昼と夜とでは全く違う顔を見せるものである。
バカ騒ぎをする客がいる間は街で最も騒々しく、混沌とした空間と成り果てているが、夜が明け、昼になり、その客が掃けてしまうとそれまでのギャップも相まって、今度は街一番の寂しい店になってしまう。
特に『ハンター』という気性の激しい人種ばかりが集まるこの酒場では、その傾向が顕著である。
数日に渡る命がけの戦いを終え、久々に人間らしい食事と酒にありついたハンター達の中には、周りにかける迷惑など露ほども考えずにひたすらに騒ぐ者が多い。
その騒々しさには戦友への労いと無事に生きて帰れた事への喜びが詰まっているため、度が過ぎない限り誰も止めようとはしない。むしろ皆積極的に騒ぎに参加しようとする。
しかし彼らもハンターである以上、食っていくためには狩りに出なくてはならない。
そのため、今のように昼下がりと言うには遅すぎて、夕方と言うには早すぎる時間帯には全くと言っていいほど客がいなくなる。

そんな他人に邪魔されることのない静かな時間に再開できたのは、二人にとって幸運な事だっただろう。

人口約一万の街、イセナ。
ミヅヒ村の３０倍強の人間で溢れかえる街の中で、互いの現状や生活習慣さえ知らない二人が意図せず巡り会える確率は、果たして如何程だろうか？

それは奇跡のようで――

――必然でもあった

人気の無い酒場の奥で、シグと少女――彼の実の妹であるメイ＝ベルロッドが向き合っていた。
そのシグが、彼の親友でさえも聞いたことのない優しい、諭すような声を出した。

「駄目だ」

その言葉に、シグよりも頭一つ分小さいメイが目を見開いて兄を見上げる。

「な、何で！？」

「危険過ぎる」

十年ぶりに再開を果たした兄からの回答はたったの一言。
その冷たい声色に思わずどもってしまう。

「で、でも私も飛竜と戦ったことあるし……」

「それでも駄目だ」

「ぅ～、大丈夫だよぅ」

「大丈夫じゃない。死んだらどうするんだ」

「どうするって言われても、死んだら何もできないよ？」

「……」

目尻を下げて困ったように言うメイに、シグはムスッと不機嫌な顔になった。

「お兄ちゃんはこれが終わったらすぐに村に帰っちゃうんだよね？」

「ああ、そうだ」

シグはとりあえず不機嫌な態度を引っ込める。

「そしたらまた会えなくなっちゃうよ。私は家の人からあの村に行っちゃいけないって言われてるし、お兄ちゃんもあまり街に来ちゃいけないんでしょ？」

「まぁ……そうだな」

シグが苦しそうに答えると、二人の近くで静かにしていたユークがんん？と不思議そうに首を傾げた。

「やっと会えたのにまた離ればなれになるなんてイヤだよ……」

「そう言われてもな……」

身長差ゆえに上目遣いで見つめてくる妹に、シグは困って頭を掻いた。

「お兄ちゃんが私を心配してくれるのは嬉しいよ？でも私だってハンターの端くれ。狩りで怪我をしたり死んだりする事に覚悟はできてる。

それにクエストとして行くのなら家の人にも文句は言われないし、

堂々とお兄ちゃんの住んでる村に行けるもん」
メイがえへへへ、とはにかみながらシグの顔を覗き込む。
しかし覗き込まれたシグの表情は苦いものだった。
「……そこまでしてか？」
「え？」
シグの声が聞こえなかったのか、メイが覗き込むのを止めて聞き返した。
「そこまでして村に来たいのか？
この依頼を受けて村に来るということは、メイが火竜を相手に戦うことになるんだぞ？このクエストの定員は一人。悪いが村のハンターもあまり戦えないから実質メイ一人で戦わなくてはいけない。
メイはそんな危険なクエストを受けてでも、そこまでしてでもあの村に行き――」
「――村に行きたいんじゃないよ。私は少しでも、ほんの少しでもいいからお兄ちゃんと一緒にいたいだけ」
シグの言葉を遮ってメイが笑顔で答えた。
その笑顔はまさに写真の中の彼女が見せていたそれで、まるで太陽の下で元気よく咲くひまわりのようであった。
シグはそのストレートな言葉に秘かに戸惑いながらも、真剣な顔でメイの目をじっと見つめた。
シグとしてはメイが危険な目に合うのは絶対に阻止しなくてはならない事だ。

残された唯一の肉親であり、何より大事な妹を傷つけるものを彼は見逃すつもりもないし、許すつもりも毛頭ない。
あまり表には出したがらないが、シグにとってメイ＝ベルロッドとは本当に特別な存在であり、それに対して他人からシスコンと馬鹿にされようとも甘んじて受けるつもりである。（勿論、ユーク辺りがそんな事を言ってきたらキレるが……）
だが、大事であるが故に妹の考えを頭ごなしに否定することはしたくないとも思っている。
それ故に悩んでいるのだが、所詮シグが知っているメイは彼女が六歳の頃までだ。
比較的頻繁に手紙のやり取りはしていたとはいえ、やはりそこから読み取れるのは間接的な彼女でしかなく、今の彼女の人間性は判断しかねる。
だから今こうして正面から彼女と向き合い、考えを聞き、彼女をどうするか考えているのだが――

シグはどうにも負けそうである。

何というか……、あの全く穢れを知らないかのように澄んだ、それでいて絶対に折れない強い意思を称えた目を見ていると断ろうにも断れない。
やはり俺は甘いのだろうか、と嘆きながら、何となく愛娘を持つ父親の気持ちが分かったシグであった。

「……はぁ」

長い沈黙の後、シグが小さなため息をつきながら項垂れた。
いろいろと悩んだ挙句、底抜けに明るく育ったこの妹を説得する事

など出来ないと理解したようだ。

「大丈夫だよ、お兄ちゃん。火竜くらい楽勝だよ！」

兄がもう反対しない事を感じとったのか、メイが跳ねるような声で言う。

楽勝なんて事はないだろう。と思いながらも、シグはメイがミヅヒ村の依頼を受ける事を渋々了承した。

「しょうがない……か。だが無理はするなよ。それがこの依頼を受ける条件だ」

「うん！」

元気よく頷いたメイは

「準備して来るからちょっと待ってて！」と言い残すと、風のようなスピードで酒場を飛び出していった。

「シ～グ～」

メイを待つ間、暇な二人で近くの椅子に座るっていると、ニヤけ顔のユークが急に変な声を出してきた。

「何だ？」

「妹さんにぃ～嘘をついちゃ～いけないよぅ～」

やけに語尾を伸ばすしゃべり方に気持ち悪いと思いながらも、一応返事はしてやる。

「何の事だ？」

「街に行っちゃいけないぃ～なんて決まりはぁ～村にはないよねぇ～？」

「ないな」

「あり？」

てっきり誤魔化すかばつの悪い顔をするかとユークは思っていたが、シグは意外にもあっさりと認めた。

「え、えぇ～と……何でそんな嘘を？」

からかおうとしていたのに、すっかり虚をつかれたユークは普通に質問してしまう。

「前にも言っただろ。メイにはまだ会わない方がいいと思ってた、ってな。だから会いたいと言ってくるメイへの言い訳として手紙にそう書いただけだ」

「ふ～ん、……でもそれって勘でそう思ってるだけなんだよね？」

ユークの相次ぐ質問に、テーブルに頬杖をついたシグは違うと言うように手を振った。

「まぁ、勘っていうのもあるんだが……。本当は村の皆には黙ってメイに会おうとしたことがあったんだ。だが何かよく分からん悪寒に襲われて村から全然離れない内に挫折。何回かそれを繰り返した時点で街に行くのを諦めた。あの頃はまだ小さかったし、……恐かったんだろうな、村の外が」

シグがそう言うと、ユークはそんな事があったんだねぇ、と興味深げに頷いていた。

「ところでさ」

特にすることがないのでうだうだしようとしていたら、間髪入れずにユークが次の話題を振ってきた。

「シグの妹さんっていい娘だねぇ」

「ああ、そうだな」

何を急に言い出すのやらとシグが眉を潜める。

その一方で、臆面もなく即答する自分もどうかと心の隅で思った。

「すごく可愛いし、元気がいいし、純粋そうだし――」

ユークがニコニコしながらメイをべた褒めしている。

……あまり良い予感はしない。

「――僕もアプローチかけてみようかなぁ」

「ユーク、ここに大きくて重たい骨があるんだが、これを人に叩きつけたらどうなるか見てみたいと思わないか？ちなみに俺は今とて

も赤い水が見たい気分なんだが」

側に置いていた大剣を持ち上げながら、虚ろな目で刃を見つめるシグ。

「すみませ～ん。トマトジュースもらえますか～？」

ユークが手を挙げながら陽気な声で店員に聞くと、すぐに扱ってないとの返事が返ってきた。

その間にもシグの色んな意味でヤバい視線がユークの顔に突き刺さり続けるが、それをユークは笑い飛ばした。

「ハッハッハッ、いやだなぁ冗談だよ。僕がシグの妹さんに手を出すわけないじゃないか。それに僕、死ぬ時は爆死か服毒自殺と決めてるから、それ以外の死に方はごめんだよ」

「分かった。今度からはちゃんと爆弾を携帯するように心がける」

睨むのを止めて欠伸をしながら言うシグに、ユークはまたまたぁ、笑い続ける。

しかしいつまで経ってもシグが反応を返してくれないので

「じょ、冗談だからね？」と冷や汗をかきながら言った。

第２３話　暇な時間

「ねぇねぇ、シグさぁ」

「何だ？」

「ねむくない？」

ユークがそう言ってきたのは、メイが酒場を出てから二時間が過ぎた頃であった。
外はもう薄暗い。

「遅いなぁ、メイちゃん」

ユークが特大の欠伸をしながら両手を投げ出した格好でテーブルにへばりつく。
その向かい側に座っているシグも頬杖をついており、二人とも少々ダレたムードである。
昨夜から夜通し走っていたのだから無理もない。

「もしかしたら家の人と揉めているのかもな。……ていうかメイ『ちゃん』ってなんだ、聞いてて何かイラッとする」

「え～？いいと思うんだけどなぁ。それとも呼び捨てにしたほうがいいかなぁ？」

「ちょっと言ってみろ」

「メイ」

「駄目だ」

「どっちなのさ？」

「両方駄目だ。何か凄いイラッとする」

テーブルにへばりついているユークが理不尽だ！と叫びながらジタバタと暴れだした。
その手の動き方から、平泳ぎのようにも見える。

「何してるんだ？」

「現実（リアル）という不条理かつ世知辛い世界を脱し、夢のネバーランドを探すために僕は果てしない大海原（ドリームワールド）へと泳ぎだすんだ！！」

「……そう、か。がんばれ」

シグがユークから目を逸らす。

「あ、うん。……ごめん」

先程までの勢いは何処へやら、急に居たたまれなくなったユークは何に対してなのかよく分からない謝罪をした。

酒場の観音開きの扉が開いたのはちょうどその時だった。
その音に反応してユークが顔を上げたが、ギルドに入ってきたのがメイなどではなく全く知らない男だったので、ユークは再びテーブルに没した。

その男はツンツンに逆立った金髪に目元を隠すように深くかぶったヘアバンド（？）とかなり目立つ格好で、背にはシグも見たことがないような大剣を下げていた。
鎧も着ているし、おそらくはハンターなのだろう。
その男――シグ達と同年代に見えるので青年とも言える――はギルドの中をしきりに見渡して何やら人を探している様子だったが、興味を失ったシグは早々にダレているユークへと視線を戻した。

「ユーク、ネバーランドは見つかったか？」

「……も……すこ、し…」

平泳ぎの手も止まり、ユークは今にも寝てしまいそうな雰囲気である。
しかし特に起こす理由もないし、これからまた村へ走って戻る事になるのだ。
このままにしといてやろうと思い、シグも静かに目を閉じた。

次にシグが目を開いたのはそれから暫く経ってからだった。
頬に何かの感触を感じて目を開けると、ズザッ！と鋭く飛び退く音が聞こえた気がした。
が、寝ぼけていたシグにはそれを深く考えるだけの思考能力が足りなかった。

「……ん」

どうやらあのまま寝入ってしまっていたらしい。
テーブルの中央にはシグが寝る前には無かった燭台が置かれており、三本の長い蝋燭に火が灯っていた。
その温かな光は他のテーブルの上にも灯っており、大分暗くなった酒場の中で何人かの人影を照らし出している。

「……」

シグは寝ぼけ眼で右を見て、左を見てその事を確認。
前を見て、まだユークがうつ伏せで寝ていることを確認。
後ろを見て……眉を潜めた。

「そんな所で何してるんだ？」

そこにはメイがいた。

「あ、あはは。お兄ちゃんたち気持ち良さそうに寝てるな～って」

そう言ったメイの顔は、蝋燭の灯かりの中でもはっきりと分かるくらい赤かった。

「……まぁ、とりあえず座れよ」

「う、うん」

メイはせかせかとシグの隣の椅子に座る。

「メイの武器は双剣か？」

メイの肩からのぞく二本の柄を見つけてそう聞くと、彼女は頷いた。

「もしかしてあの時のか？」

「うん。……勝手に使っちゃったけど、いけなかったかな？」

メイが小柄な体をさらに小さくして、まるで怒られるのが怖くてビクビクしている子供のようにシグの様子を窺う。

そんな妹に向かって、シグは首を横に振った。

「いや、その双剣はメイにあげたんだから好きに使っていいぞ」

「ぁ……、うん！」

途端にメイが顔を輝かせて嬉しそうに頷いた。

「……さてと、そろそろコイツを起こすか」

シグは椅子から立ち上がると、未だにうつ伏せで寝ているユークの背後へと回った。

そして拳を握り、大きく振りかぶる。

「お、お兄ちゃん。その起こし方はひどいと思――」

シグの意図を知ったメイが慌てて止めようとするが、シグはそれよりも早くユークの後頭部目掛けて拳を振り下ろした。

「――ぅわ」

そんな驚きの声を漏らしたのはメイだった。
加害者のシグはユークに構わずさっさと自分の椅子へと戻る。
そして被害者のユークは――何事もなかったかのように顔を上げた。

加害者、被害者がケロリとしているのに傍観者のメイが驚いたのには理由がある。
ユークは寝ている隙を突かれ、背後から攻撃されたにも関わらず首を捻るだけでシグの拳を避けたのだ。

「お前、起きてただろ？」

「あり？気付いてたんだ」

椅子に着いたシグがそう聞くと、ユークは首を傾げる。

「う～ん。狸寝入りには結構自信があったんだけどなぁ」

「持っていても全然嬉しくない特技だな」

シグに冷たく言われても、ユークは構わず悔しがる。

「でも、あの体勢から避けるなんてスゴイです！」

そんな二人の間に感動した面持ちのメイが割り込んできた。

「ふふふ。シグの拳はもう体が覚えてるからね。あのくらいのパンチを避けるなんてわけないのさ」

不敵に笑うユークだが、それはシグに殴られまくっていたことを自ら暴露しているのだということに気付いているのだろうか？

「それに起きていたなんて全く気付きませんでした。いつ頃から起きてたんですか？」

そこは別に感動するような所ではないだろうと思いながらも、シグは黙ってメイを見つめた。
随分と感情豊かに育ったんだな、と二人のやり取りを見て感慨にふけるシグであった。
そんなシグを他所に、腕組みしながら首を捻っていたユークが口を開いた。

「いつ頃から……？え～と確か、メイちゃんがシグの頬に」

――その瞬間

「キャアアアアアッ！！言っちゃダメです！言っちゃダメです！言っちゃダメですぅーー！！」

ユークの言葉を遮って、メイが急に叫び声を上げた。
酒場の中のざわめきが一瞬だけ途切れる。
しかし耳まで真っ赤にして手をバタバタと激しく動かすメイにはそんな事は関係ないらしく、涙目になりながらも言っちゃダメです！！と叫び続ける。
その動きは何とも小動物染みていて、見ている者の保護欲を掻き立てる。
しかしテーブルから身を乗り出して慌てふためくメイを、ユークは面白そう見ているだけでからかうのを止める様子はない。

「言っちゃダメです！本当にダメですよ！？」

「え～？どうしようかな～」

急に騒ぎだしたメイに驚きながらも、シグはユークを睨んだ。
何故メイが取り乱しているのかはシグには知りえない事だが、ユークが原因だということは分かる。
メイの敵はシグの敵。
シグがあらんかぎりの敵意と侮蔑と怨念とほんの少しの殺意を込めてユークを睨み続けると、彼もほどなくしてそれに気付いてようで、メイをからかっていた口がひきつって言葉に詰まった。
シグはその一瞬の隙を突いて口をはさむ。

「二人共、時間がないからもう行くぞ」

シグが立ち上がると、それに続いていつもよりも楽しそうな笑みを冷や汗と一緒に浮かべたユークも立ち上がる。
そのユークを小さく睨んでから、赤い顔で唸っているメイも椅子から腰を上げた。

「とりあえず街を出たら北西の街道を進み、それから山道を通って村まで行く。いいか、メイ」

「……うん。――あっ、ちょっと待って。まだクエスト受注してないんだった」

まだ頬がほんのりと赤いメイが小さな巾着を取り出しながら小走りでカウンターに向う。
受注はことのほか簡単に済んだようで、メイはすぐにまた小走りでシグに走りよってきた。

「おわったよ～」

「よし、なら出発するぞ」

先に歩くシグを先頭に、三人はギルドの扉をくぐって人通りの少なくなってきた夕方の街へと出た。

――メイはユークから若干離れた所を歩いていた。

第２４話　到着

「はっ、はっ、はっ、――っ」

荒いが規則正しいリズムで息を吸い込み、吐き、吸い込み、吐く。
その僅かな合間に口腔に溜まった不快な唾液を飲み込む。
たったそれだけの事でも呼吸はさらに乱れ、リズムを建て直すのに多大な負担を心臓にかけることになった。
それに伴い肺が軋むような痛みを訴え、足が縺れそうになる。

――そろそろ限界だ。

そう感じたシグは走り続けながら体を捻り、ポーチから瓶を取り出す。
荒々しく蓋を取って一気に煽ったが、何分走りながらの事だ。
幾らかは零れて口の回りを汚す。
シグはそれをランポスの鱗でできたアームで適当に拭った。

その効果はてきめんだった。
強走薬特有の苦味がまだ口の中に残っている間にも、徐々に悲鳴を上げていた体の各部から疲労が抜けていく。
完全に薬が効いた頃には張り裂けんばかりだった異常な心臓の鼓動も、軋むような肺の痛みもなくなっていた。
鉛のようだった足も実にスムーズに動いてくれる。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

シグが強走薬を飲み干すと、後から心配そうな声が聞こえてきた。

「大丈夫だ。メイも使うか？」

「ん、私はまだいいよ」

シグがポーチからもう一本取り出して聞いてみたが、メイは断った。ほぼ真っ暗な山の中でも彼女が首を横に振ったのが見えた。

「キツかったらすぐに言えよ。メイはまだ一回も使ってないだろ」

「平気、まだまだ余裕だよ」

「そうか？ならいいんだが……」

シグがそう言いながらポーチにしまうと、メイと並んで走っているユークが口を開いた。

「はっ、メイっ、はっ……ちゃんはっ、すごいっ、はっ、体力……だねっ」

強走薬の効果が切れてから時間が経っているのだろう、ユークの声は苦しそうな息づかいが混ざっていて聞き取りにくい。

「こう見えて結構鍛えてますから」

「結構、か……」

「はっはっはっ、シグっ、お兄ちゃん、なのに、はぁはぁ……っく、体力っ、で、はっ、負けてっる…はっはっはっ」

笑ったのか、それともただの荒い呼吸なのかよく分からない声でユ

ークが言った。
苦しいのならしゃべらなければいいものを、こんな時でも笑顔なのは感嘆に値するとシグは思った。
「メイ、村まであとちょっとだ。頑張れよ」
「うん！」
「シグっ、はぁはぁ……僕には、言って、はっはっ……くれないのっ？」
「お前は村までの道筋を知ってるだろ、勝手に頑張れ」
「はぁはぁ……ひ、ひどい」

そんなことを話しながら走ること約３０分、先頭を行くシグが急に立ち止まった。
「はぁはぁ、はぁはぁ……どうしたの、シグ？」
膝に手を当てて苦しそうに呼吸しているユークが声をかけると、シグは後ろの二人に振り返った。
「着いたぞ、メイ」
そう言ったシグが山の下の方を指差した。

「ここが俺達の村、ミヅヒ村だ」

お兄ちゃんが微かに笑みを浮かべながら指差す先、そこには山の麓に沿うように小さな明かりがポツポツと疎らに灯っていた。
聞いていた人口数から考えても点いている明かりが少ないのは、今が夜も遅い時間だからというだけじゃなくて、たぶん飛竜に見つかりにくくするためなんだと思う。
月の冷たい光だけでは山の上から村の全貌を見ることはできないけど、それでもお兄ちゃんやユークさんの住むミヅヒ村は確かにそこにあった。

――私はとても久しぶりにこの村を見て、ずいぶんと寂しい場所だと思ってしまった。
でも村を見る振りをしながらお兄ちゃんの横顔を盗み見ると、お兄ちゃんは村を見下ろしながらほっとしたような、それでいてどこか誇らしげな顔をしていた。
私が寂しいと思ってしまった村もここに住む人達の目には、――お兄ちゃんの目にはきっとそうは映ってなくて、こんな風に見えてしまうのも私が街の喧騒に慣れすぎてしまったからなんだと思う。
誇らしげに村を見下ろすお兄ちゃんと、ちょっと冷めた目で村を見下ろす私。
その目に宿す温度の違いは、そのまま今の私とお兄ちゃんとの距離を示しているようで……。
十年前までは限りなく零だったその距離が、今では途方もなく開いてしまった気がして……。

私は急に心細くなった。

私の知らないお兄ちゃんの十年。
その思い出の詰まった村。
私が存在しない、お兄ちゃんの十年分の思い出がそこにある。
お兄ちゃんがどんな家に住んでいて、どんなお友達がいて、どんなことを経験して、感じて、学んで生きてきたのか……。
毎月欠かさず送られてきた手紙に書かれていたから、私は知ってる。
平屋だての一軒家にお兄ちゃんは一人で住んでて、ユークさんにフィリィさんっていう人達とは特に仲が良くていつも三人で一緒にいて、どんなことをして遊んだのか、どんな出来事があったのかはお兄ちゃんの字がのたくったミミズみたいだった頃から知ってる。

でもそれは紙という媒体を通じての世界、想像しただけの世界。
私は本当のお兄ちゃんを知りたい。
そのために私はここにいる。
人を知るにはその人の一番近くにいなきゃいけないと思ったから。

……そうだった。
こんなマイナス思考に囚われてる場合じゃなかったんだ。
やっとお兄ちゃんの住む村まで来れておまけにしばらく滞在できるんだから、頑張らなくちゃ！
よし！頑張ろう！

「……よし」

「よし？」

じっと村を見ていたメイがぽつりと漏らした言葉に思わずシグが聞き返す。

「……えっ？　あっ！？　な、何でもないよ、何でも！」

「そうか？　まあここまで来たらもう走る必要もないだろう。メイ、行くぞ」

「う、うん！」

狂走薬の効果が続いているシグと、会った時から元気一杯のメイはどんどん先を歩いていく。

「ま、待ってぇ……」

へばっていたユークは置いて行かれた。

まずは村長に挨拶しに行く、とのシグの言葉によって二人は村長の家を訪れた。

「村長、夜分遅くにすみません。シグ＝ザウエルです」

ドンドンとノックにしては強すぎる力でシグが扉を叩くと、意外にも村長はすぐに出てきた。

「おお！帰ってきたか、シグ。待ちかねておったぞ」

「すみません、制限時間ギリギリでしたね」

「いやいや、元々わしが無茶な事を言っておったんじゃ。お前達のその無茶まで律儀に守った。十分すぎるほどだ」

それで、と再開の挨拶に一区切りを入れて、村長がシグの後ろの立っていたメイに目線を向けた。

「その娘が街から来たハンターか？」

「そうです」

シグがメイの背中を軽く押して小さく頷いてみせた。

メイも小さく頷き返す。

「め、メイ＝ベルロッドです。よ、よろしくお願いします！」

メイが一歩前に出てぺこりと頭を下げた。

すると小さなポニーテールも一緒に跳ねる。

「これはまた、随分と可愛らしいハンターさんを連れて来たな」

村長がシグの顔をじっと見る、見る、見る、見る！

「……俺の趣味じゃないですよ」

「ん、そうなのか？」

「そうです」

「……いや、そういえばそうか。お前はレーベルの所の娘を狙っていたんだったな」

村長がさらっととんでもない発言をかました。
ちなみに『レーベルの所の娘』とはフィリィのことである。

「村長、根拠のない事を口にしないで下さい」

「ほう、違うと言いきれるのか？」

「言いきります」

「そうかそうか」

シグがきっぱりした口調で言うと、村長は腕を組んで芝居がかった頷きを何度も繰り返した。
そんな中、メイが遠慮がちな声で村長に声をかけた。

「あ、あの……」

「おぉ、すまん。客人をすっかり忘れておった。まぁ入ってくれ」

村長はシグとメイを家に招き入れると、扉を閉めてしっかりと鍵までかけた。

こんな寒村では、夜とはいえわざわざ鍵をかけるのは珍しい。

「村長、なぜ鍵を？」

「ん？今ちょうど集会を開いておった所でな。さしたる意味はないが形式上な」

「集会？何のですか？」

「もちろん、わしらが今直面しとる危機についてだ。二人にも今から参加してもらう。疲れているとは思うがもう少し辛抱してくれ。君と村の衆との顔合わせもしておきたい」

途中からメイに向けられた言葉に、彼女は固い動作でだがしっかりと頷いた。

村長はそれを見て優しく微笑みながら、二人を集会が開かれている部屋へと招き入れた。

第２５話　ＨＲ

集会が開かれている部屋に入ると、そこは前に来たときと同じように薄暗かった。
この村には照明器具など蝋燭か松明しかないため仕方のないことなのだが、人が集まっている時にこうも部屋の中が暗いと雰囲気までもが重く感じられてしまう。
それに大して広くもない部屋に大の大人が詰め込まれているため、無駄な圧迫感まである。
初めてこの村にきたメイにこの空気は辛くないだろうか、とシグは心配になった。

「皆、街から来たハンターを紹介する」

定位置についた村長がそう切り出すと、メイを隣へと呼び寄せた。

「イセナのハンター、メイ＝ベルロッドさんだ」

「べ、ベルロッドです。今日から一ヶ月間この村でお世話になります。よろしくお願いします！」

メイが丁寧に頭を下げる。
しかし集まったミヅヒ村の大人達の反応が薄い。
メイに対して礼を返す人もいるにはいたが、殆どの人がその顔に不信感を浮かべていた。
とても村の危機を救うために来た人を歓迎している雰囲気とは言い難い。

「それでは、早速だがベルロッドさんに依頼内容を伝えたいと思う

が――」

そんな場の空気に顔色一つ変えない村長が話を進めようとしたが、それを遮るように一つの手が挙がった。

「村長、街から来たハンターは彼女一人だけなのでしょうか？」

手を挙げたのは２０代前半のハンターだった。

シグやユークよりもハンター歴の長い彼は、火竜相手の戦いで戦力になる可能性がある村唯一の人物である。

「彼女一人だけだが、どうかしたのか？」

村長が動じずに聞き返すとそのハンターは少し迷うような仕草をしたが、やがてきっぱりとした口調で言った。

「お言葉ですが、いくらギルドの斡旋とはいえ彼女に火竜の討伐ができるとは思えません」

「ほう、なぜそう思う？」

「なぜって……」

ハンターがちらっとメイを見る。

その目には小柄なメイを明らかに見下した色がある。

シグが軽く見回すと、他にも同じ目をした者が何人か見受けられ、シグは思わず舌打ちしたい衝動に駆られた。

勿論そんな事はできないが。

「ふむ、つまり彼女の実力に疑問があると、そういう事だな？」

ハンターが小さく頷く。
「それでは彼女を知っている者に聞いてみるか。シグ」
「はい」
「村に来るまで彼女はどんな様子だったか話してくれ」
扉に一番近い場所に立っていたシグに声がかかり、皆の視線が集中する。
シグは姿勢を正してできるだけ感情を抑えた声で答えた。
「私達は昨夕にイセナを出発し、ここまで一切休息せずに走って来ました。しかし、ベルロッドさんは支給された強走薬を一滴も使用せず、また息一つ乱さずに走破されました。戦闘技術についてはまだ分かりませんが、基礎体力では私やユークでは足元にも及ばないことは明らかです」
シグの報告に場が騒然となった。
メイを見下していたハンターや大人達も、信じられないといった表情で顔で見合わせている。
常識でモノを考えたらその反応が自然である。
本来三日はかかるはずの道をたった一日で行くという荒業をドーピングなしの己の体力のみで成し遂げたのだ。
それだけでメイの実力が伺い知れるというもの。
まるで他人事のように淡々と妹の報告したシグも、皆のこの動揺に少し気分が良くなった。
「ふむ、ではベルロッドさん。あなたのＨＲ（ハンターランク）を教えて頂けますか？」

「あ、はい。ＨＲは６８です」

メイがさらっと言った言葉に、場が更なるざわめきに包まれた。

ＨＲとはギルドが管理するハンター達の格付けのようなものである。
クエスト毎に決められた功績値が一定数貯まるとランクアップする仕組みであり、当然飛竜の討伐などの危険度が高いクエストの方が貯まる功績値も高い。
故にＨＲが高いという事は、そのハンターの実力の高さを示しているのである。
そしてＨＲによって受けられるクエストの難易度も変わってくる。
例えばＨＲ１～４０までは採取や納品クエスト等の新人ハンターが受ける簡単なものが主流である。
しかし、新人用とはいえ当然危険はつきものであるし、危険度の低い安全なクエストばかりを行なっていては十年あってもＨＲ４０を超えることはできない。
ＨＲ４１～８０は上位ハンターと呼ばれ、飛竜の討伐や輸送商隊などの護衛クエストが主流である。
このランクに至る頃には皆、熟練のハンターになっている。
逆に言えば、ここまできて動きが洗練されていない者は生き残れない、そんなランクである。
ＨＲ８１～１００に至るとＧ級ハンターと呼ばれるようになる。
突然変異などで異常に強い個体が現れた時に討伐、もしくは生態調査の依頼が来るのはここである。
このランクに属することを許されるのはトップクラスのハンターのみであり、ＨＲ８１を超える者は世界に一握りしかいない。
ハンターならば誰もが目指し、憧れるクラスである。

そしてメイのＨＲは６８。

上位ハンターとしても中堅に位置するランクである。
『類い稀な才能を持つ者でも三十代までにやっと到達出来るかどうか』がＨＲ７０のレベルであり、若干十六歳でその２ランク下まで登り詰めた彼女の実力はもはや疑いようがない。
ちなみにシグとユークのＨＲを表すとしたら、二人合わせて５あるかどうかと言ったところだ。
最初に村長に質問した二十代前半のハンターもせいぜいＨＲ７。
文字通り、桁違いの差だ。

「さぁ、一度静粛にしてもらおうか」

村長が全員に呼びかけると、すぐに部屋の中が静かになった。

「これで分かったように彼女の実力は十分。むしろこのランクのハンターに２５０００ｚの報酬金は少ないくらいだろう」

反論する者は、いない。

「さて、皆も納得した所で依頼の話に入ろう。ベルロッドさん、貴女にはいつ火竜が襲って来てもよいように準備をしておいてもらいたい。そのために必要な道具や薬の類いは無償で提供します。しかしいざ戦闘になっても無理をして倒す必要はありません、追い払うだけでいいです。貴女が戦えなくなってはこの村を守れる人がいなくなりますから」

それと、と一旦言葉を切って村長が続けた。

「貴女には毎晩村の見回りをしてもらいたい。村を一回りするだけ

でいいので村の自警団と連携して襲撃の警戒をお願いしたい」

「え～と……つまり日頃からモンスターの襲撃に備え、自警団の方々と夜の見回りをしたらいいんですね？」

メイの確認に村長がそうですなと答える。

「それと貴女の宿泊場所の事ですが、丁度よい空き家もないのであのシグの家に泊まっていただきたいと考えておりますが、よろしいかな？」

「なっ――！？」

「はい、構いません」

シグが全く知らなかったその提案に口を挟む隙もなく、メイが二つ返事で了承してしまった。

確かに、知らない人の家に一ヶ月も寝泊まりするよりは俺の家に泊まった方がメイも気遣いしなくて良いのだろうが……、そういう話は事前にちゃんと知らせておいてほしい。

急に住人が増えたらいろいろと足りない物が出てくる。

食器とか寝具とか……。

「それでは以上で解散とする」

シグが物思いにふけっている間に村長が集会の終わりを宣言し、場はお開きとなった。

「お兄ちゃん、もう行こうよ」

シグが二人暮らしするのに必要な物を頭の中で挙げていると、メイが腕を引っ張ってきた。

「ん、そうだな。帰るか」

メイは自分があまり歓迎されていなかったことに居心地の悪さを感じているのだろう。

とりあえず明日はいろいろと買いに行こうという事でシグは考えるのを止めておいた。

それから二人でもう一度村長に挨拶をして、シグとメイは夜もふける家の外へと出た。

第２６話　憩いの刻

少し寒々しい空気を吸いながら大きく伸びをする。
目の下に薄いクマを作ったシグはぬぼ～っとした冴えない顔で窓の方を見た。

「……もう朝か」

そこから入り込んでくる温かな陽光に、シグは手をかざして眩しそうに目を細める。
そのまましばらくの間呆けていたシグだったが、やがてダルそうに部屋の一角へと目を向ける。
そこにあるのは一つのベッド。
シグの所有物であるそれの上には、主が使用していないにも関わらず小さな盛り上がりが出来ていた。
それを確認したシグは凝り固まった首をゴキゴキと鳴らしながら立ち上がる。
ベッドの上のそれに声を掛けようかと迷ったが、もう少し後にしようと考えて朝食の準備をすることにした。

十分後、簡素な木のテーブルの上には二つのホットドックが置かれていた。
シグは使ったフライパンを洗いながらベッドの方へと声を掛ける。

「起きろ、朝飯ができたぞ」

「うぅ……」

ベッドで丸まって寝ていたメイが小さな呻き声をあげた。
しかし、もぞもぞと動くだけで起きてくる様子はない。
シグはため息をつきながらもう一度声をかけた。

朝食は頑固パンに焼いた七味ソーセージを挟んだだけのものだったが、それは中々に美味かった。
それは向かい側でパクついているメイも同じなのか、眠たそうだが満足げな表情で口一杯にほうばっている。

「おいひぃ……」

そう言いながら食べているメイの目は半分以上閉じかかっている。
どうやら彼女は朝に弱いらしい。
ソーセージのパリッとした皮と溢れ出す肉汁を楽しみながら、すっかり目が覚めてしまったシグは妹を観察してみた。

兄としての贔屓目なしで思う、例え人形でもここまで綺麗で愛くるしい顔は作れないだろう。
まだ幾分かの幼さを残してはいるものの、見た者全てが息を呑むような神がかった美貌。
本当に自分と血の繋がっているのかと疑いたくなるほどに可愛い、大事な妹。

――なのだが、こくりこくりと櫂をこいでいるのに食べる事は止めないとは、我が妹はけっこう食い意地がはっているのかもしれない。
まぁ、ガサツで粗暴で大雑把な人間が多いハンター達の間で育ってきたのではそうなっても致し方ないのだが……、ため息の一つや二

つつきたくなるというものだ。
よりにもよってなんでハンターなんて職業を選んでしまったんだか、コイツは。
生活に窮するほど金に困っているわけでもないだろうに、女の子なんだからもっとお淑やかというか慎みというか……、少なくとも命の危険がない安全な道を選んで欲しかった。
しかもＨＲ６８ということはかなり長いことハンターをしていたという事だ。
俺がのうのうと平和に過ごしていた時に、メイは俺の知らない所で命懸けで戦っていたという事だ。

「ハンター、か……」

シグは感慨深げにそう呟き、椅子に座ったまま完全に眠ってしまった妹の口元に付いているソースを拭ってやった。

朝食を終えたシグはメイに村の案内をすることにした。
早朝から剣の鍛錬をしていたユークをスルーしつつ、昨日集会が開かれていた村長の家の前を通り過ぎ、フィリィの店で食材を買い足す。
そして村をぐるっと一周回る途中で、あの場所にやってきた。

「あ、桜だ！」

いち早くそれを見つけたメイが駆け出した。
シグも食材の入った紙袋を片手に後を追う。

「わぁ～、大きいねぇ」

メイが首を後ろに反らして桜の木を見上げた。
ここは小学校の裏手、シグが暇な時によく来ていた桜並木。
メイが見上げている木はもう花が散ってしまっていたが、代わりに青々と元気な葉が繁っている。
時折風が吹いては『ザァァァ』と静かな木々のざわめきが辺りを覆っていた。

「すごい……」

「この村のちょっとした名物だからな」

シグがメイの横に並び、同じように立派な桜を見上げた。
それからしばらくの間、兄妹そろってその光景に見入っていた。

「ねぇお兄ちゃん。覚えてる？」

どれほど経った時だったろうか、メイが静かにそう口を開いた。
シグが横目で見ると、妹は視線を桜の木に向けたまま柔らかく微笑んでいた。

「何をだ？」

「小さい頃のこと」

小さい頃、と曖昧に言われても、いつのことを指しているのかシグには伝わらない。
それで首を捻っていると、メイが「もぅ」と言って肩を落とした。

「ほら、私達が小さい頃よく桜の木の下で遊んだでしょ？」

「あぁ、その頃か」

納得したシグは小さく頷いた。
平和で、穏やかで、そして何より家族全員が揃っていて――最高に楽しく、幸せだった子供の頃を思い出しながら。

「……懐かしいな」

「うん。一緒に木登りとかしてさ――ふふっ」

メイが口に手を当てて小さく笑った。
シグが訝しげな目で見ると、メイがさらに可笑しそうに笑う。

「そういえばお兄ちゃん、一度木から落ちそうになったことがあったよね？」

メイが顔を覗き込むとシグの眉間に皺がよった。

「木の先の方に行きすぎちゃって、重さに耐えられなかった枝が折れて、私が手を掴まなかったら本当に落ちてたところだったよ」

「……まだ、覚えていたか」

「もちろん！」

シグの顔が苦虫を噛んだ時のように歪む。
それを見たメイはクスクスと笑った。

「あ、そうだ。昔みたいに二人で登ってみようよ」

メイが微笑みながらシグの手を握る。
引っ張られながらシグは『やめとけ』と言おうとしたが、メイのその楽しそうな表情を見て口をつぐんだ。

「お兄ちゃん、早く早く！」

一人ですいすい登っていったメイが上からシグを急き立てる。
しかし小柄なメイだから大丈夫なものの、シグが同じ所まで登れば間違いなく木が折れるだろう。

「桜の木は折れやすいから気をつけろよ」

仕方なしに一緒に登ったシグだったが、途中で心配になってきた。
桜は低い位置から幹が枝分かれしているため折れやすい。
それが木の先端ならば尚更だ。
シグは内心ハラハラしながら妹を見守っていた。

「えへへ、もし落ちたら受け止めてね」

そんな兄の気持ちなど露知らず、メイは呑気に笑っている。
シグはため息をつきたい衝動を必死に抑えた。

「お兄ちゃん早く～！」

「俺はここでいい」

「え～？上まで来てよぅ～」

「俺が登ったら折れるぞ、絶対」

「大丈夫だよ、ほら」

メイが無邪気に笑いながら枝を揺らしだした。
シグに木の強度を示したかったのだろうが、見ているこっちは心臓に悪い。

「分かった分かった。登るから揺らすのを止めろ」

「うん！」

何か急に言動が幼くなったな、と思いながらシグは慎重に登る。
途中待ちきれなくなったメイが木を揺らしたので、木が折れないかと気が気ではなかった。

「ね、大丈夫だったでしょ？」

やっとの思いで隣まで登って来たシグに向かって、メイがそう言って微笑む。

「何とか、な……」

自分の乗っている枝が限界までしなっているのを見て、シグの顔がひきつった。
そんな兄をよそに、メイは目を閉じて気持ちよさそうに歌などを口ずさみだした。

「……懐かしいな」

それはメイが小さい頃からのよく歌っていた、彼女お気に入りの歌だった。
素直に耳に入ってくるその澄んだ歌声を聞きながら、シグはメイと一緒にいるこの時間を穏やかな気持ちで過ごした。

その日の夜、村の外れで大きな音が響き渡った。

第27話　作動

「ごちそうさまでした」

手を合わせたメイが食後の決まり文句を口にし、空になった皿をシグが流し台に運ぶ。

シグが二人分の食器を洗う傍ら、メイがいそいそと鎧に着替え始めた。

これから初めての夜間巡回に行くのだ。

「お兄ちゃんって料理できたんだね」

メイが赤いグリーヴを穿きながら以外そうな口振りでそう言った。

「一人暮らしだからな、それくらいできないと」

カチャカチャと食器を洗いながらシグが返す。

チラリと横目で見ると、メイは太ももが大きく露出する短いフォールドを着ている所だった。

「メイ、それは何だ？」

「ダイミョウザザミから作った防具だよ？」

メイが手を止めて首を傾げた。

どうかしたの？とその表情が語っている。

シグはそうか、と呟いて何となく目を逸らした。

「？」

メイは頭の上にクエスチョンマークを浮かべながら、次々鎧を身につけてゆく。
最後に二対の蒼い剣を背負い、全ての準備が終わったようだ。

「それじゃあ行ってくるね」

微笑みながら小さく手を振るメイ、その顔を守るものは何もない。

「ヘルムは被らないのか？」

洗い物を終えたシグは濡れた手を拭きながら尋ねる。
するとメイは少し考えるような仕草をした。

「ん～、ヘルムがあると視界が悪くなっちゃうから」

「危なくないか？」

「ふふ、飛竜相手ならヘルムなんて被っててもも簡単に首から上がなくなっちゃうよ？」

メイは軽い口調でおどけて言うと、いってきま～す！と元気よく夜の村へと出ていった。

「首から上がなくなる、か……」

冗談めかした言い方だったが、その言葉はいやに現実感があった。
もしかしたらメイはそんな光景を見たことがあるのかもしれない。
狩るか狩られるかの世界に生きるハンターを長くしていれば、人が死ぬ所に立ち会うことも多かったことだろう。

そしてハンターの死に様は決して綺麗なものではなかったはずだ。
生きたまま内臓を引きずり出されることだってあるし、全身に毒の病斑を浮かべながら窒息死することもある。
丸のみにされて生きたまま胃液で溶かされるなんて一番最悪だろうが――モンスターとはそれが簡単にできる存在なのだ。
そしてそんな圧倒的強者のモンスター達に立ち向かうのがハンターだ。
生きるために相手の命を刈り取り、時として逆に殺される。
たとえ生き残ったとしても。
たとえ食い殺されたとしても。
あとに残るは悲惨な骸のみ。
ハンターが辿るのは死が蔓延した地獄への道。

そしてまだ十六歳の少女が――メイが、その道を歩んでいる。
そう考えると、一人家に残るシグは途端に陰鬱な気持ちになった。

依頼内容の一つ『夜間の見回り』
文字通り何か異変が起きてないか見て回るだけの単純な仕事。
しかし、簡単だからといって早く終わるわけではない。
ミヅヒ村は家が点在して建っているため村として区繰られる面積はかなり広い。
普通に歩いて見回っていては二時間あっても終わらないだろう。
しかし村長が毎晩そんなにメイを歩かせるわけは勿論なく、一晩で見回るのはせいぜい一時間程度だ。

そう、たかだか一時間。
されど一時間だ。

よりにもよってこんな嫌な気分で一人にされるとは。
今日一日メイと一緒に過ごして、なまじ賑やかだっただけにこの落差はつらい。
しかも今日は見回り初日だから少し長めに行うと言ってたはずだ。
シグは知らず知らずの内にいつもより深いため息をつきながら、耳が痛くなるほどに静まり返った家の中をうろついて時間を潰そうとした。

しかしこういう時に限って時間というものは進むのが遅くなるもので、さすがのシグも耐えきれなくなってきた。
だが気を紛らわそうにも本の一冊すらない。
仕方がないのでシグはユークの所にでも遊び行こうと考えた。
現在の時刻は午後十時くらい。
家を訪ねるには遅すぎて迷惑がられる時間だが、ユークの家族とは親しいため大丈夫だろう。
そう憶測を立てたシグはさっそく隣の家へと向かう。
メイが帰ってくるまで後一時間はあるはずだった。

「シグがこんな時間に来るなんて珍しいね」
玄関先に出てきたユークは寝間着姿だった。
ちょうど寝ようとしていた所に来てしまったらしい。
いかにも眠そうに目を擦ってる。
「……どうやら邪魔らしいな」

「うん、邪魔だねぇ」

普段ならここでシグが何か言い返す所だが、ユークは本当に眠たそうに欠伸などしている。
さすがに今から話相手になれというのは酷だ。
ここは帰る事にした。

「起こして悪かったな。また明日にでも――」

その時、風に乗って小さな音が聞こえた。
キィィ――……ンという金属同士がぶつかったような、しかし今のはもっと高い音だった。

――音爆弾

シグの脳裏にその三文字が浮かんだ。
そしてそれがもたらす意味も。

「ユーク！！」

「分かってる！」

言うが早いか、シグは自宅へと走り出した。

第２８話　女王の襲撃

防具を身に付けたシグはガチャガチャと音を立てながら夜の村を走る。
横にはシグとは違う防具を着たユークが腰の太刀を押さえながら走っている。
その目にはもはや眠気などなく、真剣な眼差しで行く先を見据えていた。

「どの辺か分かるか！？」

「音はだいぶ反響してた！もっと遠くだと思うよ！」

二人は半ば怒声に近い声で確認し合う。
先程聞こえた音爆弾の炸裂音、あれは村の全周に張り巡らしてある警戒網に何かが掛かった知らせだ。
罠は地表近くに設置されてるため小型モンスターを探知した可能性もあるが、最も恐れているのは火竜が村の中に侵入することだ。
特別に大音量に作られた音爆弾は村人に警戒を促すと同時に、その音でモンスターを驚かせ退散させる効果も担っている。
しかし飛竜ほどの大型モンスターになると、逃げ帰るどころかその音に刺激されてより凶暴になることが危惧されている。
只でさえ圧倒的に強い敵をさらに強くしてしまう結果になりかねないのだ。
そうなればこの村に住む者も――

「そこの二人！」

物思いに耽りながら走っていたシグは闇の中からの声で急ブレーキをかける。
声のした方を見ると、太刀を背負った見知らぬハンターがいた。
完全武装しているので彼も二人と同じ所に向かっているのだろう。

「なんですか？急いでるんですが」

「お前らは来るな」

「は？」

シグは何を言われているのか一瞬分からなかった。

「ひよっこにうろかれると目障りだって言ってんだよ」

その偉そうな口ぶりでシグは思い出した。
昨夜の集会でメイを見下していた奴だ。

「もし村に入って来たのが火竜なら、一人でも多くの戦力が必要なんじゃないですか？」

「お前らが戦力になると思っているのか？はっ、おめでたいな」

ユークの意見を奴は鼻で笑って一蹴した。

「火竜は俺が片付ける、お前らはお呼びじゃねぇんだよ」

奴は煩わしそうにシッシッと手を振る。

「しかし村長も朦朧したもんだ。あのメイとかいう街から来たガキに何ができるってんだ」

終いには村長やメイまでも侮辱する始末。
これには流石のシグも頭にきた。

「お前、今の言葉は訂正しろ」

「あぁ？」

ユークが横で「喧嘩してる場合じゃないよ！」と諌めようとしているが、シグには届かない。

「今なんか言ったか？」

「お前の耳は腐ってんのか？訂正しろと言ったんだ」

「はっ！腐って蛆わいてんのはテメェの頭だろ。俺の言葉のどこに訂正するところがある」

そのふてぶてしい態度にシグの眉間に皺が寄った。
それを知ってか知らずか、そのハンターは下卑た笑みを浮かべながらさらにシグを挑発する。

「そういえばあの街から来たガキ、お前の所に泊まってるんだって？ガキ同士仲良くヤってるか？」

シグのアームがギシッと軋んだ。

しかしシグが行動を起こすよりも速く、それは来た。
とても生物から発せられたとは思えない『声』
鼓膜どころか体全体にビリビリと響く『咆哮』
その音量、その迫力はたとえ千の人間が一斉に鬨の声を上げてたとしても足元にも及ばない。
人間がそれに畏れを抱くのは、その声の主が絶対的な強者だと本能の部分で感じ取ってしまっているから。

『雌火竜リオレイア』

深緑の女王がそこにいた。

「散れッ！！」

シグの叫び声と同時にリオレイアが頭をもたげ、その巨大な口から数千度にもなる火の球が吐き出される。
闇夜に出現した太陽のように轟々と燃え盛るそれは目にも止まらぬ速さで飛び、一人だけ呆然と立ちすくんでいた若いハンターの眼前で爆発した。
激しい爆発音と熱波がシグの体を襲う。
それを堪えて顔を上げた時、シグは女王の青い瞳と目が合った。

その途端に冷水をぶっかけられたような悪寒が走る。
メイと、妹と同じ色の瞳。
だが目の前にあるそれはメイのキラキラと輝く瞳とはまるで違う。
憎しみで濁り、見た者が吸い込まれそうなほどに何処までも深い闇を抱いている。
それは決して人間には真似できない、してはいけない類いの瞳だった。

シグは心の奥底から沸き上がってくる恐怖を払うため、背中の愛剣を抜いた。
ずしりと両手にかかるその重さが勇気と冷静さを与えてくれる。
シグはついさっきまでいた場所を横目で見たが、土埃と黒煙に阻まれて若いハンターの生死を確認することは出来なかった。
しかしシグにもあまり人の心配をする余裕はない。
すぐそこに飛竜がいるのだ。
隙を見せれば次の瞬間には死んでしまうかもしれない。

そうして、奇襲されたショックから徐々に立ち直ってくると、シグはそのリオレイアが普通とは違うことに気付いた。
強靭な脚力を生み出す太い足。
巨大で力強く羽ばたく翼。
猛毒を含んだ鋭い棘をもつ尻尾。
そのどれもが、桜の花のようなピンク色の鱗に覆われていた。
『深緑』ではなく『桜花』の女王。
それはギルドでもほとんど確認されていない、リオレイアの亜種だった。

しかしそれでも二人は走り出す。
先行するのはユーク。

彼は太刀を素早く抜刀、腰の捻りを利用してさらに剣速が増した鉄刀【禊】でリオレイアの鼻っ面へと真一文字に斬りかかる。
しかしそれはリオレイアの堅い桜鱗を切り裂くことなく刃が滑り、ユークの体が揺らいだ。
リオレイアの眼がギロリとユークに向けられる。

「ふっ！」

注意が逸れた一瞬の隙にシグがリオレイアの首へと大剣【ボーンブレイド】を叩き込んだ。
砕ける音が響いて何枚かの鱗にヒビが走る。
しかしそれだけだ。

「危ない！！」

ユークの声に反応して伏せると、そのすぐ上を丸太のような尾が唸りをあげて通り過ぎた。
シグはすぐさま距離をとり、ユークはしゃがんだまま次の攻撃に移る。
曲げた膝、腰、肩、肘を素早くかつ淀みなく動かし、体の中で溜めたバネを一気に解放して足の付け根に鋭い刺突を放つ。

「――くっ！」

火花が飛ぶほど激しく衝突した太刀は、しかし突き刺さるどころか逆に刃の切っ先がかけた。
リオレイアはそんなユークを圧砕しようと巨大な足を持ちあげ、踏み下ろす。
土煙の舞う中、ユークは必死に身を投げ出してそれから逃れた。

「ユーク！」

シグが近寄ろうとするが、リオレイアの口から再びあの火球が放たれる。

「っ！」

人などゆうに三人は覆い込んでしまいそうなほどの火球を寸での所でかわす。

自分の肉が軽く焼ける匂いが鼻をついて、シグは燃えるような熱さの中で冷や汗を流した。

しかし足を止める事は許されない。

「シグ！三十秒でいいからヤツの気を引いてて！！」

ユークがそう叫びながらリオレイアから離れる。

何をするつもりかは分からないが、太刀を鞘に収めているから一度戦闘から離脱するのだろう。

ならば本当に一人でリオレイアを引き付けておかないといけないのか。

それは言うより遥かに難しい。

だが――

「分かった！任せろ！！」

シグはそう叫び返した。

第２９話　火球と尻尾

「くっ――そッ！！」

力の限り飛んだシグは地面に叩きつけられる前に受け身をとって衝撃を逃がした。
立ち上がりながら急いで振り返ると、リオレイアが一軒の民家に突っ込む所だった。
シグを狙った突進が勢い余ってのことだったのだが、リオレイアの巨体に襲われた平屋だての家は轟音と共に一瞬にして瓦礫の山へと変わってしまった。
それを見たシグの額に今日何度目かも分からない冷や汗が流れる。
簡単に家を破壊してしまうほどの衝撃をまともに受ければ、シグの体など全身複雑骨折程度では済まないだろう。
壊れてしまった民家の家主には悪いが、避けそこなっていたらと思うと背筋がゾッとする。
リオレイアは己の体にのし掛かってくる瓦礫などものともせずに立ち上がると、その青き瞳にシグを映した。
……嫌な眼だ。
あの眼光に射ぬかれるとどうしても心の中で恐怖が頭をもたげる。
自分が喰われる側にあるのだとまざまざと思い知らされる気分だ。
しかしそれに抗わないと飛竜に立ち向かう事などできない。
飛竜に立ち向かえなければそれはハンターではない。

シグはリオレイアに向かって走り出す。

動いていないと、体の自由まで恐怖に絡め取られそうで怖かった。

シグが近づくと、それに呼応するかのようにリオレイアも突進して

きた。
たった一人の人間が飛竜を力で止められる訳がない。
勿論それはシグも例外ではなく、ここでの選択肢は『避ける』しかない。
初見だった先程は巨体が迫り来る迫力に対応が遅れてしまったが、今度は余裕をもって避け、反撃に移った。
リオレイアに限らず飛竜の多くは二足歩行だ。
しかし超重量の体を持っているにも関わらず『突進』という重心を傾けすぎてしまう攻撃を行えば、当然二本の足だけではバランスを維持できずに倒れてしまうことが多い。
よって突進の攻撃の後には大きな隙が出来るのだ。
それを知識として知っていたシグが絶好のチャンスを見逃すはずもなく、倒れて動きが止まったリオレイアに斬りかかった。
尻尾に向かって渾身の力で斬り上げられた大剣【ボーンブレイド】
それは堅い鱗の前にあっけなく弾かれ――るかと思われたが、意外にもその鈍器に近い刃はリオレイアの肉を裂き、鮮血を散らした。
女王が痛みに呻き声を上げる。
どうやら尻尾の下側までは桜鱗に覆われていないらしい。
こちらの攻撃が通じる事を知ったシグは深追いせずに一度離れた。

なるほど、確かによく見てみれば腹部や尾の裏側などは桜色の鱗に覆われていない。
堅固な鱗がなければこのなまくらな剣でも斬れるということか。
しかし……、腹部に攻撃を仕掛けるのは危険過ぎる。
そこに至るまでには強大な力を誇るリオレイアの躰の真下を抜け、門番のように立ち塞がる両足を避けつつ大剣を振るわなければならない。
その斧のような鉤爪が生えた足は長さ、太さ共にシグの体よりも一回りは大きい。
そんなものに蹴られでもしたら一撃で戦闘不能になるに違いない。

その危険性を考えれば、攻撃は尻尾に集中した方がよさそうだ。
肉がむき出しになっている裏側を狙えば、この大剣でも傷を負わす事はできる。
そして尻尾に対する一番の攻撃チャンスは突進の後、女王が地に伏せ動きが止まった瞬間だ。
忌々しげに唸っていた女王は唐突に頭部をもたげた。

――火球だ！

瞬時に理解したシグはその軌道から逸れるため真横に走り出す。
間髪入れずに吐き出された灼熱は周囲の空気を熱しながら、ゴゥ！！という音と共にシグを掠めて飛び去っていった。
だが安心するにはまだ早い。
シグが目を向けた時には、リオレイアはすでに次の火球を放っている所だった。
しかし狙いが少しずれている。
シグがグリーヴで地面を抉りながら急停止をかけると、その目と鼻の先を火球が通り過ぎた。
三度目の正直といきたいのか、リオレイアはまた頭をもたげて火球を放とうとしていた。

たしかにこの火の球は計り知れないの破壊力を秘めている。
２mを優に超える大きさの猛火に包まれれば人間など肉片一つ、骨すら残らないだろう。
しかし当たらなければその威力は永遠に秘められたままだ。
いつも紙一重ではあるものの、一定の距離さえ保っていれば回避できる自信がシグにはあった。
火球には『溜め』とも言える攻撃前の予備動作がある。
それさえ見落とさなければ直撃は避けられるはずだ。

――そんな自信は、あっけなく打ち砕かれた。

吐き出された火球は、しかしシグには向かわずにそれよりも手前の地面に当たって爆発した。

「――なっ！？」

球形から解放されたエネルギーが熱風となってシグを襲う。
露出した肌が焼けるほどの高熱に目が開けていられない。
その風をやり過ごしたシグはすぐにリオレイアの姿を探したが、黒煙が視界いっぱいに広がっていてあの巨体が見つからない。
このままは危険なので一旦退こうとして――目の前の煙が微かに揺らいだことに気付いた。
その直後、黒煙の壁を突き破って現れた女王の尻尾が唸りをあげてシグに襲いかかる。
下から掬い上げるような軌道で迫る凶悪な尾は、まるでつむじ風に巻き上げられる木の葉のようにシグの体を空中へと弾き飛ばした。

それより少し前、一度戦いから離れていたユークは親友の姿を求めて夜の村を走っていた。
彼の親友はユークから女王を遠ざけるように立ち回ってくれていたため、今はここから少し離れた場所で戦っている。
ではシグ一人にリオレイアを任せていたユークが、今まで何をしていたかというと単に『集中』していただけだった。
数回の攻撃でこの太刀ではどれだけ斬りつけても刃が通らないこと

を悟ったユークは、別の攻撃手段を選ぶ必要があった。
そのための準備として集中していたのだが、初めて実戦で使うから緊張していたのか、それとも飛竜に対する恐れが心のどこかにあったのか……それは分からないが、とにかく予想よりも遥かに多くの時間を費やしてしまった。
ユークは苛立たしげに唇を噛む。
今ほど自分の修行不足を痛感したことはない。
どれだけ練習して自分のモノにしたつもりでも、戦いの場で実際に使えなくては意味がない。
今回のように何分もかかっているようでは論外だった。
使おうと思った瞬間に使えないと、刹那の攻防が生死を分ける戦いの中では役に立たない。
しかしそんな不完全なものでも、今のユークには必要だった。

ユークがそこに着いた時、シグはまだ戦っていた。
ちょうどリオレイアが吐き出した火球を避け、直後に仕掛けられた突進をかろうじて避けている所だった。
無事だった事にひとまずほっとしたが、すぐにユークの眉が訝しげに寄せられる。
シグの挙動がおかしい。
足元がふらついているし、大げさなほど大きく肩で息をしている。
今なんて軽く頭を振る動作をして、まるで眠気を払おうとしているみたいだ。
シグに何があったのかは気になる。
しかし今はせっかく高めた集中が途切れる前に――攻撃を！！
ユークは眼光を鋭くさせ、リオレイアへと突っ込んだ。

第３０話　鬼人と猛毒

ユークはこちらに背を向けたリオレイアへと駆けながら考えた。
攻撃するうえで最も効果的な個所はどこか、と。
急所となる頭か、視覚の要の目か、目障りな尻尾か。
今からすることは恐らく一度しかできない。
ならばそのたった一太刀で相手の戦闘力を地に落とさなくては、一人で頑張ってくれた親友に顔向けできない。

狙いは――足だ。
頭に太刀を突き立てられればそれが最良だが、女王はこちらに背を向けているので頭部は一番遠い。
そこに達する前に気づかれるおそれがある。
目も同じ理由で却下だ。
それに柔らかい眼球なら普通の攻撃でも十分に潰せる。
尻尾は邪魔には違いないが、それよりも突進や火球のほうが危険だろう。
ここは突進という攻撃方法と機動力を奪う。

ユークは走りながら鉄刀【禊】を横に構え、その切っ先を女王の足へと真っ直ぐに向けた。
そしてイメージする。
自分の心の中に息づく、この闘争心を極限まで高ぶらせる光景を。
それは暗闇の中に灯る『黒炎』
最初は吹けば消えてしまうようなとても小さいもの。
しかしさらにイメージしてゆく。
その自分の心を映す炎をどのようにしたいのか。
僕の場合は――

闇が消えるほど明るく
全てを飲み込むほど巨大で
万物を無に還すほどの獄炎を
静かなる凪いだ世界の中心に

――ゆっくりと心の中で膨れ上がる、無限に広がる灼熱の黒い炎。
それを一ヶ所に集約させる。
暴れ回る炎を意思の力で抑え込み、服従させ、力へと昇華。
やがてそれを心の中から取り出し、胸を通り、腕を伝って、太刀へと纏わせ、そして刃の先へと全てを集める。
――完成、した。

「はあああッ！！」

ユークは腹の底から咆哮し、血のようにどす黒く光る太刀を女王に突き刺した。
練りに練った練気を刃先に集中させ、突きに特化した『鬼人斬り』
それはリオレイアの堅い鱗をやすやすと砕き、太い足を反対側まで貫通した。

『グオオォオオ！』

女王が激痛に吼え、その巨体がグラリと傾いた。
リオレイアの鮮血を浴びるユークの目が見開かれる。
その巨体がゆっくりと倒れるのはユークがいる方なのだ。
ユークは柄に力を込め、刃の真ん中まで食い込んだ太刀をリオレイアの足から引き抜こうとする。

しかし――抜けない。
飛竜の強靭な筋肉に挟まれた太刀がビクともしない。
躍起になるユークに覆い被さってくるリオレイア。
ついに押し潰される寸前になってユークは武器を諦め、その巨体から逃れた。
巻き上がる土煙と共に見えなくなる鉄刀【禊】
しかしユークはそれからすぐに目を切り、シグの元へと駆け寄った。

「シグ、大丈夫!?」

「ユークか…ずいぶん、と…遅かったな…それに、酷い…格好だ」

「ごめん」

全身にリオレイアの血を滴らせたユークは遅くなった事を謝ると、大剣を杖がわりにしてかうじて立っているシグに肩を貸し、出来るだけ遠くへと離れた。
やがて十分に距離を開けたと判断したユークが近くの物影にシグを座らせ、容態を調べる。
シグはじとっとした嫌な汗を額にうかべ、座っているだけでも辛そうだった。
肩を上下させながら浅い呼吸を繰り返し、血色が悪いのか肌の色が浅黒くなっている。
何より目に覇気がなく、瞳孔が開きかけていた。
これはもしかして……

「シグ、リオレイアの尻尾に当たった?」

「腹に一度だけ……」

喉の奥から絞り出すような呟きを聞いて、ユークは急いでシグの防具の留め金を外した。
胴体の鎧【ランポスメイル】がなくなって見えたシグの腹部、そこのインナーは少しだけ赤く染まっていた。

「ちょっと見させてもらうよ」

一言断りをいれてから、ユークは自分の体に付いた飛竜の血を素早く拭い落とし、シグの血で滑るインナーを破る。
顔を表したその傷口は紫色に変色しており――毒に冒されていた。

「どう、なってる……？」

シグが弱々しい声で聞いてきた。
その様子から察するに解毒する余裕もなかったのだろう。

「ん、傷は深くないよ」

ユークはそれだけ返してポーチを漁った。
リオレイアの尻尾の棘に含まれる猛毒は速効性だ。
アプトノスなどの中型モンスターでも僅かに掠っただけで即座に昏倒し、一分とかからず内臓や脳を破壊されて死に至るという凶悪なもの。
それをモンスターよりも体の小さい人間が受けてしまえば、即死してもおかしくはない。
いつ頃毒をもらったのかは分からないが、シグがまだ生きている事が奇跡に近かった。

ユークは取り出した解毒薬の一本を飲む用としてシグに渡し、もう一本を何の予告もせずに傷口にぶっかけた。

不意を突かれたシグが痛みにうめき声をあげる。
痛がるシグを見て悪いとは思ったが、これも必要最低限の応急処置だ。
ユークは小さく詫びてから立ち上がった。

「……待て」

しかしすぐにシグから制止の声がかかり、ユークの足が止まる。

「どうかしたの？」

「お前、武器はどうした」

シグが顔をしかめながら、ユークの腰の鞘に何も入っていない事を指摘する。

「武器は……」

あの太刀は今頃リオレイアの下敷きになっているんだろうけど――

「途中で……落としちゃったんだよねぇ」

さすがにこの言い訳は苦しいと自分でも分かっているのか、ユークの笑顔が少しひきつる。

「そうか。……なら俺も一緒に探してやる」

しかしシグは気にせず立ち上がる。
まさかあの言い訳を信じた訳ではないだろうから、ユークの行き先をちゃんと感づいているのだろう。

だが、そのボロボロの体で向かうには少し無理がある場所だった。
「いいよ。自分の武器くらい自分で見つけるさ」
「まあそう言うな」
そう言ってユークの肩を叩くシグの足取りは、意外としっかりとしたものだった。
フッと笑顔を浮かべた顔もだいぶ色が良くなり、死人のようだった目にも生気が戻っている。
解毒薬が効いてきているのだ。
「……さすがだねぇ」
「何がだ？」
小声で言ったはずの独り言をシグに拾われて、ユークは笑って誤魔化した。
シグは明らかに元気になってきている。
それはつまり、体の中に入り込んだ毒が抜けてきているということだ。
しかし先に言った通りリオレイアの毒は猛毒であり、解毒薬を服用したからといって僅か数分で完全に中和できるほど生半可なものではない。
そもそも毒に冒された瞬間にシグが死なかった事もおかしいと言える。
シグの体に入った毒の量は、人間の致死量を遥かに越えているはずなのだ。
それでもまだ生きているということは、シグの体が異常なまでに頑丈だということなのだろうか？

もしかしたらシグの中にはこの毒に対する免疫があるのかもしれない。
――いや、飛竜の持つ毒に抗える人間などいるはずがない。
免疫がつく遥か前に、普通の人間は死ぬはずだからだ。
何はともあれ、シグが人間離れしてるということは確かだ。

「それじゃあ行くか、お前の太刀を探しに」

すっかりいつも通りに戻ったシグがメイルを身に付け、ユークの隣に並んだ。

「そうだねぇ、行こうか」

ユークもいつもの笑顔で返し、二人は今から向かう先を見据えた。

第３１話　勝利の兆しと――

温暖期が近いとはいえ山から吹き下ろしてくる風はまだ少し冷たく、清涼な空気と共に村に涼しさを運んできてくれる。
その風が火照った体を冷やしてくれる心地よさに、シグは目を閉じて一息ついた。
彼が今いるのは先程まで戦闘を行なっていた場所から程近い、ちょうど村と山との境目に当たる場所だった。
木にもたれ掛かって夜空を見上げると、ほんの少し前まで頂点に輝いていると思っていた月がもうだいぶ傾いている。
自分が感じていた以上に長い時間が経っていた事に軽く驚きながら、シグは少し離れた所にいるユークへと視線を戻した。
ユークもちょうどこちらを見ていたようで、彼は自分の目を指差した後その手で村の方向を指す。
シグもそちらに目を凝らしてみると、ここからそう遠くない所で何か巨大な影が動いたのが見えた。
あの大きさ、飛竜に間違いない。
やけに動作が緩慢にみえるのはユークが片足を潰してくれたからだろう。
シグが再びユークを見ると、彼はこちらに手のひらを向けて小さく頷いてみせ、静かに屈伸などを始める。
こちらに『待て』と言っておきながら自分は動く準備をするということは、囮になるつもりか。
シグは背負っていた大剣を抜き、その切っ先を地面につけて柄を力いっぱい握りしめてみた。
――大丈夫、もう元通りだ。
正直、ついさっきまで死にかけていたこともあってちゃんと動けるのか少し不安だったが、これなら心配なさそうだ。
ふと、死にかけたといえば……、とシグは大剣を背に戻しながら物

思いに耽りだした。
毒をもらってからユークが助けに来てくれるまでの間、朦朧とした意識で戦っていたせいか走馬灯らしきものを見た気がするのだ。
それだけならまぁいいのだが、その中でいの一番に浮かんできた人物にシグは首を傾げた。
それはメイではなくユークでもなく、ましてや両親でもない。
もちろん知り合いではあるのだが……。

結局その答えが見つかる前にユークが動いた事で、否応なしにシグも現実に目を向けなくてはいけなくなった。
手負いのリオレイアの前に躍り出たユークだが、実は何の武器も持っていない。
その手に握られているのは拳大の石ころ。
ユークは振りかぶるとそれを思いきり投擲した。
放物線を描くまでもなく直線的に飛んだ石ころは見事なまでに女王の眉間へと当たり、軽い音を立てて弾かれた。
その巨大な目がユークを捉える。
リオレイアはそれが自分に傷を負わせた人間だと気付いたのか、いつもよりもさらにでかい声で吼えた。
その咆哮は遠く離れたシグの体を揺らすほどのもので、より音源に近いユークは下手すると鼓膜が破れていたかもしれない。
だがユークは耳を塞いでそれを堪えると、リオレイアに背中を見せて逃げ出した。
ユークは右に左に、不規則な軌道でジグザグに走ってリオレイアに的を絞らせないようにしながらシグの方へと走ってくる。
リオレイアは怒りに思考が鈍っているのか、火球は吐かずにその足で踏み潰そうと追いかける。
しかし未だ太刀が突き刺さったままの足ではあまりスピードが出ておらず、逆に振り切ってしまわないようにユークが気をつけていることがシグには分かった。

木の陰に身を潜めているシグは飛び出すタイミングを計る。
リオレイアの体の色が分かるほど近づいた。
――まだ早い。
ギラついた眼光が分かるほど近づいた。
――まだだ。
巨体の輪郭がはっきりと見えるほど近づいた。
――あと少し。
重々しく動く足の動きが見えるほど近づいた。

――今だ！

シグはリオレイアへと一直線に走り出した。
走り出してすぐにユークとすれ違い、彼もUターンしてシグに続く。
あっという間にリオレイアの巨体が目の前に迫る。
轢かれれば間違いなく死が待ち受けていた。
しかし二人は恐れず、またその必要がないことを知っている。
なぜなら――

シグは走る勢いはそのままで大きく足を開き、地面を滑りながらリオレイアの懐へと潜り込む。
接触して首がもっていかれないように精一杯身を屈めながら背中の大剣をひっつかみ、低姿勢から腰ごと持ち上げるようにして抜刀。
そして倒れんばかりに全体重を前へと込めて縦に斬りつける。
超重量の女王とそれよりも軽く小さく、そして遅いシグ。
その両者が激突すればどちらが勝つのか、結果は火を見るより明らかだ。
しかし大剣の刃が女王の腹部に当たる直前、女王の体が小さく痙攣したかと思うとその動きが急に止まった。
片足を上げたまま不自然に止まってしまったリオレイアの足。

しかしその体は慣性に従って前に進もうとする。
そこでシグの大剣が女王の腹を小さく斬り裂いた。
それはシグの腕力とリオレイア自身の体重、双方の力を受けてさらに大きく引き裂いてゆく。
シグは両腕の骨が軋むのを感じながら必死に力を込めた。

「ぐ、おおお！！」

肩が外れるかと思った。
肘が変な方向に曲がったように見えた。
手首に燃えるような激痛が走った。
しかし、振り切った。

リオレイアの腹をバッサリと真一文字に切り裂いたシグはそのまま前転するように倒れこむ。
シグの背後でリオレイアも倒れると、それきり動かなくなった。

「ユーク！目を潰せ！！」

しかしシグは親友にさらなる攻撃を指示する。
ユークはリオレイアが倒れた時に折れた太刀を拾い上げると頭の方へと回り込み、途中から刀身がなくなった太刀を女王の蒼眼に突き立てた。
辺りに血液が飛び散り、リオレイアが声にならない悲鳴をあげる。

そう、リオレイアはまだ死んでなどいない。
動かない、いや『動けない』のは体が麻痺しているからだ。
女王の巨大な足の下にあるのはシグが仕掛けた『シビレ罠』
大型モンスターでも一瞬でその体の自由を奪ってしまう超強力な狩猟用の罠だ。

たとえ飛竜といえども一度掛かってしまえばまず二分間は動く事ができない。

「シグ、打ち込んで！！」

ユークが女王の右目に刺した太刀を手放し、そう叫んだ。
なるほど、眼球の奥は脳がある。
しかもそこには鱗も骨もない。
大剣をハンマーのように使い鉄刀をさらに埋め込めば、その刃は生物で一番大事な器官を破壊するはずだ。
そしてその一撃で終わる。

「分かった！今行く！」

勝利を確信したシグは若干の笑みすら浮かべながらリオレイアの体を回り込み、そしてその笑みが凍りついた。

動い、た……？

いや、まさか。

こんなに早く麻痺が抜けるはずがない。

ではなぜ首が少し持ち上がっている？

なぜ口の開きが少し大きくなっている？

――冗談だろ？

次の瞬間、リオレイアがユークの右腕に食らい付いた。

第３２話　油断と代償

シグの目にはその全てがスローモーションに映った。
リオレイアの鋭利な歯が金属の鎧を噛み砕き、ゆっくりと肉にめり込んでいく。
それと同時に噴水のように吹き出る鮮血の一滴一滴までもが、はっきりと見てとれた。
月光が煌々と輝く夜中、そこだけ鮮やかな赤い雨が降る光景はまるで何かの歌劇のワンシーンのようで、現実感がなかった。

「あぁあああああああああああああああああ！！！」

遅れて聞こえてきた絶叫。
シグは我を取り戻した。
そうだ、今は呆然としている場合ではない。
あの鋭い歯はすぐにでも親友を噛みちぎってしまうだろう。
そうは――

「させるかあああ！！」

シグは腹の底から哮りながら全力でリオレイアの――ユークが風穴を開けてくれた右足へと大剣を遮二無二叩きつけた。
足の運びや重心の移動などといった剣のなんたるかを一切気にできず、ひたすら力だけを込めた一撃。

それだけにその太刀筋には速さも重さもない。
当然ながらシグの大剣は強固な桜鱗の前に阻まれ、リオレイアの肉を裂くことはなかった。
シグが焦りすぎたせいというのもあるが、如何せん武器がなまくら過ぎるのだ。
たった数度しか斬りつけていないにも関わらずシグの大剣はすでに刃が丸まっており、物を斬れる状態ではない。
最も粗悪な素材で作られた剣ではこれが限界だった。

――だが、刃が通らなくとも、斬れなくとも、シグが込めた想いの重さは敵に届いた。

『グオオォオオオ！！』

リオレイアが頭をもたげながら苦痛の叫びをあげ、今にも噛み砕かれそうだったユークがその口から離れる。
勢いよく放り出されたユークの体は何度かバウンドしながら地面を転がり、やがて砂埃を上げて止まった。
傍目から見ても受け身をとっていない痛そうな転がり方なのに、当のユークはうつ伏せに倒れたままぴくりとも動かない。

「ユーク！！――くっ」

急に巻き起こった突風に煽られてシグは倒れそうになる。
顔を庇いながら風の発生源を見ると、リオレイアが巨大な翼を羽ばたかせて上空へと飛び上がる所だった。
シグが忌々しげに見上げる中、右足が不自然な方向に曲がったリオレイアはあっという間に山の向こうへと飛び去っていった。

「ユーク！！」

それを見届けるより先にシグは大剣を放り出して親友の元へと駆け寄る。

力なく倒れていたユークを仰向けにひっくり返して素早く鎧を脱がしたシグは、その傷を間近で見て思わず呻いた。

ユークの細い胴体にはリオレイアの歯形に沿って、まるで刃が欠けたナイフで抉られたような跡が無数についており、傷口からは血が止めどなく流れ出ては周囲の土に染み込んでいる。

このままでは明らかにマズイ。

ユークの顔からは血の気が引いて白くなり始めている。

とにかく止血しなくてはとシグは包帯を取り出してユークの体に巻き、傷がある場所を手で強く押さえつけた。

しかし血が止まらない。

見る間に白かった包帯に赤色が滲み、最初からこの色だったのではないかと思えるほどに真っ赤に染まってゆく。

「くそッ、止まれ……！」

どんなに力を込めても、どんなに願いを込めても、ユークの血は止まらない。

シグは医学に関してはド素人だ。

患部を圧迫する以外の止血方法は思い付かない。

しかしこうして無為な時が過ぎるだけでユークの血が、生命が流れ出ていく。

既に黒い血だまりが、ユークの傍らに膝まずくシグの足元まで広がっていた。

「くそっ、くそッくそックソッ！止まれ！止まれよ！」

俺のせいだ。
ユークが死にかけてるのは、俺のせいだ。
油断していた。
勝てると。
俺達だけであの火竜に勝てるんだと、油断していた。
俺は気づいていた。
罠に掛かったはずのリオレイアが動いたことに。
罠が効いていなかったことに。
確かに気づいていた。
だが声が出なかった。
俺が一声掛けるだけでユークは気づく事が出来ただろう。
身のこなしが軽いこいつなら避けることも出来ただろう。
こんな酷い目に合わなくて済んだだろう。
こんなに血を流して苦しい思いをせずに済んだだろう。
俺が油断してなかったら。
俺が声を掛けてやれてたら。
俺が、俺さえしっかりしていれば。

「お兄ちゃん！！」

体を乱暴に揺すられてシグはハッとした。

必死になるばかりに力を込めすぎていたのだ。
これでは止血するつもりが逆に傷を悪化させかねなかった。

「ユークさんは私が看てるから、お兄ちゃんはお医者さんを呼んできて！」

いつの間に来ていたのか、すぐ隣にはメイがいた。

「だが――」

「私は診療所がどこにあるか分からないの！お願い、急いで！」

シグがここに残ると言い出す前にメイが反論の芽を摘んだ。
そう言われてはシグに言い返す事はできない。

「……」

「お兄ちゃん！！」

「……分かった」

メイの剣幕にシグが折れた。
本当は親友の近くにいてやりたかったが、彼が助かるには医者の力が必要だ。
そして医者に診せるにはシグが動くしかない。
最初から選択の余地はなかった。
包帯の上から患部を圧迫していた手を離すと、シグの手の平からユークの血が滴り落ちた。
それはシグに代わってユークを止血しようとしているメイの手の甲に当たり、弾けた。

「……お兄ちゃん」

今までとは打って代わり、静かに語りかけるような妹の声。
それを聞いたシグは踏ん切りをつけるように勢いよく踵を返した。

「すぐに医者を連れて来るから絶対ここで待ってろよ」

そう言い残し、シグは村の方へと全力で走り出した。
それはメイに向けて言ったのか、それともユークに向けて言ったのか……。
止血する事に意識を集中していたメイには考える余裕がなかった。

第３３話　独断

「連れて来たぞ！」

シグは二人の元に駆け寄りながら、息も絶え絶えにそう叫んだ。
その背中には一人の老人。
シグにおぶさっている白髪の老人は慌てて着たせいか上着のボタンを一つかけ間違えており、手にはちょっとした大きさの救急箱を握っていた。
フレームが歪んだ丸眼鏡は老人の姿を少し滑稽に見せるが、そのガラスの奥には患者を前にした真剣な目がある。
彼がこの村でただ一人の医者だった。

「その青年が怪我人じゃの？」

「は、はい。そうです」

老人はシグの背中から降りながらメイにそう確認をとると、未だ力なく倒れているユークの容態を確かめだした。
布で素早く血糊を取り除き、リオレイアにつけられた無数の傷を調べていく。
暫くそうしていた老人だったが、やがてぽつりとこぼした。

「これは……まずいのう」

「まずいって、ユークは助かるんですか！？」

それを聞いた途端にシグが怒声のような声を上げる。

「助かる確率は五分、……いや、三割あるかどうかといった所か」
「そんな！　何とか――」
「するのがわしの仕事じゃ。兎に角、早よう診療所に運ぶんじゃ」
老人はそう言うと、診療所からシグに持って来させた担架に乗せるように指示を出した。
冷たいとも言えるその淡々とした老人の声に、高ぶっていたシグの感情が徐々に落ち着いていく。
今は口を出すよりも医者の言う通りに動く方が大切だと分かったようだ。
一刻も早く治療のできる場所へと運ぶべくシグが脇を、メイが足を抱えてユークを担架に乗せる。
二人はそのまま担架を担いで診療所へと向かい始めた。
「おぬし現場におったのだろう。その時の詳しい状況を教えてくれ」
ユークの負担にならないように早足程度のスピードで歩きながら、担架の隣を行く老人が少し辛そうにシグに問いかけてきた。
二人はもっと急ぎたいくらいなのだが老いた医者にはこの速度でも大変らしく、すでに息が切れ始めている。
前を行くシグは柄の重さを感じながらあの時の説明を始めた。

「お兄ちゃん、大丈夫？」
硬く粗末なベッドの上からメイが話しかけてきたのは、二人が家に戻ってきてから一時間が経とうとしていた頃だった。
ユークは緊急に手術を行う事になり、狭い診療所内で邪魔になる二人は追い出されたのだ。

「……何が？」

両腕を枕にして床に寝転がっていたシグは数秒の間を空け、妹と同じく潜めた声で聞き返した。
その目はただただ天井の一点を見上げ続けている。
もう結構な時間横になっているのに、目も瞑らずにそうやっているのだ。
まるでそこに何かが映っているかのように見つめ続けていた。

「その……、思い詰めてるようだったから」

そう言ってしばらく待っていたが、シグは反応を返さない。
寝ちゃったのかな？　とメイは部屋の隅の方へ目をこらしてみたが、灯りを何もつけていない暗闇の中では兄の姿をぼんやりとしか見る事ができなかった。
ただ、寝てはいない。
そう感じた。

「お兄ちゃんのせいじゃないよ」

メイは体を起こし、静かに続ける。

「話は聞いたけど、ユークさんが怪我したのはお兄ちゃんのせいじゃないよ。咄嗟のことだったんだし、相手はあのリオレイアだったんだから。あれをたった二人で追い返すのって本当にすごいことなんだよ？　だからお兄ちゃんを責める人なんて誰もいないし、それに――」

そこまで言ってメイは口を閉ざした。
寝転がっていたシグには彼女の慌てた様子に気付くこともできず、無反応のまま。

「と、とにかく。お兄ちゃんが落ち込んでたってしょうがないよ。ほら、あのお医者さんも何とかするって言ってたもの。きっとユークさんは大丈夫だよ！」

それから何とか元気づけようとするメイの言葉にも押し黙ったままだった。
しかし、いよいよメイにもかける言葉が尽きそうになった頃、シグが静かに口を開いた。

「……メイは」

「あっ、うん！」

やっと兄が反応を返してくれた事にメイの声のトーンが高くなる。

「……メイは、飛竜に噛まれた人間を見たことがあるか？」

メイには、答えられなかった。
勿論ある。

彼女程のハンター歴を持つ者なら誰しも経験がある事だろう。
メイもすぐ目の前で人がモンスターに噛みつかれる瞬間を見たことが何回かある。
正確には『食われた』瞬間を、だが。
言うに及ばず、その人達は皆死んだ。
ユークは噛み千切られたわけではないが傷は浅くない。
骨だって何本も折れただろうし、内臓も痛めていることだろう。
何より血を流しすぎた。
先の質問に対しても、ユークの状態に対しても、自分の正直な意見を兄に言うのは憚られた。

「……そうか」

黙ってしまった妹の態度で問いかけの答えを読み取ったシグは、それだけ呟くと寝返りをうってメイに背を向けた。
メイもこれ以上は何も言えなかった。
どのみち今のシグには何を言っても徒労に終わっていただろう。
メイは静かに横になると薄い毛布を口元まで引き上げ、ちらりとシグのいる方へと視線を移した。
やはりシグの様子はよく分からない。
でも悲しみに暮れているというわけではないようだ。
別にユークが死んだ訳ではないのだからそれもそうなのだが……、
『悲』の感情がないからこそ今は悔しさや怒りで心が満たされてるのではないのか、そんな不安がメイの中にはあった。
『怒』の感情は実力以上の力を引き出す事もあるが、思考が短絡的になってしまう。
それはとても危険な事だ。
しかし、今はどうしようもない。
心の整理がつき、物事を冷静に思慮できる状態になってくれないと周りが何を言ってもシグの心には響かないだろう。

今が夜なのは幸いだったかもしれない。
一晩という長い刻が過ぎれば感情にとらわれて狭まっていた視野も広がり、柔軟な考え方もできるようになるものだ。
それに、いくら何でも夜の狩り場に一人で出ていこうとするほどシグも愚かではないだろう。
あとはユークの容態次第だ。
最悪、もし彼に何かがあれば……シグがどう動くかは予想に難くない。
間違いなく仇討ちに行くだろう。
そうなるとメイもフォローが難しくなる。
何かを守りながら戦うのは並大抵のことではないのだ。
重症のユークは勿論気になるが、メイにはシグの事が同じくらい心配だった。
だが、そろそろ彼女の瞼も重くなってきていた。
もうかなり遅い時間だ。
メイは思考の中に緩やかに浸透してくる睡魔を感じながら、兄の背中に向かって『おやすみなさい』と心の中で呟いた。

窓から差し込む朝日が眩しくてメイは目を覚ました。
目覚めはいつものように悪い。
目はショボショボするし頭が重い。
たぶん髪も好き勝手にハネているだろう。
いくら身内とはいえ兄にこんな顔を見せるのは恥ずかしいので、メ

イは枕に顔を埋めた。
そのまま二度寝してしまいそうだったが、その甘美な誘惑を何とか振り切ってベッドから降りる。
ぼっとしない意識でメイは部屋の中を見渡してみたが、シグはいなかった。
近くの川まで水を汲みに行ったのか、昨日の事を村長に報告しているのか。
そんなところかなぁ、とメイは当たりをつけてベッドの縁に腰かける。
起きた直後には何もしないし、する気になれないのが彼女の習性なのだ。
しばらく見るともなしに部屋を見渡していたメイだったが、部屋の隅に視線がいった瞬間、弾かれたように立ち上がる。

大剣がない！

昨夜はボックスの横に立て掛けられていたシグの武器がないのだ。
部屋の中を隅々まで見渡しても見つからない。
あんなに大きな剣だ、元より隠せるような場所もない。
武装して村の見回りにでも出かけた？
あり得なくはないが、それなら置き手紙の一つでも残していくだろう。
考えられる可能性はただ一つ。

「もう！！」

メイは大急ぎで鎧を身につけ、双剣を引っ付かんで家を飛び出した。

第３４話　再戦

メイが夢の中へと旅立った頃、シグは横になったまま耳を澄ませていた。
長いこと静寂の中にあった彼の耳は普段よりも敏感になっており、家の柱が軋む僅かな音さえも聞き取れる。
そんな中、ベッドが置いてある部屋の奥から小さな寝息が聞こえてきた。
それを確認したシグは音を立てないように気を付けながら立ち上がると、凝った肩を軽く回しながら壁に立て掛けている大剣と防具を持ち、足音も立てずに家の外へと出た。
防具を着る時は金具同士が擦れ合って結構大きな音がでるので、外で着替えるつもりなのだ。
シグは早速グリーヴを足に取り付けようとして――その動きが止まった。
しばらく何かを思い出すように目を瞑っていたシグだったが、一度防具を地面に置くと再び家の中へと戻る。
アイテムを入れるポーチを忘れてきたことに気付いたのだ。
立て付けが悪くなってきたドアが軋まない様に慎重に開け、足音を立てないように静かに歩く。
そしてアイテムボックスの縁まできたシグは中を覗き込んだ。
家の中は光量が十分にあるとは言えないが、目的の物がボックスに入っていないことは分かる。
それではどこにいったのか？
正直、数時間前に鎧を脱いだ時は上の空だったから良く覚えていないのだ。
仕方がないので家の中を探し回ることになった。
なに、家具も必要最低限しかなくワンルームのこの家では探し物などすぐに見つかる。

今回も大して苦労することなく、目的のものを見つけることが出来た。
鞣革で作られたポーチはベッドの足の近くに無造作に落ちていたのだ。
普段ならたとえ鎧を脱ぐときにでも腰のフォールドからポーチを取り外すことはないのだが、こんな所に落ちていたということは無意識のうちに取っていたのだろう。
もしかしたら外した後に落としていたかもしれない。
この中には回復薬の瓶なども入っているから、割れていないか少し心配だ。
シグは忘れ物のポーチを拾い上げると、踵を返して家から出ようとした。

しかし――ふと、目がいってしまった。
目の前の妹に。

ベッドの中で肩まですっぽりと毛布に包まったメイは、何とも幸せそうな顔で眠っていた。
小さく開かれたピンク色の唇の隙間から漏れる、微かな寝息。
ほのかに染まった桃色の頬。
後ろでポニーテールにまとめていた髪は解かれている。
そんな妹の側に立ち尽くしたまま、シグは固まっていた。
その顔に浮かぶのは罪を犯し、彼女を裏切る事への罪悪感。
ハンターという生き方に誇りを持っているメイは俺の行いを許さないだろう。
失望されてしまうかもしれない、軽蔑されるかもしれない。

それでも――

シグは今度こそ踵を返して家を出た。
すばやく鎧に着替え、不備がないことを確認したシグは走り出した。

夜のキャンプはやはり暗い。
まだ日が昇っていない時間であるし、そのうえ頭上には葉が生い茂っているのだからそれも当然だった。
そして、青い支給品ボックスには当然ながら何も入っていない。
これは誰からの依頼でもないからだ。
シグが今森丘のベースキャンプにいるなどと考える者は村の何処にもいないだろう。
誰が好き好んで視界の悪い夜間に危険な狩場などに来るものか。
皆が皆そう思うだろうし、実際シグもそう思う。
だが朝を待ってなどいられない。
飛竜はどんな酷い傷でも数時間の睡眠でそれを完璧に治してしまうという。
にわかには信じられない話だが、もしその驚異的な回復力をあのリオレイアも持っているのだとしたら、手をこまねいるわけにはいかない。
ユークが大事にしていた武器を、その身を、犠牲にしてまで負わした傷だ。
それを無駄にすることは許されない。

シグは迷いのない足取りで狩場へと進んだ。
奴の居場所は分かっている。

――いた。
シグは巨大な洞穴の入り口に伏せて中の様子を窺っていた。
洞穴と言っても天井には大きな穴が開いているため月光が入り、視界は確保できる。
そんな洞穴の中、ちょうど中央に位置するところに奴がいた。
桜の花びらのような色をした甲殻、小さな家ほどもある巨体。
見間違えるはずもない。
『雌火竜』『陸の女王』『リオレイア亜種』といろいろな呼ばれ方があるが、つまりは敵だ。
それは空へと羽ばたくための巨大な翼をたたみ、丸太のように太い尾をだらんと垂らし、ユークの体をずたずたにした凶悪な歯が生える頭を地に着けていた。
明らかに休息をとっていると見ていいだろう。
右目には未だにユークの太刀の柄が突き出ていた。
飛竜の巣にはそこの主が食い残した肉を狙って小型の肉食モンスターがいたりするものだが、幸いにもランポスなどの姿はない。
これほどのチャンスはまたとない。
シグは背中の大剣を静かに抜き、金属製の靴底が食い散らされた骨の残骸を踏み砕かないように気をつけながら敵に接近した。
一歩、二歩と足を進めるごとに手に余計な力が加わっていくのが自分でも分かる。
それは恐怖からではない。
それは――
いよいよ、シグはリオレイアの頭のすぐ側まで来た。
女王はハンターの存在に気付いた様子もなく眠り続けている。
シグは荒れる呼吸を整えると、ゆっくりと大剣を下段に構えた。
アームがギシギシと軋んだ音を上げているが、さらに強く柄を締めつける。
一際大きく軋み、骨で出来た柄が折れてしまうのではないかと思わ

れた瞬間、シグは大きく足を踏み出して大剣を振り上げた。
唸りを上げて振るわれたそれは火花が飛ぶほどの激しさで太刀の頭にぶち当たり、鈍い音を上げて弾かれる。
そしてシグの大剣で叩かれた太刀はその力を余すところ無く受け取り、リオレイアの頭に深く食い込んだ。

『グオオォオォオオ！！』

激痛により眠りから一気に覚醒させられたリオレイアが苦痛の叫びを上げる。
それはつまり、ダメージを負わせることはできたが仕留め切れなかったということだ。
力を込めすぎてシグの奥歯が悲鳴をあげる。
さらに攻撃を加えようにも、リオレイアが痛みからしきりに頭を振っているので近寄れない。
下手に近づけばそれだけで吹き飛ばされるか、地面に叩きつけられて圧死させられそうだ。
そうしてしばらく暴れていたリオレイアだったが、やがて動きを止めると、残った蒼眼の血走った眼光でシグを睨みつけてきた。
その口からは赤々とした死の炎が漏れ出ている。
明らかに、怒っていた。

飛竜の怒りは、それを前にする者にとってこの上なく危険だ。
怒り狂った飛竜は敵以外の一切を眼中に入れず、潜在された全ての力を爆発させ、ただただ殺すためだけに行動する。
それはまるで今までの戦いがお遊びに感じられてしまうほどの、圧倒的な変化。
故に獣は、飛竜は、手負いが一番手強いのだ。

しかし、そんなリオレイアも万全ではないことがシグには分かる。

リオレイアはあれほど怒りを露にしているにも関わらず、全く立ち上がる様子が無い。
否、『立たない』のではなく『立てない』のだ。
それはつまり、ユークが負わせた傷がまだ癒えていないということに他ならない。
それを見極めるまでもなく、シグはリオレイアに向けて突貫した。
狙うは太刀が鍔まで埋まり込んでとめどなく血が流れ出ている、その右目。
しかしシグが走り出すと同時にリオレイアも頭を持ち上げていた。
その口腔から吐き出されるのは数千度にもなる炎の塊。
すでに目が慣れたその攻撃をシグは余裕を持って避けようとして、瞬間的に体が勝手に横っ飛びをしていた。
轟々と燃え盛るそれはシグの予想していたものよりも一回り大きく、そして速かったのだ。
体がまだ宙に浮いている状態でシグが憎しげにリオレイアを視界に入れると、敵はすでに次弾を吐き出したところだった。
――速い！
シグは素早く受身を取ると間髪入れずに再び跳ぶ。
その瞬間に背後で爆発が起こり、シグは爆風で吹き飛ばされて受身すら取れずに無様に地面を転がった。
シグは体の下敷きになった右手首の痛みを堪えながら、それでもすぐさま立ち上がる。
第三弾、第四弾と迫る火球を寸でのところで躱すと、そのままリオレイアを中心に半円を描くように走りだす。
背後へと回り込もうとするシグにリオレイアは向き直ろうと首を捻るが、立ち上がることはしない。
完全に後ろをとったシグは大剣を背中に戻すと、リオレイアの背後へと針路を変える。
リオレイアもそれを気配で感じとったのか、尻尾を大きく振り上げると地面ごとシグを粉砕しようと薙ぎ払う。

ハンターの下半身を刈り取ろうと唸りを上げて迫る、猛毒の刺を無数に持つ桜色の尾。
しかしシグはその軌道を冷静に読むと、飛び込み前転の要領で尻尾を飛び越え、助走をつけて一気に女王の背中に飛び乗った。
飛竜の背に乗ったシグはポーチから素早く四本のナイフを取り出し、両手に二本ずつ構える。
そして剥ぎ取りを行う時のように甲殻と甲殻の間にナイフを走らせた。
ブチブチと肉を断つ感触を感じながら、シグの手が赤く染まる。
やはり大剣をものともしないリオレイアの甲殻でも、小さな刃物で甲殻の隙間を正確に狙われたら阻むことは出来ないようだ。
シグは自分の考えが正しかったことを感じながらナイフから手を離す。
と同時に足元が大きく揺れ、シグはリオレイアの背中から振り落とされた。

「――ぁぐっ！」

全く身構えていなかったために硬い地面で右腕を強かに打ち、体の芯に響くような痛みが肩に走る。
先ほどは手首を、そして今回は肩を痛め、度重なる右腕へのダメージにシグの顔が苦痛に歪んだ。
さすがにこれでは大剣を握れないと感じたシグは左手で回復薬を取り出して一気に煽る。
緑色の液体が喉を通ると同時に、完全にではないがすっと痛みが和らいだ気がした。
シグはそれで十分だと言わんばかりに右手で大剣を掴み、荒々しく抜いた。
そして再びリオレイアの正面へと躍り出る。
自分に傷を負わせたハンターの姿を捉えたリオレイアは、口腔に紅

い炎を湛えたまま激しく吼えた。
それは洞穴の中で何度も反響し、屋外の時とは比べ物にならないほどの音の波となってシグを襲う。
シグは鼓膜が破けんばかりの大音量に咄嗟に耳を塞いだが、それでも胆力を振り絞って足だけは止めなかった。
果たしてそれはシグにとって僥倖だった。
もしも咆哮に怯えて動きを止めていたら、間違いなくその後に吐き出された灼熱の火炎に取り込まれていただろう。
危ないところで難を逃れたシグは動きやすいように大剣を中段に構え、地に伏したまま唸り声を上げているリオレイアを鋭い眼光で見据えた。

第３５話　揺らぎ

狙いを違えた火球が背後の壁にぶつかり、派手な音と共に洞穴の中の空気を揺らす。

「はぁ……はぁ……はぁ」

シグは乱れた呼吸を整えながら桜色の女王を視界に収めた。
女王は変わらずこちらを睨み付けながら喉を鳴らして威嚇している。
と、不意にリオレイアが頭を持ち上げて何度目かも分からない火球を吐いてきた。
しかし戦い始めの頃のようなスピードはない。
シグは数歩だけ走って射線から逸れることで、その火球を避ける。
数十分前と比べればリオレイアの火球は目に見えて小さくなっているし、連射速度も遅くなっていた。
両眼の内、残った左目から発せられる殺気は相変わらずだが、いつの間にかその口から漏れ出ていた炎も消えている。
そろそろか……、とシグはもうすぐ来るであろうチャンスのために気を全身に張り巡らせた。
もうすぐ、もうすぐだ。
あと少し待てば――
しかしシグの期待とは裏腹に、リオレイアはまた頭を上げだした。
火球、そう判断したシグは忌々しげに舌打ちをしながら避けるべく行動を開始する。
が、リオレイアは炎を吐かずに頭を下ろしてしまった。
それどころか力尽きたかのようにその頭を地に伏せたではないか。

――来た！！

シグは千載一遇のチャンスに目を見開くと全力でリオレイアへと駆け出した。
あの仕種、敵は間違いなく弱っている。
何故か？
そんなこと決まっている。
『毒投げナイフ』に塗られた毒がやっと効いてきたのだ。
シグがリオレイアの背に乗った際に刺したナイフ、それはある特殊なキノコから取れる毒を塗りたくった、狩猟用の使い捨て武器なのだ。
本来ならば自身の体の中に猛毒を持つ火竜種に毒は効きにくいのだが、体力が落ちていれば話は別だ。
片目を失い、立てなくなるような傷を足に負ったリオレイアには十分に効果がある。
それでも効果が現れるまで数十分かかったが、この隙は大きい。
ユークが重症を負いながらも負傷させ、シグが長時間命のやり取りをして体力を削り、やっと訪れたチャンスだ。
ここで決めなければ次は無い。
シグは重い鎧を着ているとは思わせないスピードでリオレイアとの距離を詰める。
弱弱しく項垂れていたリオレイアだったが、シグが近づいてくることに気付くと緩慢な動作で頭を上げた。
そしていよいよシグが間合いに入った瞬間、リオレイアはそれまでの衰弱した動きがまるで嘘であったかのような鋭い動作でシグに噛みつく。
シグから見ればちょうど左上方からリオレイアの巨大な口が迫ってきていた。
ナイフのように大きく鋭い歯、いっそ毒々しいまでに真っ赤な舌、そしてその奥にぽっかりと空いた、深い闇が広がる口腔。
シグは目を瞑ることなくそれらの細部まで見つめ、そして剣を振るった。

シグを噛み千切ろうと圧倒的な力で迫る女王の口、それを真一文字に切り裂こうと唸りを上げるシグの大剣。
しかし、シグの渾身の一振りはいとも簡単にリオレイアの歯で受け止められてしまう。
そしてシグに残された唯一の武器が、その凶悪な歯で粉々に噛み砕かれた。
一瞬で骨片に変わってしまった愛剣が、絶望が、シグの目に写る。
しかし、その黒眼はまだ力を失ってなどいなかった。

「うおおおおおおおおおお！！」

シグは女王が頭を振るったことでちょうど目の前へとやってきたそれを掴む。
そして残された力を全てひねり出して、前へと押し出した。

『グギャアアアアア！！』

途端にリオレイアが絶叫を上げる。
それは聞いた者の耳を潰すような、まさに断末魔という言葉が相応しい叫び。
やがてリオレイアは土ぼこりを上げながらどうっと倒れると、全く動かなくなった。
今度は麻痺したわけでもなんでもない、死んだのだ。
その証拠に、殺気で満ちていた女王の蒼眼も今は色を失っている。
完全に、死んでいる。

シグはそれを確認すると、女王の潰れた目に突っ込んでいた手を引

き抜いた。
ぐちゅっという気持ちの悪い水音がして、両者の間に粘着質な赤い糸が線を引く。
シグは手を振るってそれを簡単に落とすと、気が抜けたかのように膝が折れてその場に座り込んだ。

シグがあの時に掴んだのは『柄』
そう、リオレイアの右目に突き刺さったままだった、ユークの折れた太刀だ。
シグは最初から大剣で攻撃する気など無かった。
自分の武器がリオレイアの鱗に通じないのは先の戦闘で重々承知。
止めを刺すにはあの太刀を使うしかないと思っていた。
そして、上手くいった。

「はぁ、はぁ、はぁ、……はぁ」

シグは呼吸を落ち着かせると、震える膝に活を入れて立ち上がった。
そして目の前に横たわるリオレイアの亡骸に目を向ける。
しかしその眼差しには初めて飛竜を狩った歓喜も、達成感も無い。
あるのは戦闘後の余韻のような興奮と、やり場のなくなった怒りだけだ。
こいつはユークの仇であり、そして確かに仇は討った。
だが、その死骸を前にしても全く気が治まらない。
むしろ負の感情が増した気がする。
シグは沸々と湧き上がってくる怒りに心を飲まれながら、それでもどこかにある冷静な部分が自分自身に問いかける。
俺は感情に任せてここに来て、そしてリオレイアを狩った。
それは正しいことだったのだろうか……？

――いや、答えなど最初から分かっている。

否だ。
正当な手続きも踏まずに狩りを行い、また自分が奪った命への敬意も払えない。
そんなハンターの基礎中の基礎である心構えを、一切守れていない傍若無人ぶり。
それが正しいわけがない。
しかしどう考えたって敬意など払えるわけが無かった。
これは……復讐なのだから。
友を瀕死の状態に追いやったモンスターへの、復讐。
そう、復讐だ。

「……剥ぎ取り、するか」

シグは思い出したように呟くと、腰の剥ぎ取り用ナイフを取り出した。
のろのろとした冴えない動きでリオレイアに近づき、先ほどしたように桜色の甲殻に刃を立てようとする。
が、その途中で手が止まった。
リオレイアの左翼の下、翼爪の間から半透明の液体が流れ出ているのを見つけたからだ。
それは大した量ではないが、色からして血や糞尿とは違うようだった。
粘度が高いのか、流れるというよりは『垂れる』という言葉が似合いそうなスピードで徐々に地面に広がっていく、謎の液体。
そのまま放っておいても良かったのだが、なぜか気になったシグは邪魔になるリオレイアの翼膜を切り裂いてみた。
薄い割に手応えのある膜を取り除いた先にあったもの、それを見たシグは様々な事を考えずにはいられなかった。
まずは……そう、

リオレイアは、本当に立てなかったのだろうか？
あいつは戦闘中に一度も立ち上がろうとする動きを見せなかった。
それは傷を負った足を庇っているからだと思っていたのだが、本当にそうだったのだろうか？
怪我をしているから立てなかったのではなく、その場を絶対に『動かない』という意思の表れだったのではないのか？
――これを守るために。
シグの見つめる先、そこには卵の残骸が広がっていた。
残骸の量から考えて卵は複数個あったようだが、すべて割れてしまっている。
恐らくは力尽きたリオレイアの体重で押し潰されてしまったのだろう。
先ほどの謎の液体の正体は、狩猟用のハンマー程もあるこの大きな卵からこぼれ出た内容液のようだった。

「……」

シグの眉間に僅かに皺が寄る。
俺と戦っている間中、リオレイアは自分の卵を守りながら戦っていたのだろう。
酷い傷を負い、体中に毒が回り、敵に弱った姿を見せるほど衰弱していたのに、翼の下でずっと庇っていたのだろう。
生まれ来る子供のために、その身を呈してまで。
馬鹿げている、とは言わない。
リオレイアの我が子にかける愛情がどれほどのものだったのかは察するに余りある。
そしてその想いがどれだけ凄くて、尊いのか、理解できなくもない。
もしかしたら、このリオレイアは体の中で暴れ回る毒を必死に耐えながら、番の帰りを待っていたのかもしれない。

もう二度とここには戻ってくることのない夫を、待っていたのかもしれない。
きっと彼女はそのことを知らなかっただろう。
だからこそ、彼女は戦い続けることができたのかもしれない。
満足に動かない体で子を守りながら、愛する者が助けに来てくれるのをずっと信じて――

それこそ馬鹿げた妄想だろう、とシグは自分自身でも思う。
だが、その考えは確かにシグの心を揺さぶった。
恐らくこれが普通の狩りならば『人間に害を及ぼしたお前が悪い、因果応報だ』と思うだけで、こんな気持ちになることもなかっただろう。
だがこれは普通の狩りではない。
これは俺が独断で行った狩りであり、このリオレイアはユークを傷つけたのだから討伐対象になる、という至極当然な理論で行動した結果だ。
その考えは客観性も普遍性もあると信じているが、今の今まで感情的になっていたため少し自信がなくなってきたというのも本音だ。
もっと違う考え方もあったのではないのか、もしかすると俺の行動は村を無用な危険に晒しただけではなかったのか。
そんな事を考えてしまう。
もしも、リオレイアは討伐されて然るべきだという俺の考えが間違っていたとしたら？
実はリオレイアがそれほど危険ではなかったと、多くの人が判断したら？
その時はつまり、俺の行動はリオレイア親子の命をいたずらに奪っただけということになるのだろう。
だが冷静に考えてみても、それが明らかに杞憂であることが分かる。
村民と家屋に被害を及ぼしたモンスターを討伐してはいけないはずがない。

だからといって独断専行は許されることではないので重い罰は科せられるだろうが、結果だけ見れば俺は間違っていない……はずだ。

しかし、そう心の中で決着をつけても、シグは目の前の光景から目を離せなかった。

そのまましばらくの間悶々とした思いで考え込んでいたシグだったが、ふと、いつの間にか閉じていた目を開いた。
微かに、本当に微かにだが、何か物音が聞こえたのだ。
シグは顔をあげて辺りを見渡してみる。
しかし、これといって何も目につくものはない。
洞穴の中は開けているので全体が見渡せるのだが、音を発しそうなものは特に見当たら――

コツコツ、コツ、コツ

また、聞こえた。
今度はさっきよりもはっきりと、何か硬いものを叩くような音が。
シグは目の前で力尽きるリオレイアの体に視線を向ける。
今の音は明らかにここから発せられていた。
まさかリオレイアが生きている？
……恐らくそれはないだろう。
力なく投げ出された四肢に口の隙間からだらんと垂れた長い舌、そして生気を失いピクリとも動かない瞳。
どう見ても死んでいるようにしか見えない。
もしこれが死んだふりだったら、世のハンター達は全員騙されてしまうだろう。
しかしこいつが音の発生源でないとすると、一体どこから……？
シグが頭を傾げている側から、またあの音が聞こえ出した。

だんだん音が大きくなってきている。
シグは剥ぎ取り用ナイフを握ったまま考えていると、やがて一つの可能性を思いついた。

コツ、コツ、コツ、――ガッ！ガッ！

まるでそれが正しいといっているかのように、音が激しくなる。
まさか、と思いながらもシグはナイフでリオレイアの翼膜をさらに切り裂いていく。
そして左の翼にあたる火竜の翼膜をシグが切り除いた瞬間、一際大きな音が洞穴に響いた。

バキッ！！

何かを突き破ったかのような音を聞きながら、両者の視線が交差する。
片や、吸い込まれそうになる程に黒い、シグの困惑した黒眼。
片や、蒼穹を写したかのように蒼い、リオレイアの無垢な蒼眼。

リオレイアの幼竜が、そこにいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3852f/

ＷＹＶＥＲＮ ＷＡＲ

2010年11月4日13時52分発行